

福岡市西区

原深町遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第71集



1981

福岡市教育委員会

福岡市西区

原深町遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第71集

1981

福岡市教育委員会

序 文

近年 市周辺部における都市化の傾向は留まるところを知らぬものがあり、これに伴い自然の景観も大幅に変容しつつあります。

今回の発掘調査は、このような人口の増加に伴う、児童生徒の急増に対処するため、昭和55年4月に開校された飯原小学校の建設地内に所在する遺跡であります。

本書が市民各位の文化財保護及び学術研究の分野において役立つことを念願いたしますとともに、調査に際してよせられた多くの方々のご協力に対し心から謝意を表する次第であります。

昭和56年3月

福岡市教育委員会
教育長西津茂美

凡　　例

- ・本書は、昨年4月に開校された飯原小学校の建設に伴い、福岡市教育委員会文化課が1979年8月21日から同年12月20日にかけて発掘調査を行なった福岡市西区原深町遺跡の発掘調査報告書である。
- ・遺跡が福岡市西区大字原字深町に位置するため、遺跡名を『原深町遺跡』とする。
- ・遺跡の発掘調査には、福岡市教育委員会文化課の飛高憲雄、力武卓治、古藤国生（事務担当）が当り、本書の執筆・編集は飛高憲雄、力武卓治が行なった。
- ・本書の作成には、次の方々のご協力を得ました。ここに氏名を記して感謝の意を表します。（敬称略）

荒津孝治　安東昇　岩永真弓
江越初代　河野徹也　関加代子
関直樹　関政子　武木延子
藤たかえ　中村満代　花畠照子
広田清美　藤田太　溝口博子
実渕栄治　安武裕子　山内クツ子

福岡市西区 原深町遺跡

目 次

序文	
凡例	
I はじめに	(9)
1. 調査に至る経過	(9)
2. 調査協力者	(10)
3. 遺跡の位置	(10)
4. 発掘調査の経過と遺跡の概要	(10)
II 遺構	(15)
1. I 区, II 区	(15)
2. III 区	(17)
3. IV 区	(20)
4. V 区, VI 区, VII 区	(22)
III 遺物	(31)
1. 土器	(81)
2. 石器, その他	(104)
3. 木器	(119)
IV おわりに	(121)

挿図目次

- 1 原深町遺跡周辺遺跡分布図（縮尺 $1/5,000$ ） (11)
- 2 原深町遺跡地形図（縮尺 $1/5,000$ ） (12)
- 3 原深町遺跡発掘区平面図（縮尺 $1/500$ ） (14)
- 4 原深町遺跡遺構配置図（縮尺 $1/500$ ） 折り込み
- 5 第1号溝土層図（縮尺 $1/50$ ） (15)
- 6 I区全景（南から） (15)
- 7 II区全景（南から） (16)
- 8 第1号溝土層 (16)
- 9 第1号溝遺物出土状況 (16)
- 10 III区全景（南から） (17)
- 11 第1号溝杭列遺構実測図（縮尺 $1/50$ ） (18)
- 12 第1号溝杭列遺構出土杭実測図（縮尺 $1/50$ ） (19)
- 13 第1号溝杭列遺構（南西から） (19)
- 14 IV区全景（南東から） (20)
- 15 V区全景（西から） (20)
- 16 第1号壙（西から） (21)
- 17 第1号壙 (21)
- 18 白出土状況 (21)
- 19 V・VI区全景（北から） (22)
- 20 第1号壙と取水口 (22)
- 21 VI区大溝土層（縮尺 $1/50$ ） (23)
- 22 VII区大溝土層（南から） (23)
- 23 VII区大溝土層図（縮尺 $1/50$ ） (23)
- 24 VII区大溝土層（西から） (23)
- 25 第2号壙全景（北から） (24)
- 26 第2号壙全景（南東から） (24)
- 27 第2号壙実測図（縮尺 $1/50$ ） 折り込み
- 28 第2号壙全景（西から） (25)
- 29 第2号壙細部 (25)

30	第2号埋土器出土状況	(25)
31	第2・3・4号溝土器出土状況(南西から)	(26)
32	第4号溝木器出土状況	(26)
33	大溝土器出土状況	(27)
34	大溝土器出土状況	(27)
35	大溝木器出土状況	(28)
36	大溝木器出土状況	(28)
37	第7号溝木器出土状況	(28)
38	大溝木器出土状況	(29)
39	大溝木器出土状況	(29)
40	大溝木器出土状況	(29)
41	V・VI・VII区全景(東から)	(30)
42	原深町遺跡出土土器実測図①(縮尺 $\frac{1}{2}$)	(32)
43	原深町遺跡出土土器実測図②(縮尺 $\frac{1}{2}$)	(33)
44	原深町遺跡出土土器実測図③(縮尺 $\frac{1}{2}$)	(34)
45	原深町遺跡出土土器実測図④(縮尺 $\frac{1}{2}$)	(35)
46	原深町遺跡出土土器実測図⑤(縮尺 $\frac{1}{2}$)	(36)
47	原深町遺跡出土土器実測図⑥(縮尺 $\frac{1}{2}$)	(37)
48	原深町遺跡出土土器実測図⑦(縮尺 $\frac{1}{2}$)	(38)
49	原深町遺跡出土土器実測図⑧(縮尺 $\frac{1}{2}$)	(39)
50	原深町遺跡出土土器実測図⑨(縮尺 $\frac{1}{2}$)	(40)
51	原深町遺跡出土土器実測図⑩(縮尺 $\frac{1}{2}$, $\frac{1}{4}$)	(41)
52	原深町遺跡出土土器実測図⑪(縮尺 $\frac{1}{2}$, $\frac{1}{4}$)	(42)
53	原深町遺跡出土土器実測図⑫(縮尺 $\frac{1}{2}$)	(43)
54	原深町遺跡出土土器実測図⑬(縮尺 $\frac{1}{2}$)	(44)
55	原深町遺跡出土土器実測図⑭(縮尺 $\frac{1}{2}$)	(45)
56	原深町遺跡出土土器実測図⑮(縮尺 $\frac{1}{2}$)	(46)
57	原深町遺跡出土土器実測図⑯(縮尺 $\frac{1}{2}$)	(47)
58	原深町遺跡出土土器実測図⑰(縮尺 $\frac{1}{2}$)	(48)
59	原深町遺跡出土土器実測図⑱(縮尺 $\frac{1}{2}$)	(49)
60	原深町遺跡出土土器実測図⑲(縮尺 $\frac{1}{2}$)	(50)
61	原深町遺跡出土土器実測図⑳(縮尺 $\frac{1}{2}$)	(51)

62	原深町遺跡出土土器実測図 ②	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(52)
63	原深町遺跡出土土器実測図 ②	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(53)
64	原深町遺跡出土土器実測図 ②	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(54)
65	原深町遺跡出土土器実測図 ②	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(55)
66	原深町遺跡出土土器実測図 ②	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(56)
67	原深町遺跡出土土器実測図 ②	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(57)
68	原深町遺跡出土土器実測図 ②	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(58)
69	原深町遺跡出土瓦実測図 (縮尺 $\frac{1}{5}$)	(58)
70	原深町遺跡出土土器 ①	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(59)
71	原深町遺跡出土土器 ②	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(60)
72	原深町遺跡出土土器 ③	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(61)
73	原深町遺跡出土土器 ④	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(62)
74	原深町遺跡出土土器 ⑤	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(63)
75	原深町遺跡出土土器 ⑥	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(64)
76	原深町遺跡出土土器 ⑦	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(65)
77	原深町遺跡出土土器 ⑧	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(66)
78	原深町遺跡出土土器 ⑨	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(67)
79	原深町遺跡出土土器 ⑩	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(68)
80	原深町遺跡出土土器 ⑪	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(69)
81	原深町遺跡出土土器 ⑫	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(70)
82	原深町遺跡出土土器 ⑬	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(71)
83	原深町遺跡出土土器 ⑭	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(72)
84	原深町遺跡出土土器 ⑮	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(73)
85	原深町遺跡出土土器 ⑯	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(74)
86	原深町遺跡出土土器 ⑰	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(75)
87	原深町遺跡出土土器 ⑱	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(76)
88	原深町遺跡出土土器 ⑲	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(77)
89	原深町遺跡出土土器 ⑳	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(78)
90	原深町遺跡出土土器 ㉑	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(79)
91	原深町遺跡出土土器、瓦 ㉒ (縮尺 $\frac{1}{5}$)	(80)
92	原深町遺跡出土石器実測図 ①	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(85)
93	原深町遺跡出土石器実測図 ②	(縮尺 $\frac{1}{5}$)	(86)

- 94 原深町遺跡出土石器実測図 ③ (縮尺 $\frac{1}{2}$) (87)
- 95 原深町遺跡出土石器実測図 ④ (縮尺 $\frac{1}{2}$) (88)
- 96 原深町遺跡出土石器実測図 ⑤ (縮尺 $\frac{1}{2}$) (89)
- 97 原深町遺跡出土石器実測図 ⑥ (縮尺 $\frac{1}{2}$) (90)
- 98 原深町遺跡出土石器実測図 ⑦ (縮尺 $\frac{1}{2}$) (91)
- 99 原深町遺跡出土石器実測図 ⑧ (縮尺 $\frac{1}{2}$) (92)
- 100 原深町遺跡出土石器実測図 ⑨ (縮尺 $\frac{1}{2}$) (93)
- 101 原深町遺跡出土石器実測図 ⑩ (縮尺 $\frac{1}{2}$) (94)
- 102 原深町遺跡出土石器実測図 ⑪ (縮尺 $\frac{1}{2}, \frac{1}{3}$) (95)
- 103 原深町遺跡出土石器その他実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$) (96)
- 104 原深町遺跡出土石器 ① (縮尺 $\frac{1}{2}$) (97)
- 105 原深町遺跡出土石器 ② (縮尺 $\frac{1}{2}$) (98)
- 106 原深町遺跡出土石器 ③ (縮尺 $\frac{1}{2}$) (99)
- 107 原深町遺跡出土石器 ④ (縮尺 $\frac{1}{2}$) (100)
- 108 原深町遺跡出土石器 ⑤ (縮尺 $\frac{1}{2}$) (101)
- 109 原深町遺跡出土石器その他 ⑥ (102)
- 110 原深町遺跡出土石器 ⑦ (縮尺 $\frac{1}{2}$) (103)
- 111 原深町遺跡出土木器実測図 ① (縮尺 $\frac{1}{2}$) (106)
- 112 原深町遺跡出土木器実測図 ② (縮尺 $\frac{1}{2}$) 折り込み
- 113 原深町遺跡出土木器実測図 ③ (縮尺 $\frac{1}{2}, \frac{1}{3}, \frac{1}{4}$) 折り込み
- 114 原深町遺跡出土木器実測図 ④ (縮尺 $\frac{1}{2}$) 折り込み
- 115 原深町遺跡出土木器実測図 ⑤ (縮尺 $\frac{1}{2}$) 折り込み
- 116 原深町遺跡出土木器実測図 ⑥ (縮尺 $\frac{1}{2}$) (107)
- 117 原深町遺跡出土木器 ① (縮尺 $\frac{1}{2}$) (108)
- 118 原深町遺跡出土木器 ② (縮尺 $\frac{1}{2}$) (109)
- 119 原深町遺跡出土木器 ③ (縮尺 $\frac{1}{2}$) (110)
- 120 原深町遺跡出土木器 ④ (縮尺 $\frac{1}{2}, \frac{1}{3}$) (111)
- 121 原深町遺跡出土木器 ⑤ (縮尺 $\frac{1}{2}, \frac{1}{3}$) (112)
- 122 原深町遺跡出土木器 ⑥ (縮尺 $\frac{1}{2}, \frac{1}{4}$) (113)
- 123 原深町遺跡出土木器 ⑦ (縮尺 $\frac{1}{2}$) (114)
- 124 原深町遺跡出土木器 ⑧ (縮尺 $\frac{1}{2}$) (115)
- 125 原深町遺跡出土木器 ⑨ (縮尺 $\frac{1}{2}$) (116)

- 126 原深町遺跡出土木器 ⑩ (縮尺 $\frac{1}{4}$)(117)
127 原深町遺跡出土木器 ⑪ (縮尺 $\frac{1}{4}$)(118)
128 原深町遺跡出土木器 ⑫ (縮尺 $\frac{1}{2}$)(119)

I はじめに

福岡市の人口が100万をこえたのは、つい数年前のことであったが、それ以後も都市化の波にのって住宅建設が相次ぎ、人口も増加を続けていた。この人口の増加は、そのまま児童数の増加でもあり、福岡市では毎年、学校の新設に追われているのが実状である。

福岡のまちは、福岡平野とよばれる沖積地がそのかなりの面積を占めているため、学校等の建設に利用されるのも、まず、これらの沖積地である。そして沖積地であるが故に、それらの土地は多くの場合、現在に至るまで水田として利用されている。そのため埋蔵文化財の実態も不明なところが多いというのも実状である。その点で、沖積地の再開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、考古学上の新知見を提供するという派手さはあるが、その反面、計画が確定すると、学校のような校区に規制される公共施設の場合には、用地の変更がほとんど困難であるということで、埋蔵文化財の将来への保存は不可能となり、また、発掘により出土する自然遺物の処理、あるいは木製品の保存技術がいまだ不完全な現在では、ただ単に掘り出すことに終始するというのも否めない事実である。

1. 調査に至る経過

児童数の増加によって小学校の新設をせまられた福岡市西区飯倉地区では、1980年の4月開校をめざしてその用地を西区原七丁目600に決定し、建設計画が進められた。この飯原小学校建設予定地は、かつて、国家公務員宿舎の建設用地に予定されたおりに、旧水田面の上にすでに高さ1m前後の埋め立てがなされており、現地踏査では地下の遺跡の有無も確認できなかつたため、本調査に先立つ2か月余り前の1979年6月11日から同14日にかけて、同地の試掘調査を行なった。

学校建設予定地の東側には、北の博多湾に向かって流れ、河口で室見川と合流する幅20mほどの稻塚川がある。そのため、当然ながらその西側は、川の氾濫をうけていると考えて、稻塚川に直角に、すなわち東西方向に、20mの間隔をとって数本のトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を調べた。

その結果、学校建設予定地内の北西から南東にかけて微高地が延びており、そこには約2mの間隔で2条の溝状遺構（時期は古墳時代初期）が東の縁に沿って走り、予定地の東部は予想どおりに稻塚川の氾濫を受けており、遺構は確認されなかった。そして、溝状遺構には杭列が残されており、また、微高地の縁でも杭列が確認された。すなわち、原澤町遺跡は、古墳時代

初期の農業用水路を中心とした遺跡であろうという予測を立てるのに充分であった。

この試掘調査の結果にもとづいて、福岡市教育委員会文化課は、開発面積17,000m²の内、約3,000m²を本調査の予定範囲として、1979年8月21日から年内の調査完了をめざして発掘調査を開始するよう決定した。

2. 調査協力者

原深町遺跡の発掘調査を行なうにあたっては、福岡市教育委員会の関係各位の外に、次の方々の絶大なるご協力を得て、当初の予定どおり年末まぢかの12月20日をもって終了した。ここにご協力くださった方々の氏名を記して厚くお礼申し上げます。（敬称略、順不同）

下田モト	西淹三郎	松隈ユキノ	野田部コト	菰田重実	牛尾準一
牛尾クメ	青柳ツル	菰田オリエ	谷ヒサヨ	榎光雄	柳ツイ
坂口キミ子	尾崎達也	典略初	結城シズ	尾崎八重	結城君江
高田政枝	松尾久代	松尾君子	又野栄子	松尾鉢子	小林美恵子
田中ヤス子	菊地ミツヨ	伊藤みどり	舎川春江	結城千賀子	岩崎千晶
木内克之	木内潤子	溝口博子	柴田勝子	井上清子	山口富子
小林邦子	岩永真弓	高尾英幸	白澤勝典	高尾裕	河野徹也

3. 遺跡の位置

福岡沖積平野の西部のいわゆる早良平野は、室見川とその支流によって形成された扇状地形を呈している。原深町遺跡は、室見川の東約2kmで、国道202号線バイパスの原交差点の南南東約0.6kmの西区人字原字深町（現、西区原七丁目600）に位置する。遺跡地は、高さ1m前後の埋め立てによって現在は標高6.4m前後となっているが、以前は長きにわたって水田として利用されていた。東に稻塚川が流れ、川をはさんでその東には福岡市立原中学校がある。原深町遺跡の東方1kmの位置には南北に延びる飯倉、茶山の丘陵があり、西には、原の微高地が、さらに西方には金層川を間にはさんで、有田遺跡群をのせる有田・小田部の台地が開けている。

原深町遺跡周辺の水田地帯も再開発による住宅建設等が相次ぐが、埋蔵文化財の実態に関しては今のところ不明な点が多い。唯一いえることは、この一帯の水田畔には、条里制の遺構が比較的整然としのばれるということであろうか。

4. 発掘調査の経過と遺跡の概要

発掘調査に先立って試掘時に設定したグリッドの残り杭を基準にして、調査対象地域に20m方眼のグリッドを改めて組みなおす。南北の軸が磁北に対して約5度ほど西に片寄っていたが、



原深町遺跡周辺遺跡分布図 (縮尺1:25,000)

△縄文時代 ○弥生時代 ■古墳時代口青銅器出土 ▨中生

1:25,000 福岡西南部



2 原深町遺跡地形図（縮尺1/5,000）

そのまま利用する。西から A, B, C, ……、北から I, II, III, ……として調査区の表示とした。I 区から IV 区の一部にかけては、校舎建築のため最優先して調査を進めなければならぬということで、調査方法を検討した結果、調査順序を I 区, III・IV 区, II 区とし、それぞれ調査の終了した調査区から埋め戻すという方法をとった。

遺跡地が沖積地であるため、湧水の処理に最も悩まされたが、I 区から IV 区にかけては、このような小規模の調査区で発掘を進めたということで、結果的には排水作業時の余計なエネルギーを省力化できた。

IV 区の残りから V 区, VI 区, VII 区の調査は、試掘時の所見で当遺跡には溝状遺構が含まれているということで、上流に当る VII 区から進めた。

以下に、各区ごとの調査経過と遺跡の概要を、調査の順序にしたがって略記したい。

I 区 I 区は安全対策上、北側 6 m ほどは未調査であるが、試掘時の所見どおり、IA 区と IB 区との境に北西から南東に走る微高地の縁と、その内側約 3 m の位置に縁と平行に 1 号溝が検出される。

II 区 I 区, III 区の調査が終了し、排土を埋め戻した後に調査したが、ここでも試掘時の所見と違わず、微高地の縁が II B 区の中央を北西から南東に走ることがわかり、その縁に沿って溝状遺構が 1 条検出される。1 号溝である。

III 区 III 区は II 区の調査に先立って実施したため、I 区で検出された溝状遺構がどのような位置から、あるいは、I 区で検出されなかった新たな溝状遺構が、みつかるのではないか等等、さまざまな期待をもって発掘調査が行なわれたが、試掘時の所見どおりに、I 区の溝状遺構の延長線上に溝状遺構がくることが確認される。

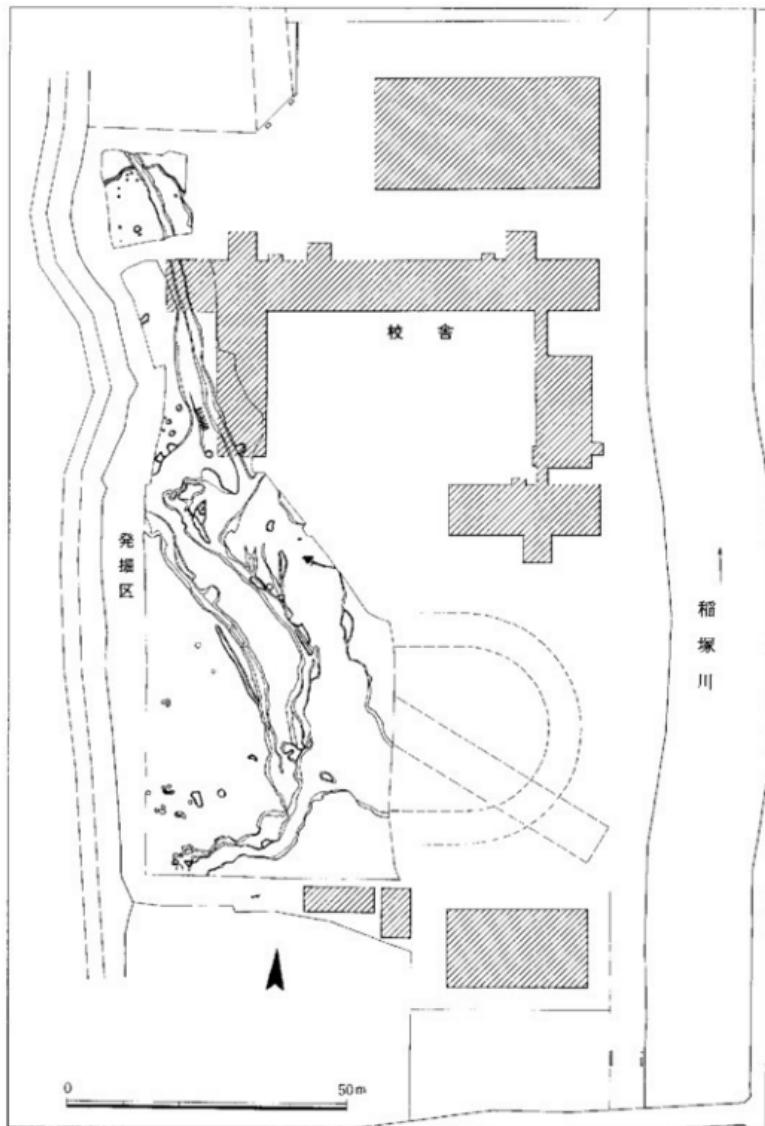
IV 区 IV 区は、北から 7 m の範囲のみを、校舎建設の関係上まず調査した。III 区同様、試掘時に予想されたとおりの所見を得る。特に 1 号溝の南端部において杭列が検出される。

VII 区 調査区南端に当り、試掘時の所見によると I 区等で検出された 1 号溝上流部と、さらに 2 m ほど西隣りにも 1 条の溝状遺構があるとのことで、まずこの点を確認する。その結果、西側の 7 号溝のみ検出され、VII B 区から VII C 区にかけて大きく東に蛇行し、VI C 区に向かって走ることがわかる。VII C 区では、7 号溝の左岸中段から 5 号溝が北北西に向かって始まる。

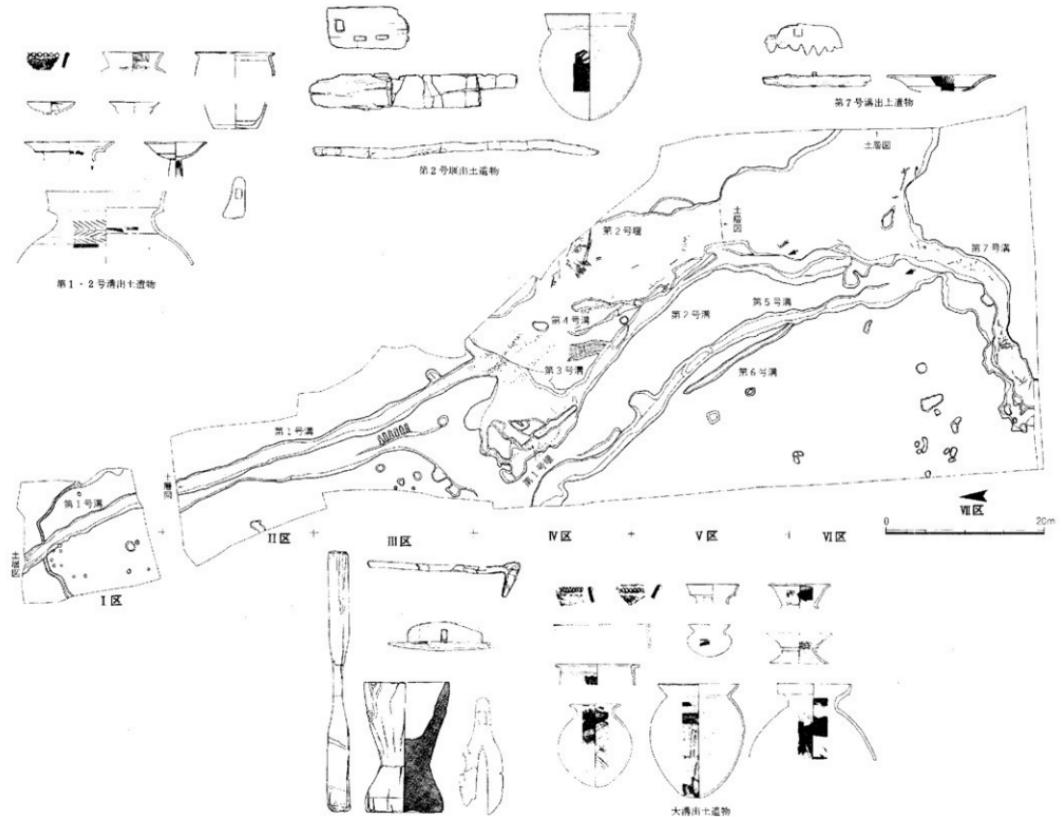
VI 区 5 号溝が VII B 区から始まる 6 号溝が合流し、大溝から 2 号溝が VII 区へ向かう。

V 区 2 号溝が北西へ走り、これから分岐した 3 号溝が北へ向かう。2 号溝の北 3 m の位置からは、4 号溝が北へ走り、これに伴うと思われる埋が大溝で検出される。

IV 区 北部は校舎建築に合わせて、すでに調査済であったので、ここでは、これまでに検出された溝が上流部と下流部とでどのようにつながるかが興味深いところであったが、結果としては大変複雑な様相を呈する。遺構の項で詳述する。



3 原深町遺跡発掘区平面図（縮尺1/1,000）



4 原深町道路構造配置図（縮尺1/500）

II 遺構



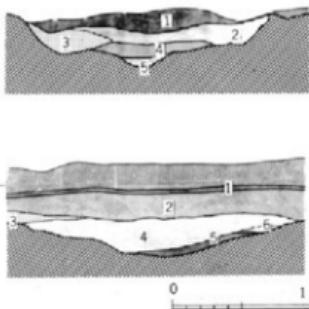
V区の調査風景と第2号壙を北西から見る



II 遺構

1. I 区, II 区

I区は校舎敷地の北西隅にあたり、 $20 \times 20\text{m}$ の 400m^2 グリッドを設定したが、盛土崩壊の安全対策で南北 $18\text{m} \times$ 東西 15m の 270m^2 を発掘した。耕作土の上は 1m 以上の厚さで埋め立てられており、この土を重機で削ぐことから作業を開始した。I区の土層は、耕作土、床土の下に粘質茶褐色土が約 20cm の厚さで堆積し、この下が灰茶色の粘土層で、この層が地山となる。I区の発掘では試掘調査で検出されていた溝状の落ちこみが北西から南東方向に現われた。この落ちこみは灰茶色粘土層を切りこんでおり、I区での全長は 16m である。落ちこみの断面は砂質土と泥炭が互層をなしており、夜臼式土器や土師式土器などの遺物を含んでいる。これらの遺物は層位的にとらえられない。落ちこみの幅は約 2m で南東から北西に向けて傾斜しており、底部はやや凹凸がめだつ。I区のみでは自然的なものか、人為的なものは判断できなかったが、ある時期に水が流れていた溝と考えられた。I区ではこの溝の外に数個の円形ピットを検出した。円形ピットの



5 第1号溝土層図 (縮尺 $1/50$)

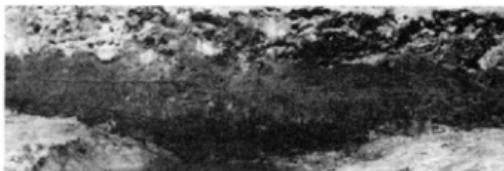
性格は不明であるが、弥生式土器、石器などが出土している。I区の東端部は地山が急に傾斜し、粘質黒色土となり、試掘調査の報告からも穂塙川の氾濫原と考えられ、また校舎の建設も進み発掘調査ができる状況であったために東側へは拡張しなかった。



6 I区全景(南から)



7 II区全景（南から）



8 第1号溝土層

第1号溝の土層表

I 区	II 区
1 砂質黒褐色土層	1 稲作土
2 粘質黒色土層（泥炭）	2 粘質茶褐色土層
3 砂 層	3 粘質暗茶褐色土層
4 砂 層	4 粘質黒色土層（泥炭）
5 粘質黒色土層（泥炭）	5 砂質黒色土層
	6 粘質黒色土層

► 9 第1号溝遺物出土状況

遺物は溝断面の上・下に関係なく出土する。挿図9は溝底で発見した木製鉢（W 3）と土師式土器（185）の出土状況を示している。鉢は頭部のみで腐蝕が進んでいる。I～II区の第1号溝には流木はほとんど見られない。



II区はI区の南に3mの間隔をおいて設定した発掘区である。発掘区は東西13m×南北16mの208m²である。床土下から地山まではI区と大差なく約20cmの深さである。I区で南東方向に延びていた溝はII区でもその延長線上で検出された。溝の幅は約2mで溝の断面はゆるやかな逆台形状をなしている。溝の土層は上層が泥炭で、溝の底部には砂質黒色土が堆積している。地山の粘質土はI区と比べ青灰色となり、粘着力が強い。このため溝の肩部も明瞭となっている。溝は北西端部とはほぼ同じ幅でさらに南東方向に延びている。溝からの出土遺物は多様であるが層位的には区別できなかった。

2. III区

III区はII区の南に接して設定したもので、南北25m×東西20mの500m²の面積である。この発掘区までが校舎建設の予定地となっていた。I区、II区で幅2mで南東に延びていた溝は、III区でも検出された。III区での長さは約27mで、I区からの総延長は65mを測る。溝の幅は約2mでI区での溝幅とほとんど大差はないがIII区南東隅でやや広くなり、浅くなっている。この南東隅の溝両岸には矢板と芯持ち丸太材、削材の杭が多数打ち込まれており、流れに対する護岸用杭列と考えられた。I～III区の溝に護岸用杭列が存在することから、溝が人為的な掘削であるかは明らかにしないが、水に対するある程度の制御がなされたことは明確となり、第1号溝と遺構名を付した。第1号溝の土層、断面形などはI・II区と比べ大きく異なる点は指摘できないが、溝底はI・II区が青灰色粘土層であったのに対し、III区では砂層となっている。前述の杭列はこの砂層に打ち込まれている。第1号溝の東側はほぼ平坦となっているが、西側は西に向かって高くなっている。2つの段がある。溝に近い段には7つの長楕円形のピットが並んでいる。2段目上にも大小の円形ピットが検出された。これら2つの段はIV区へは延びていずしだいに平坦となり消えている。III区の南壁で東西に蛇行した溝を検出し、第2号溝とした。第1号溝より出土した土器は夜白式土器(6・8)、弥生式土器(44)、土師式土器(91・115等)、須恵器(249)などで、土師式土器が大多数を占めている。第1号溝西側は地山上に粘質暗茶褐色土層があり、破片であるが多くの遺物が出土した。特に馬齒と整理時に確認されたのであるが赤焼土器の出土は注目される。この外に土師器の高台付櫛や布目瓦などがあり、明らかに第1号溝よりも新しい様相を持っている。第2号溝からは複合口縁壺(75・113)や須恵器(248)などが出土した。

► 10 III区全景(南から)

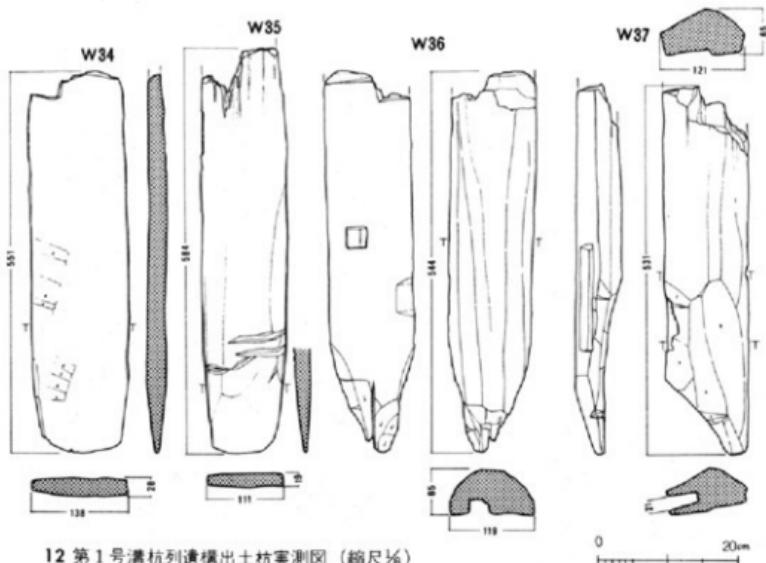
校舎建設に追われすでにI・II区は埋め立てられている。第1号溝の湧水は少なく、溝底のレベルは北と南では大きな差はない。第1号溝西岸には足跡状の落ちこみが無数に見られたが福岡市博多区の板付遺跡や那珂深ヲサ遺跡のように明瞭でない。





11 第1号溝杭列遺構実測図 (縮尺1/200)

挿図11は田区南東隅で検出した第1号溝の杭列である。校舎建設と並行してのグリッド発掘だったので、4m四方の実測図であるが杭列は次のIV区にも延びている。西岸には30本以上の杭が打ち込まれ、長さ約80cmの丸太材が、横木として立杭の間にわたされている。横木と立杭とは特別に結びつけられた痕跡は見られない。立杭には板材、芯持ちの丸太材、割材の三種類が見られる。杭の長さは頭部が腐蝕しており、本来の長さではないが、25~70cmを測る。東岸の杭列は、西岸ほど規則性がなく本数も少ない。溝の中にも杭が数本打ち込まれており、ここに流木が見られ、頭部を加工した木器（W20）も出土した。立杭は西岸の4本を実測した。



12 第1号溝杭列遺構出土杭実測図（縮尺½）

W34～37は第1号溝の西岸に打ち込まれていたものである。W34・35は板材で先端部は矢板杭のように両側面からの削りはない。W34は長さ551mm、幅138mmあり、両面に細かな削り痕が見られる。W35は長さ584mm、幅111mmで、両面ともに腐蝕し加工痕は見られないが、先端部近くに傷が数か所ある。W36は丸太などの割材である。樹皮側は明瞭でないが細長く面取りが行なわれている。芯側は平坦となっており、ほぼ中心に31×31mm、深さ21mmの方形孔がある。杭の先端の加工は鋭利である。W37は側面に21×153mm、深さ43mmの長方形の孔がある。断面は山形をなし全面が加工されている。W36・37は建築材からの転用であり、W34・35もその可能性がある。



13 第1号溝杭列遺構（南西から）

3. IV 区

III区の南に接して設定したもので南北11m、東西27m、 297m^2 の発掘区である。発掘区は西側に向かって高くなっている。西側との差は75cmある。I～III区で検出した第1号溝はIII区南東隅で幅広くなり、ここに護岸用杭が打ち込まれていたが、IV区では両岸とも明瞭な肩がなく平坦となっている。杭は160数本が砂礫層に打ち込まれている。杭の頭部は腐蝕しており、平均長は約50cmである。杭列は3列あり、東より1列目は60数本の杭でIII区第1号溝西岸の延長線よりもやや東に寄っている。2列目は第1号溝西岸の延長線上にあるもので杭の本数は少なく、その間隔も大きい。3列目は、2列目より西に2.5mの位置にあり、20数本の杭が約50cm間隔で打ちこまれている。2・3列目の杭は同一方向で南東方向に伸びている。1・2列目の杭列は、第1号溝に伴うものと考えられるが、2列目は後述するIV区第3号溝の北西延長部にあたっている。第2号溝はIII区で東西方向に10m検出していただが、IV区ではその西端部で南西に屈曲し、さらに湾曲しながら南東方向に伸びている。IV区での第2号溝は幅約2m、深さ約30cmを測る。杭列は両岸と溝中央に3列が見られる。第2号溝の西岸には長さ約1.8mの小規模な第1号堰が構築されている。またIII区への屈曲部には粘土の土止めがしてあった。IV区の南西隅には西に大きく湾曲する第5号溝があり、深さは10cmである。須恵器が出士した。



14 IV区全景（南東から）



15 IV区全景（西から）



16 第1号塙(西から)



17 第1号塙



18 玉出土状況

第1号塙

第1号塙はIV区第2号溝の西岸で検出したものである。現形は腐蝕や土圧のためにおしつぶされているが、本来は長さ1.7mの横木を、両側から杭を交差させて押え、その間には小枝や草茎類をつめたものと考えられ、きわめて単純な構造である。第2号溝は大溝からVI区で取水されたものと思われ、第1号塙と、第2号溝北端部に土止めすることで水流を調整していたようである。さらにここよりあふれた水はI~III区の第1号溝に流れこんでいたのではなかろうか。

IV区での出土遺物は、夜臼式土器、弥生式土器、土師式土器、須恵器、石器、木器などで、これらは混在して出土し、各溝の時期は決めがたい。挿図18はIV区南東隅で検出した臼の出土状況を示している。

I~IV区までは校舎建設と並行しての調査で、IV区発掘中は既にI~III区は埋め立てられているという状態であった。このため遺構の広がりは図上でしか把握できず、調査上問題を残すことが多かった。

4. V 区, VI 区, VII 区

I ~ IV 区までは校舎建設と並行しての発掘だったために結果的には溝の下流から上流方向に掘り進んでいたが、溝は第 1・2 号溝のみではなく、堰などの遺構も検出され、この外にも用水施設等の存在が予想されたので、南側の上流部から発掘することにし、また、校舎建設に伴い大型トラックの出入りがひげしく、この安全対策上からも南側の発掘区に移動することにした。この発掘区を VII 区としたが、各発掘区ごとに遺構番号を付したために整理時に挿図 4 のごとく変更した。V ~ VII 区は南北 58m、東西 44m の約 2,500m² ある。検出遺構は、第 2 号溝の南東延長部と、第 2 溝より別れた第 3 号溝、同じように第 5 号溝の南東延長部と第 5 号溝より別れた第 6 号溝、さらに原深町遺跡での主流と考えられる大溝と、これに流れこむ、第 7 号溝の各溝と、大溝に構築された堰などである。

第 2 号溝は IV 区で長さ約 11m を検出していたが、さらに南東方向に延び、V・VI 区では南に湾曲して弓状に延び大溝に接している。IV 区と V 区の境界部にも溝の中に杭が打ち込まれており水量を調整しているようである。V 区では第 2 号溝から第 3 号溝が別れており、第 3 号溝には粘土の土止めが見られた。第 4 号溝の延長線上に第 1 号溝の杭列が並んでいる。第 5 号溝も IV 区から弓状に湾曲して VII 区の第 7 号溝まで延びている。第 6 号溝は VI 区で第 7 号溝より別れた溝で全長 16m、幅約 90cm を測る。第 7 号溝は南西から蛇行して大溝に合流しており、流木が多く見られた。



▲ 19 V・VI 区全景（北から）



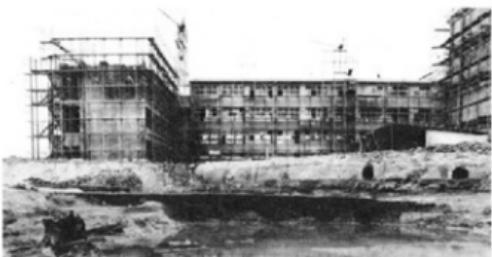
▼ 20 第 1 号堰と取水口

大溝

大溝と名を付した遺構は、V～VII区で検出した溝である。検出した全長は約45m、幅は最大部で13m、最小部で6mを測る。大溝はVII区で湾曲して北向きとなっているが、VII区より東側は試掘調査および今回のトレンチ掘りでも現在の稻塚川に接していることは明らかである。溝の両岸は茶色をおびた灰白色粘土層で堅く安定した土層である。このためか、両岸には護岸用杭列と思われるものは少なく、わずかにV区西岸に見られたにすぎず、東岸は皆無であった。V区の北端部には横木と立杭で構築した堰があり、この堰で水位をあげ、第2・5号溝に分水したものと考えられる。ただし、後述するが、VI・VII区の土層図でも観察できるように、大溝の最終的な流れは、西岸の方に寄っており、現在の大溝の幅よりさらに狭かったことが推測される。

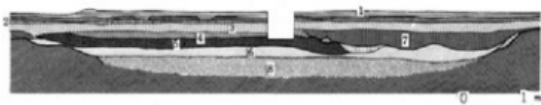


21 VI区大溝土層図 (縮尺1/50)

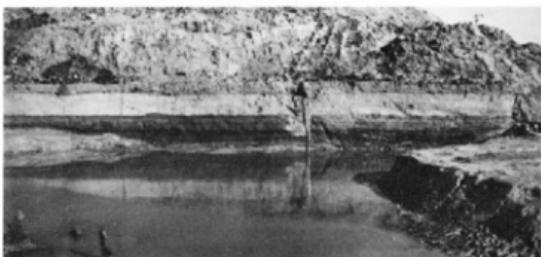


22 VI区大溝土層(南から)

1 粘質暗黒色土	6 砂質灰黑色土
2 砂質黒灰色土	7 砂 層
3 砂質黒色土	8 灰黑色土
4 粘質黒色土	9 砂 層
5 砂 層	10 青灰色粘土



23 VII区大溝土層図 (縮尺1/50)



24 VII区大溝土層(西から)

1 耕作土, 床土	5 砂質黑色土
2 黄茶褐色土	6 砂質灰黑色土
3 粘質茶褐色土	7 砂質黑色土
4 粘質暗黒色土	8 砂 層

第2号堰(25~30)

第2号堰は大溝を横切るようにして構築されているが、大溝の両岸の方向が、ほぼ北を向いているのに対して、堰の横木は直角ではなく東岸から108度と開いている。第2号堰の検出時の状況は挿図25~28のごとくであるが、堰に向かって左側は長さ約1.8mの杭が先端を上流に向けてほぼ水平に並んでおり、土圧で押し倒されたものと思われる。堰が構築されている大溝の底部は砂礫層となっているが、西側が高く東側に深くなっている。先の水平に並ぶ杭は砂礫層のため深く打ち込めなかったのであろう。一方東岸近くの杭は全長1m程度あり構築時の原形を残しているものと考えられる。堰が東岸と接する部分は約20cmが発掘区よりはずれているが、堰の全長(横幅)は6.5m、幅(奥行)1.2mを測る。検出時の堰構築材の数量は、立杭が20

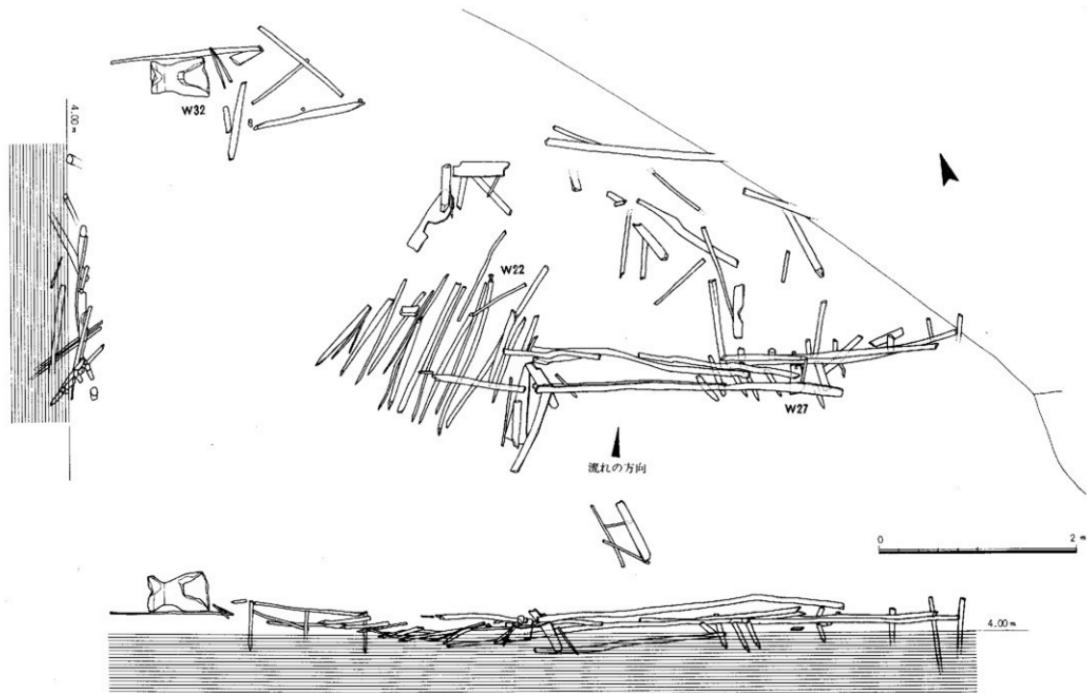


25 第2号堰全景(北から)



26 第2号堰全景(南東から)

数本(西側の水平の杭はのぞく)、横木が7本である。立杭に使用されている材には、芯持ちの丸太材、丸太の割材、板材などで、長さは20cmから100cmと統一性はない。また板材は建築材からの転用されたものが多い。横木の長さは1mから3.1mまでで、直径は10cm足らずと細い芯持ちの丸太材が用いられている。立杭は、現在下流側に36度と傾いているが水圧を考慮すれば垂直に近い角度で打ち込まれていたのであろう。堰の高さは約50cmを測る。横木と立杭とは特別に固定した痕跡はなく、また横木と立杭との間に小枝を埋めているものの、その数は多くない。堰の前、背面には流木があるが、堰の背面に多く見られた。これら検出時の状況から堰の構築方法



27 第2号墳実測図 (縮尺1/6)



28 第2号堰全景(西から)



29 第2号堰細部



30 第2号堰土器出土状況

と順序は次のように考えられる。まず溝を横切って長さ約1.5mの杭を間隔10~40cmで垂直に打ち込む。横木の両端となる部分は特に立杭を密にする。次に長さ約2~3mの横木をわたし、横木の前にも杭を打ち込み横木を固定させ、この前面30cmにも同じ順序で立杭で横木を固定する。横木と立杭の間には小枝をつめて目つぶしを施す。また西岸部には長さ1.8mの杭を桿状に打ち込み水の流失を防ぐ方法をとっている。以上が現況から考えられる堰構築の基本工程であるが、必ずしも現況とは一致していない。これは堰には数回の修復、補修が行なわれたであろうし、また流失したことを前提としたためである。特に堰構築の目的が水位上昇による分水溝への取水であるからには、本遺跡で分水溝と考えた第2・5号溝の溝底レベルと無関係ではない。また分水溝の掘削と堰構築との前後関係については、いまは同時に計画され作業が行なわれたものと理解しておきたい。

分水溝

大溝の第2号堰に対する分水溝として、第2・4・6号の各溝を考えた。各溝の取水口と推定される位置は挿図4に矢印で示したが、第2号溝は全長約45m、幅は約2.5mある。溝の断面は逆台形で、IV区で杭が打ち込まれている外は護岸用の杭列は見られない。溝底のレベルは取水口が4.207m、IV区での第1号堰付近で4.796mで両端差は約60cmで下流と考えた方が高くなっている。取水口が大溝に接し特に低くなっていることもあるが、V区の両端部でも北側が約21cm高くなっている。同じことは第5号溝についても言える。第5号溝の取水口はVII区に推定したが、取水口のレベルは4.620m、IV区での北端部のレベルは4.935mで両端の差は約31cmを測り、北側が高くなっている。第5号溝より別れている第6号溝はわずかに北側が低い。第5・6号溝とも護岸用杭列はなく、また第2号溝において溝に杭を打ち込み流水を調整したような施設はない。第4号溝は大溝の堰に接近して取水口があるので、取水口が北側よりも高い。第4号溝の東岸には護岸用の杭列が見られる。溝の肩は長さ約10mで両岸とも不明瞭となっているが、第4号溝の杭列は、I～III区の第1号溝の杭列に繋がっている。このように分水溝と考えた第2・5号溝は、溝底レベルのみからすれば、水は逆流し大溝に注ぎこむことになる。そこで大溝に構築された第2号堰の高さが問題となる。第2号堰の現況の高さは横木が約4.40mあり、この高さまで水位が上がっても第2号溝の取水口が冠水はするものの第2・4・5号溝のいずれの溝にも水は流れこまないことになる。しかし大溝の水位が5



31 第2・3・4号溝土器出土状況（南西から）



32 第4号溝木器出土状況

mにまで達すれば、溝底レベルとは無関係に短時間における多くの水量は望めないものの各溝にある程度の水量を供給できることになる。第2号堰に水位5mまで揚水できる機能があったであろうか。第2号堰の検出時の状況からすれば横木の押えとして堰背面に斜杭を考え、また堰西側に水平に並ぶ杭は、構築時には垂直に近い角度で打ち込まれていたと推測した。いまこれらの推測が妥当とすれば第2号堰は水位5mまで揚水できる能力を持っていることができる。またVI区の土層で大溝の最終的な流れは西岸に片寄っているがこの部分での両岸のレベルは約5.2mを測り、この高さまで水が流れている可能性が充分に考えられよう。このように付帯条件つきであるが各溝が分水溝として充分に機能しうるということになれば、その対象となる耕地であるが、原深町遺跡の発掘区内では明確にしえなかつた。第5号溝はIV区で西に屈曲して方向を変えており、発掘区の西側に耕地を求められよう。第2号溝は大溝からの分水溝ではあるが、IV区では第1号堰や、溝中の杭群で流水を調整しているが、第3・4号溝とともに最終的には第1号溝に流れこむようになっており、第1号溝に注ぐ前段階の調整溝としての性格が強いのではないかと考えられる。したがって第1号溝も大溝の分水溝であり、大溝は現在の稻塚川と並行に北に延びていくものと思われ、大溝は稻塚川の旧河道の可能性が大きい。

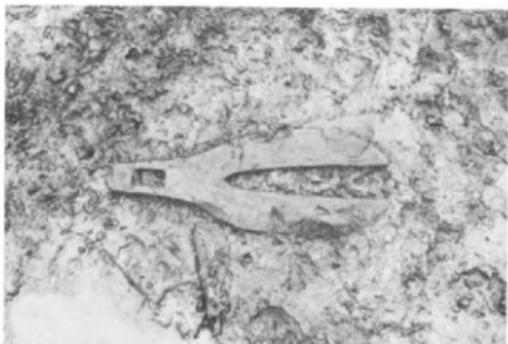
第2～6号溝より出土する遺物は、種子などの自然遺物は皆無で當時水の流れがあったとは考え難い。一方、土器、石器などの文化遺物は多量でやや磨耗したものが多いが、発掘区に接近して生活跡があったことを物語っている。土器は夜臼式土器、弥生式土器、



33 大溝土器出土状況



34 大溝土器出土状況



35 大溝木器出土状況



36 大溝木器出土状況

▶ 37 第7号溝木器出土状況

挿図37はえぶりの出土状況で、えぶりは、溝底の砂層に歯の部分が埋もれており、他の木器の出土状況とは異にしていた。第7号溝は分水溝とは考えられず、上流地域の分水溝より排水されたものを集めて大溝に再び導いた導水溝としての機能を考えられる。



土師式土器、須恵器などで、これらの土器は混在しており、土器によって各溝の時期差を決めることはできない。ただし第2号堰の西岸から第4号溝にかけて土器片が多量に出土した（挿図31）。この地点には堰が構築されており、分水の最も重要な部分にあたっていることから水に対するある種の祭祀行為が行なわれたのではないかと想像された。

大溝からの出土遺物は、土器、石器の外に木器の出土数が多く、また種子などの自然遺物も見られ、特に瓢の出土は注目された。木器のほとんどは堰前面のV区で出土したが、完形品は少なく、流れついた状況を示していた。

▶ 38 大溝木器出土状況

W 7 の出土状況で、出土位置はV区。大溝西岸の護岸用杭列下より出土した。この護岸用杭列がいつ打ち込まれたかわからないが、大溝より出土する外の遺物とは時期的な違いを認めるべきかもしれない。



▶ 39 大溝木器出土状況

V区の大溝中央部より重なって出土した杵(W16)と手斧の柄(W 9)である。杵は流れと直交しており、ともに腐蝕で一部欠損しているがほぼ完形品といえる。



◀ 40 大溝木器出土状況

V区堰の前面で出土したW 30で、大溝の溝底に約6mが埋もれていた。原深町遺跡で出土した建築部材と考えられる木器は、第2号堰の構築材として用いられているものが多い。

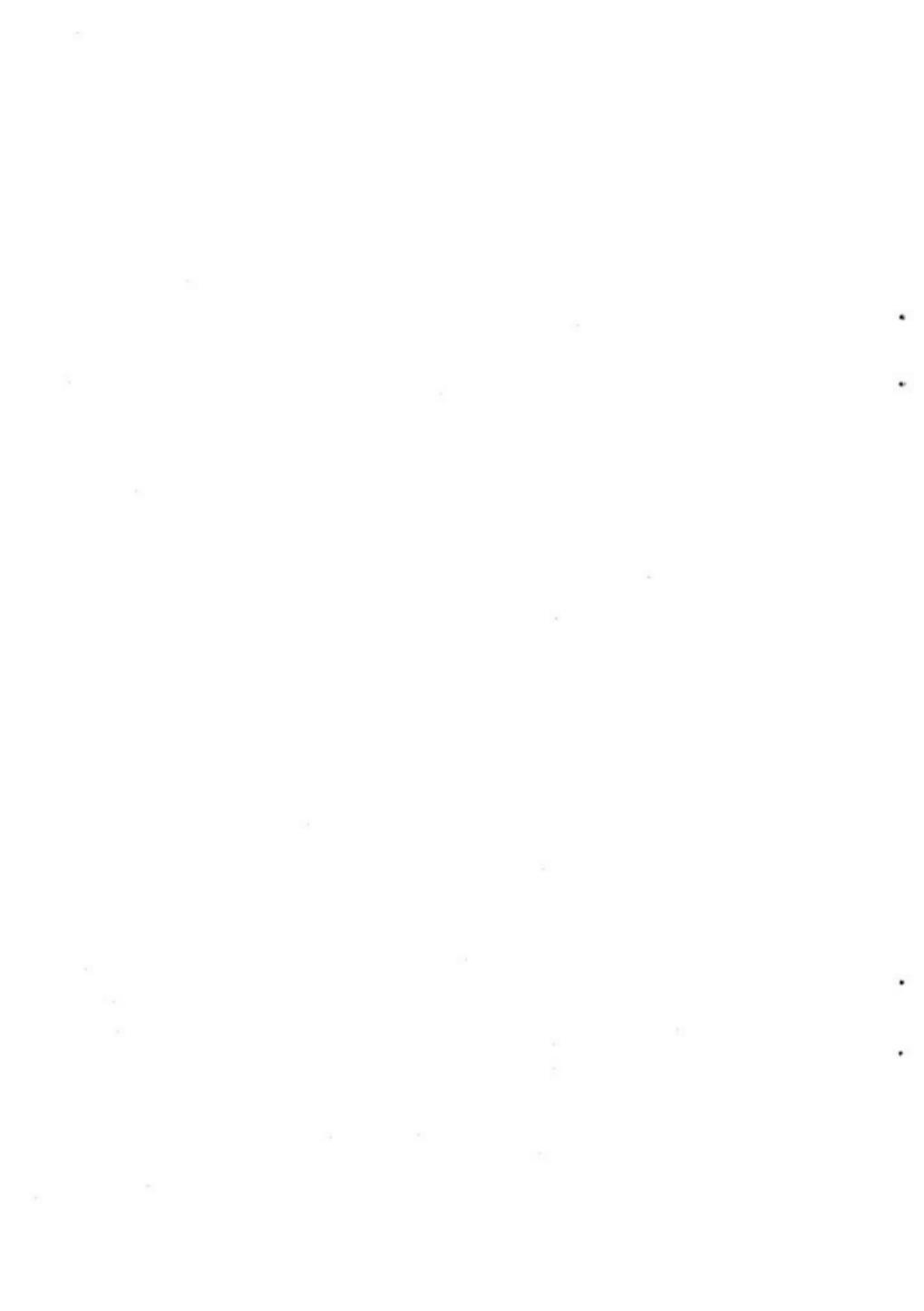


41 V - VI - VII区全景（東から）

III 遺 物



IV区の臼を出土した地点を後にした記念撮影

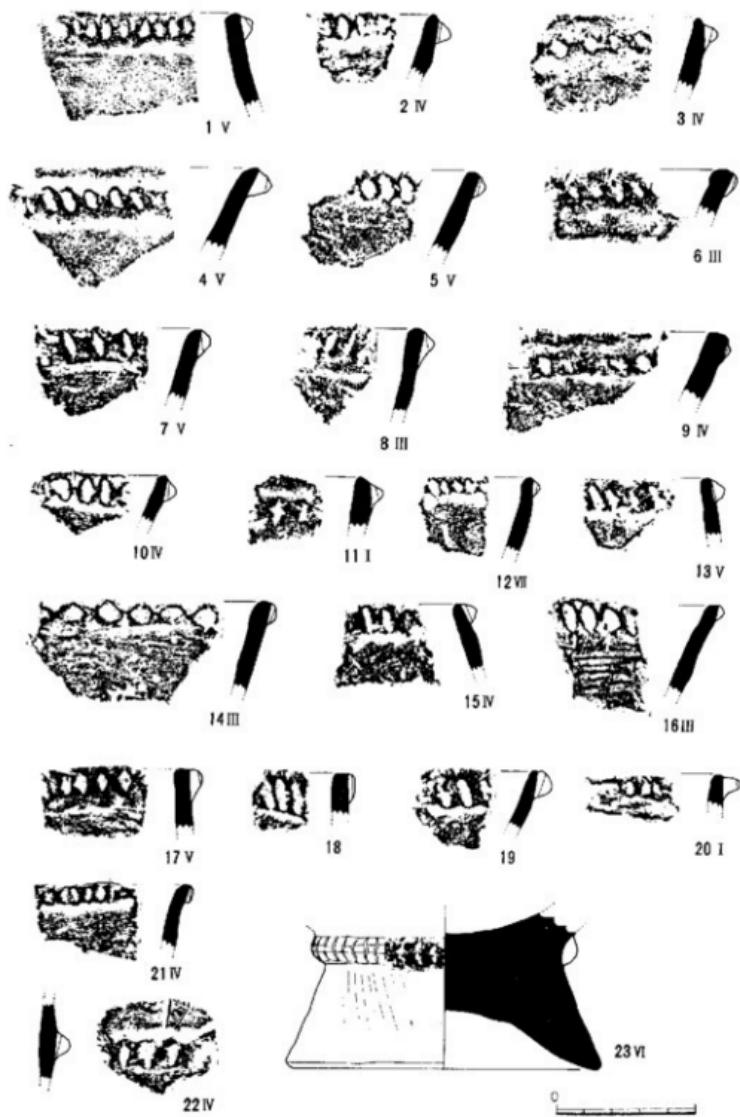


III 遺 物

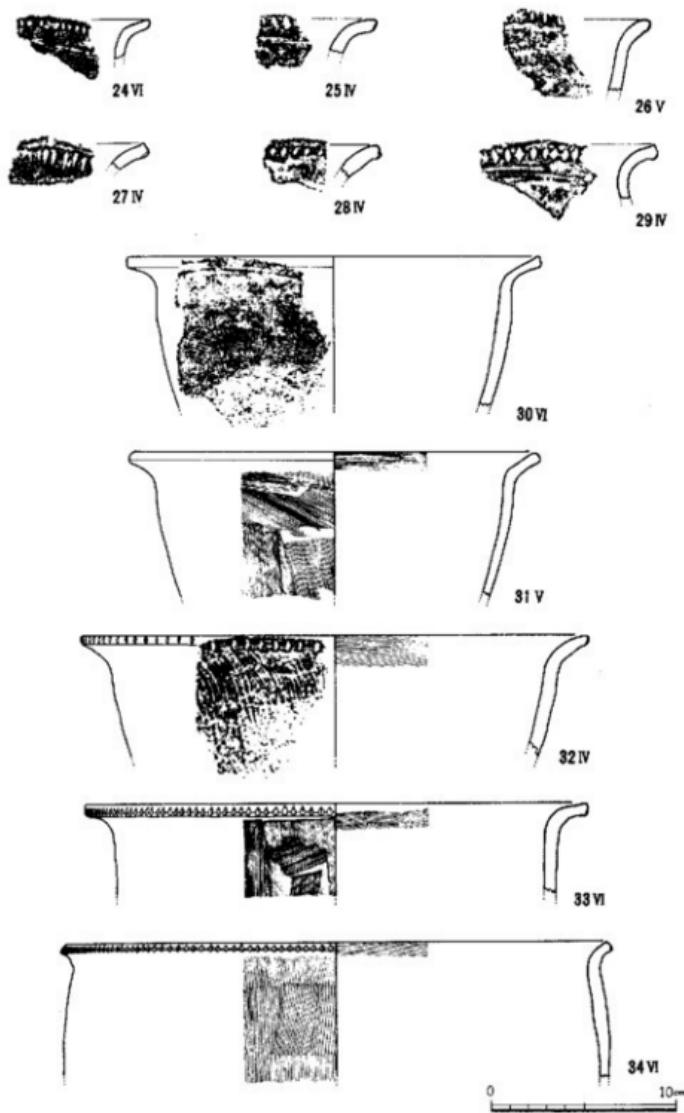
原深町遺跡の出土遺物には、土器、石器、木器などがある。これらの遺物は溝より出土したものが多く、各溝ごとに列記すべきであるが、ここでは遺構ごとではなく、大きく土器、石器、木器に分けて記述した。遺物は可能な限り実測するように努め、石器、木器は出土数のすべてを、土器は270余点を図示することができた。このため紙数の制限から遺物個々の説明、時期等々の検討などについては記述することができず図録篇という内容となった。土器には山陰系の土器や、朝鮮半島のものと思われる赤焼土器などの外来系の土器が多く、注目される。これらの中の遺物個々の詳細や、考察、木器の樹種同定結果などについてはあらためて報告したい。

原深町遺跡遺構別出土遺物一覧表

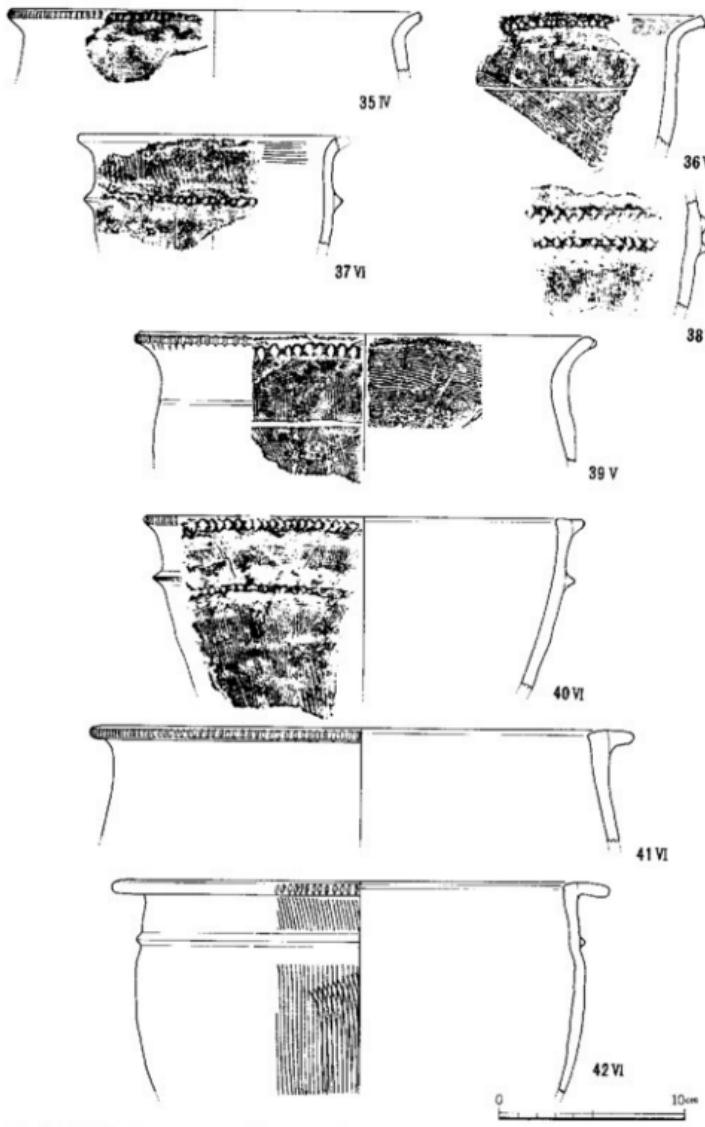
遺構	区	土 器	石 器	木 器
1号溝	I	214.219	103-35	
	II	90.112.123.129.131.132.137.144.146.166 167.168.177.202.203.205.222.239.241. 242.244.245.253.254.255	93-1.101-3.103-3 103-5.103-27	3
	III	6.8.44.91.115.127.134.148.152.161.173 175.223.249	95-1.3.96-1.97-1.4 98-2.100-2.102-3. 103-8.103-21.103-24 103-32	20
2号溝	III	113.175.225.226.227.248	98-5.6 103-2.103-17	
	V	82.83.84.85.86.147.151.154.165.156.157 159.165.172	94-4.99-4.99-9.100 -4.101-1.102-1.103 -15.103-20.103-30	
	VI	23.88.89.122	92-1.93-3.95-4.96- 3.99-1.100-1.103-1 103-22.103-29	
	VII		96-2.103-28	
3号溝	IV	28.32.104		
	V	100.102.261		
4号溝	V			11
5号溝	IV	21.213.246.264		
	V	13.26.50.128.269.272	103-18.103-26	
	VI	45.252.263		
7号溝	VII	12.191.192.266		6.17
大溝	V	1.5.17.38.49.50.53.60.62.65.67.71. 73.74.76.92.93.94.96.97.98.99.101.105 106.107.109.110.111.114.116.117.120.124 125.126.130.133.135.136.138.141.142.143 145.162.176.178.183.184.186.187.193.198 199.200.201.204.207.209.210.211.215.220 221.224.228.230.234.236.237.238	1.2.4.5.7.8.9. 10.12.13.14. 15.16.18.19. 21.22.23.24. 25.26.27.28. 29.30.31.32 (V).33	
	VI	24.30.33.34.36.37.38.40.41.42.43.46.47 54.56.57.58.59.61.63.64.69.75.77.79.80 81.118.119.188.189.190.206.212.232.233 235		



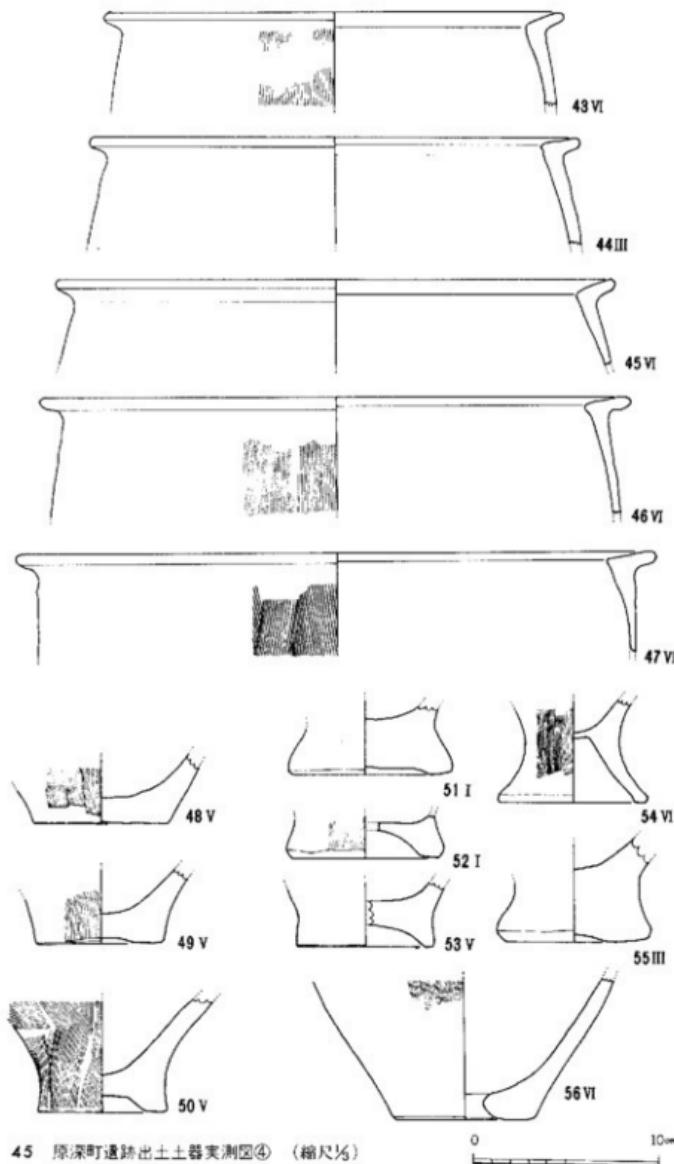
42 原深町遺跡出土土器実測図① (縮尺½)



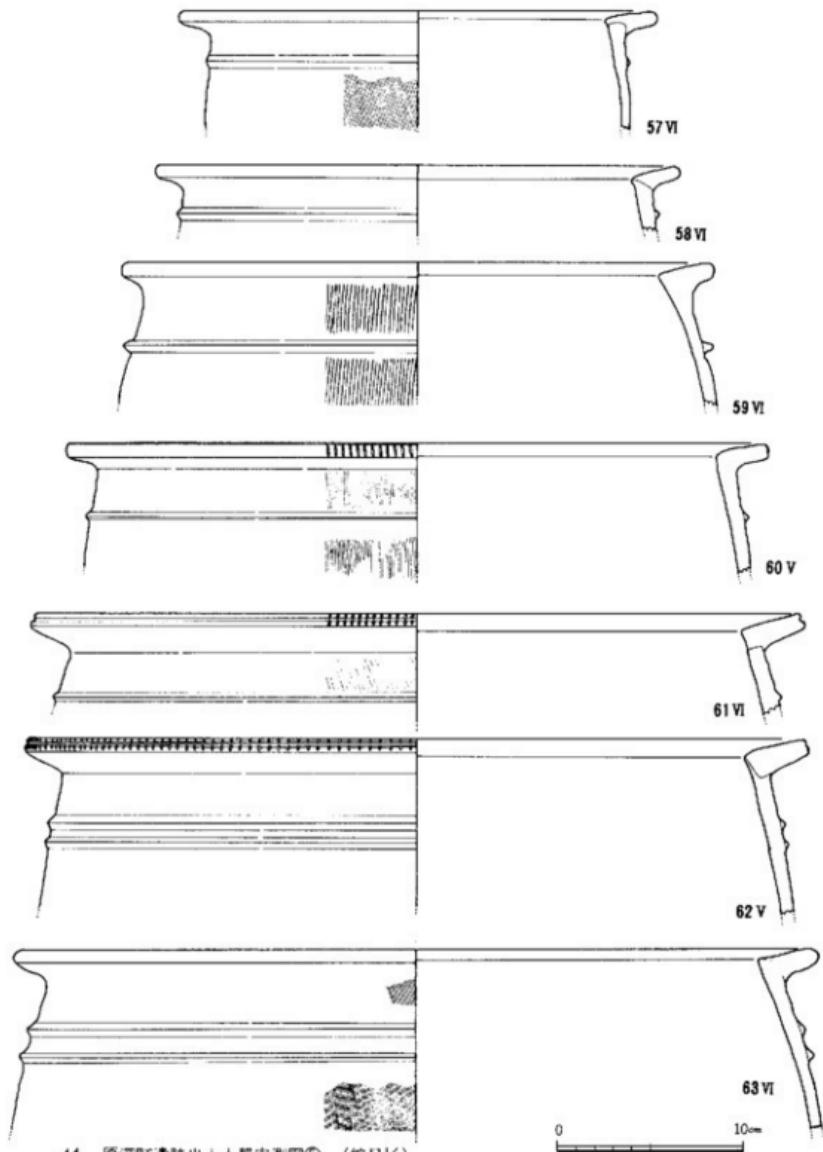
43 原深町遺跡出土土器実測図② (縮尺1/2)



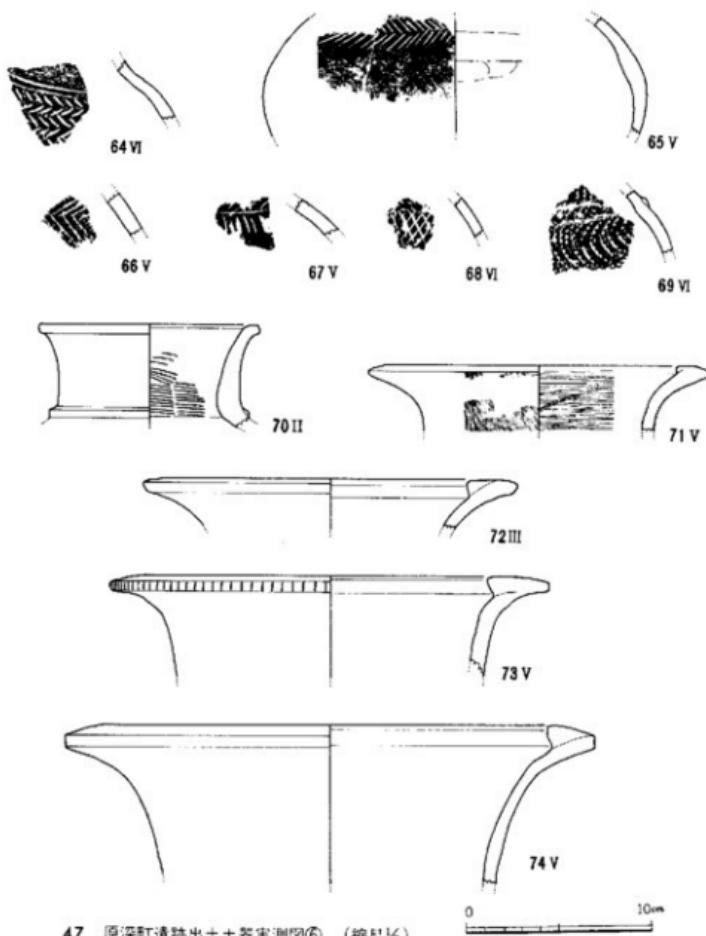
44 原深町遺跡出土土器実測図③ (縮尺1/2)



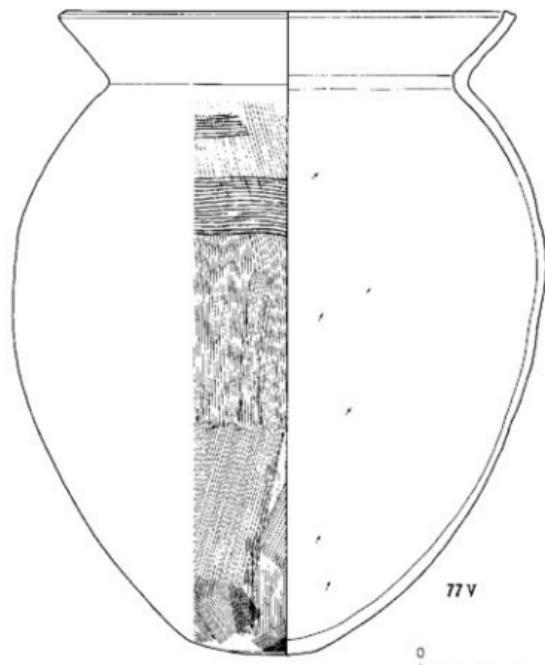
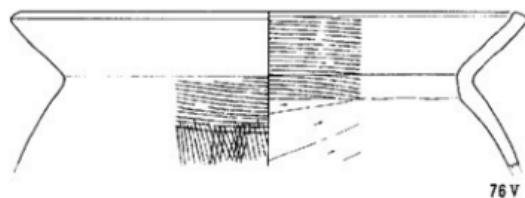
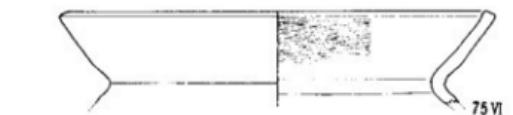
45 原深町遺跡出土土器実測図④ (縮尺1/2)



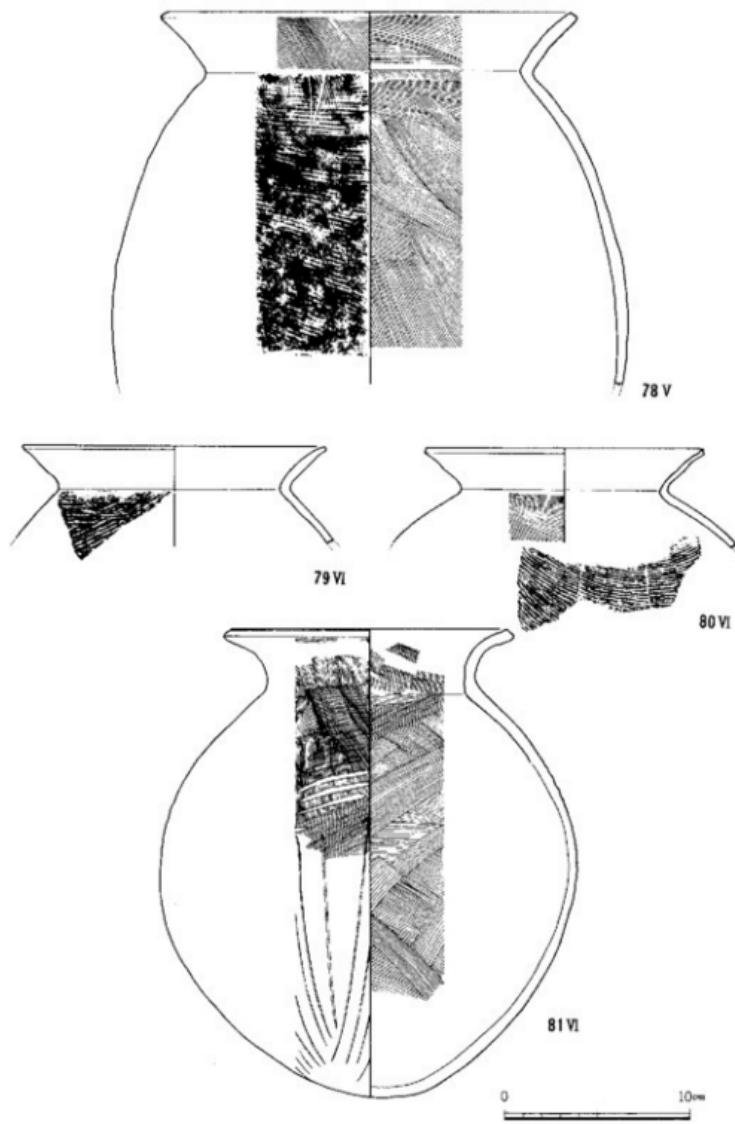
46 原深町遺跡出土土器実測図⑤ (縮尺1/2)



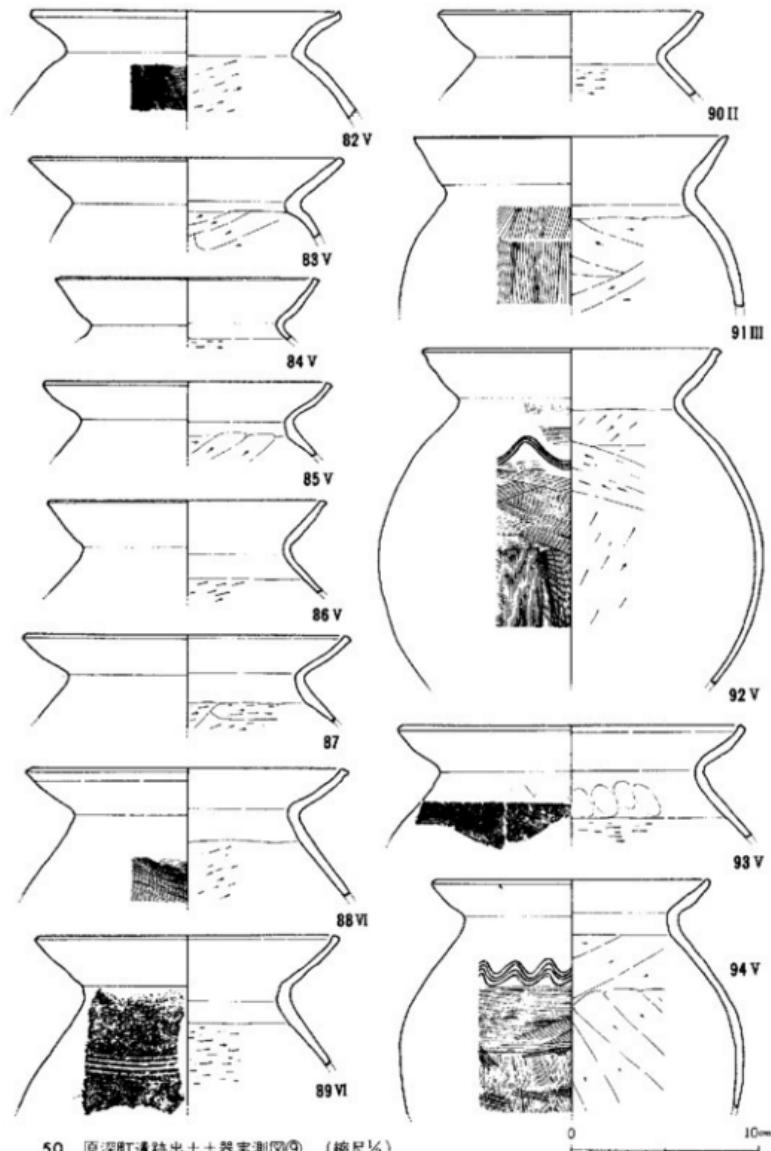
47 原深町遺跡出土土器実測図⑥ (縮尺1/2)



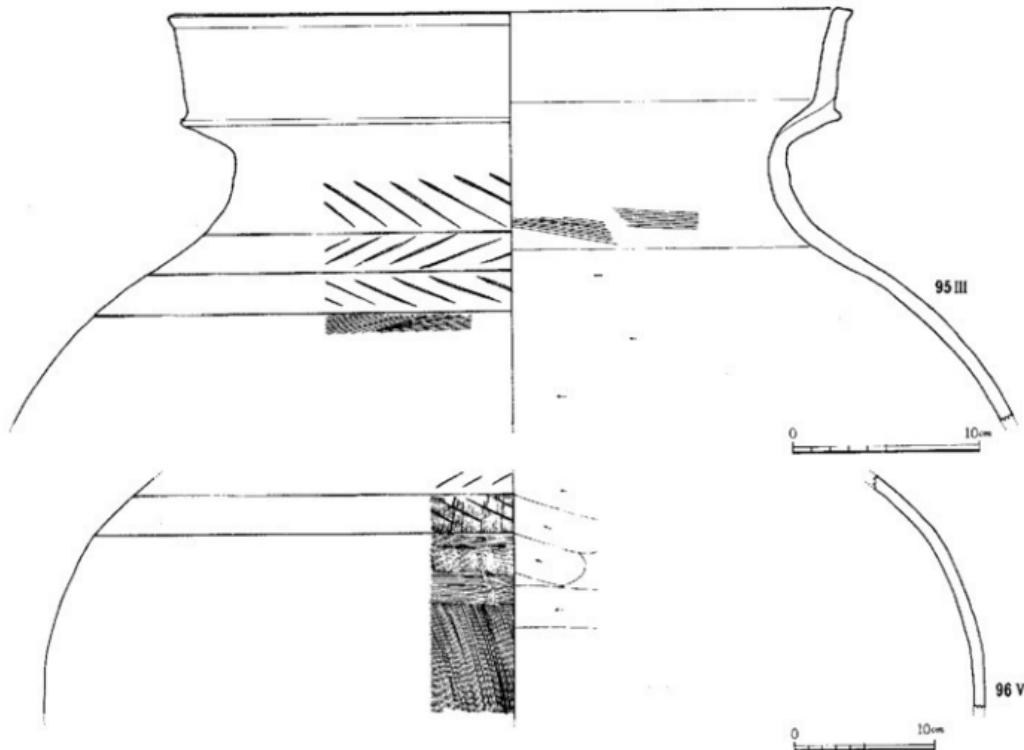
48 原深町遺跡出土土器実測図⑦ (縮尺1/2)



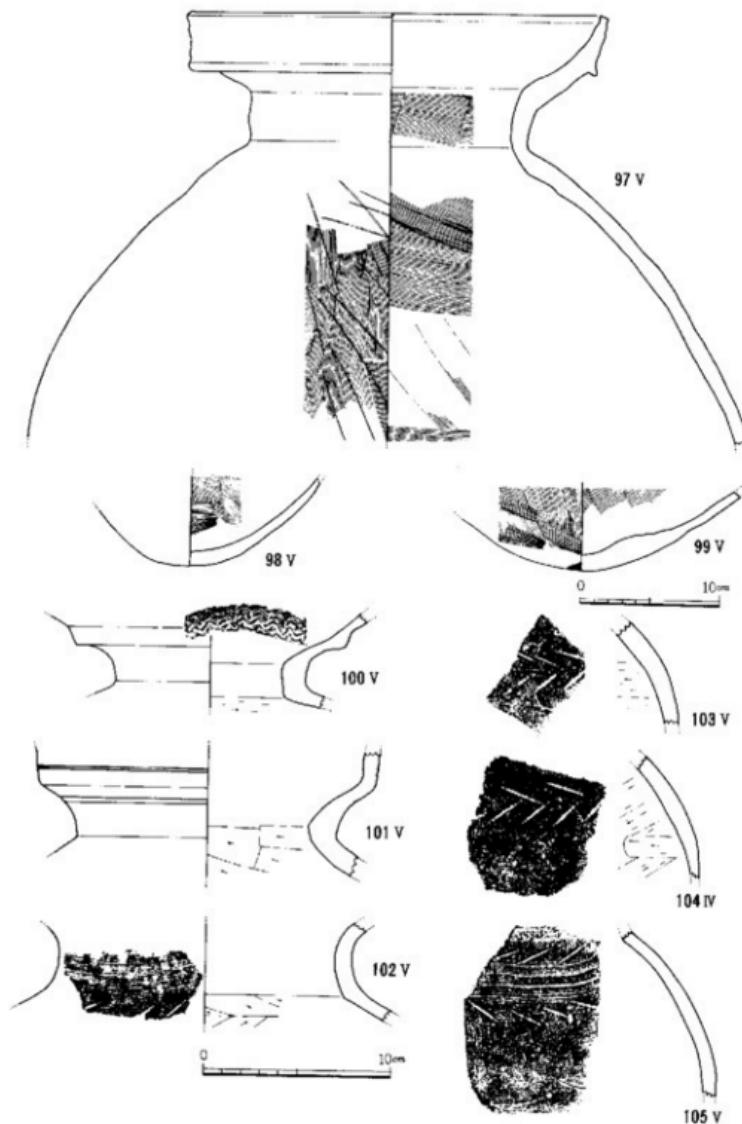
49 原深町遺跡出土土器実測図⑧ (縮尺5%)



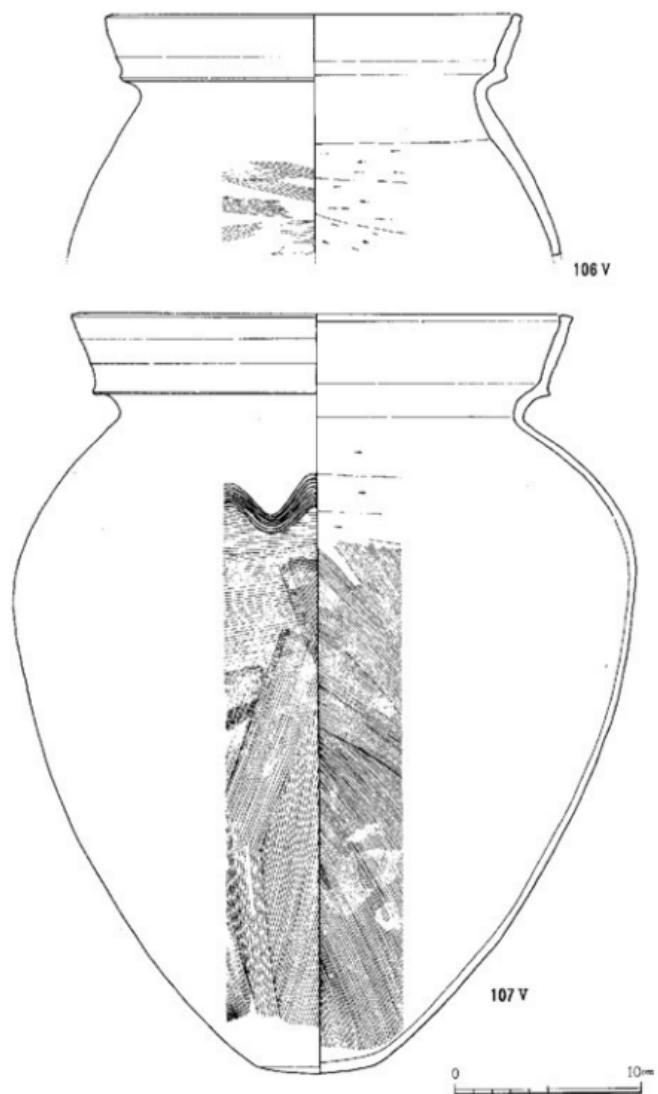
50 原深町遺跡出土土器実測図⑨ (縮尺1/8)



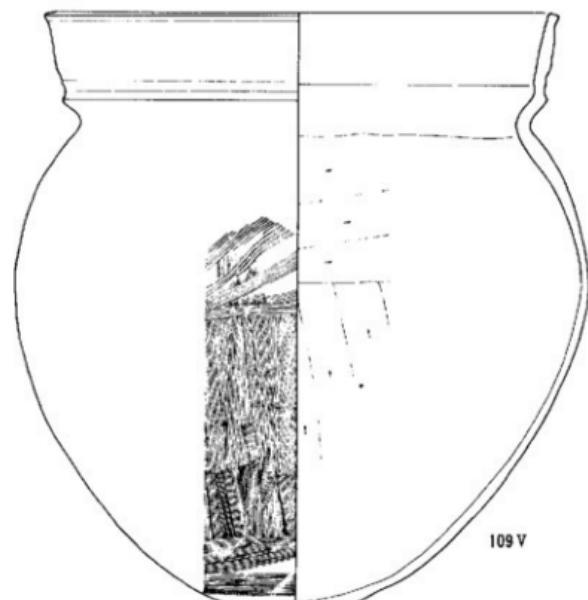
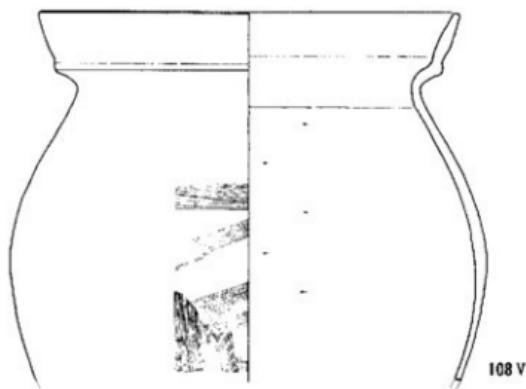
51 原深町遺跡出土土器実測図① (縮尺1/6, 1/4)



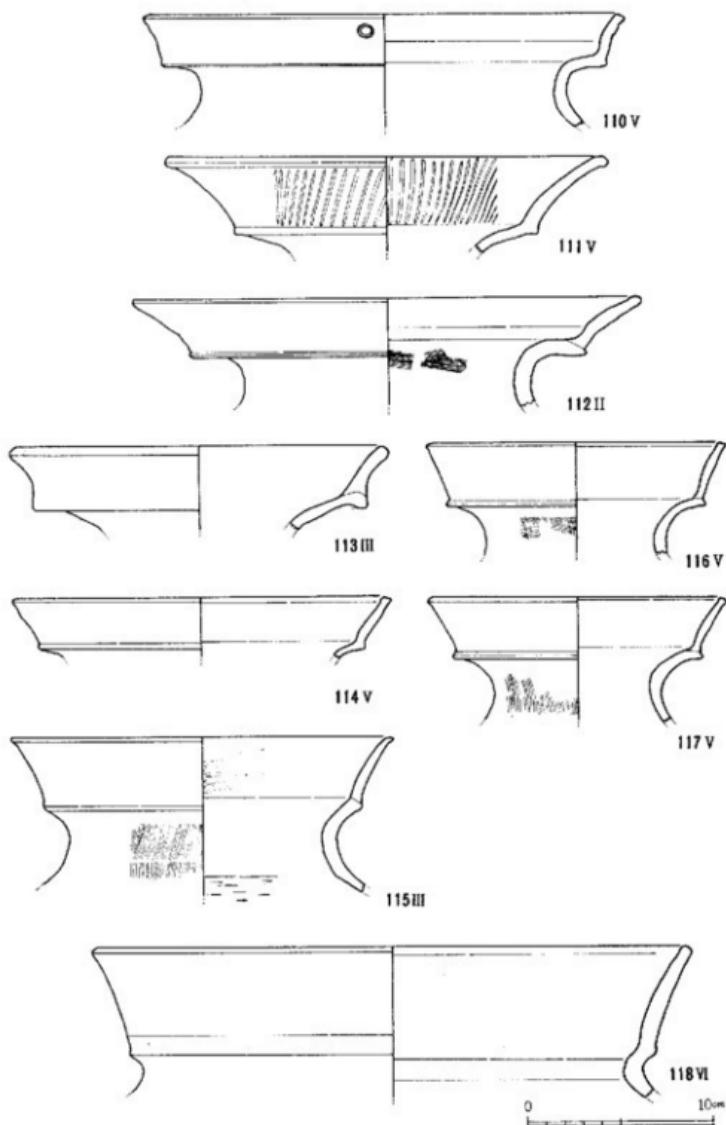
32 原深町遺跡出土土器実測図① (縮尺1/2, 1/4)



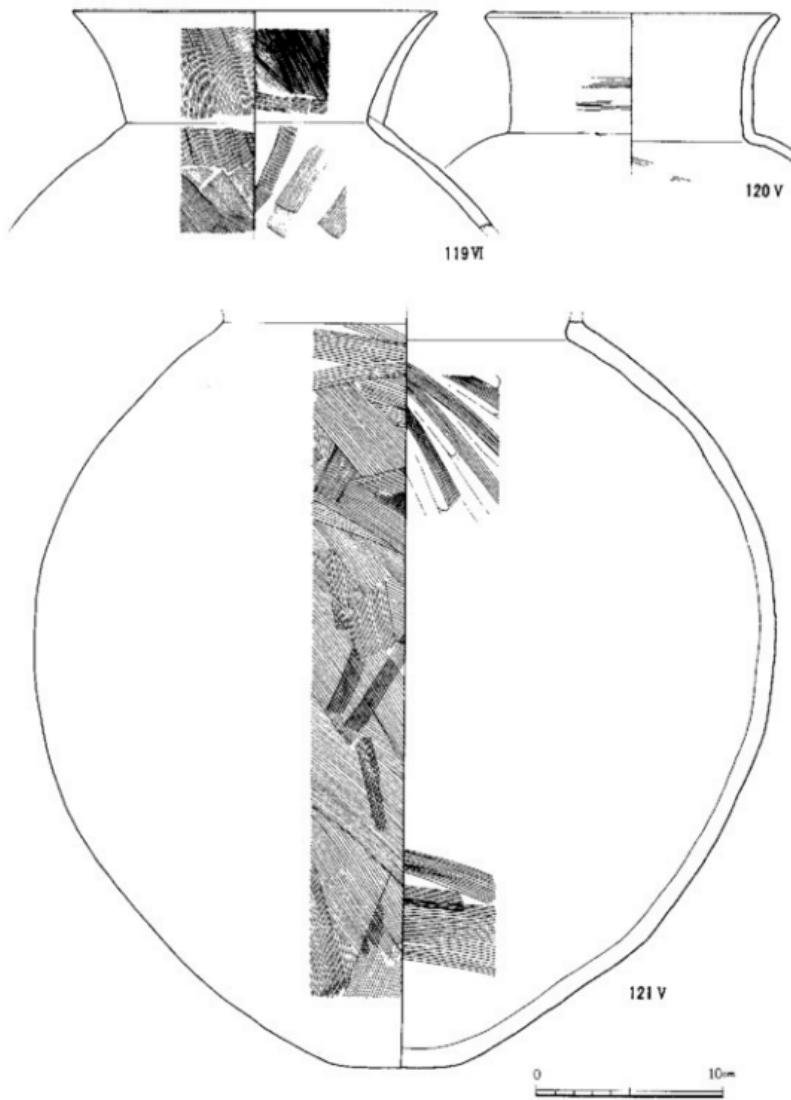
53 原深町遺跡出土土器実測図③ (縮尺1/2)



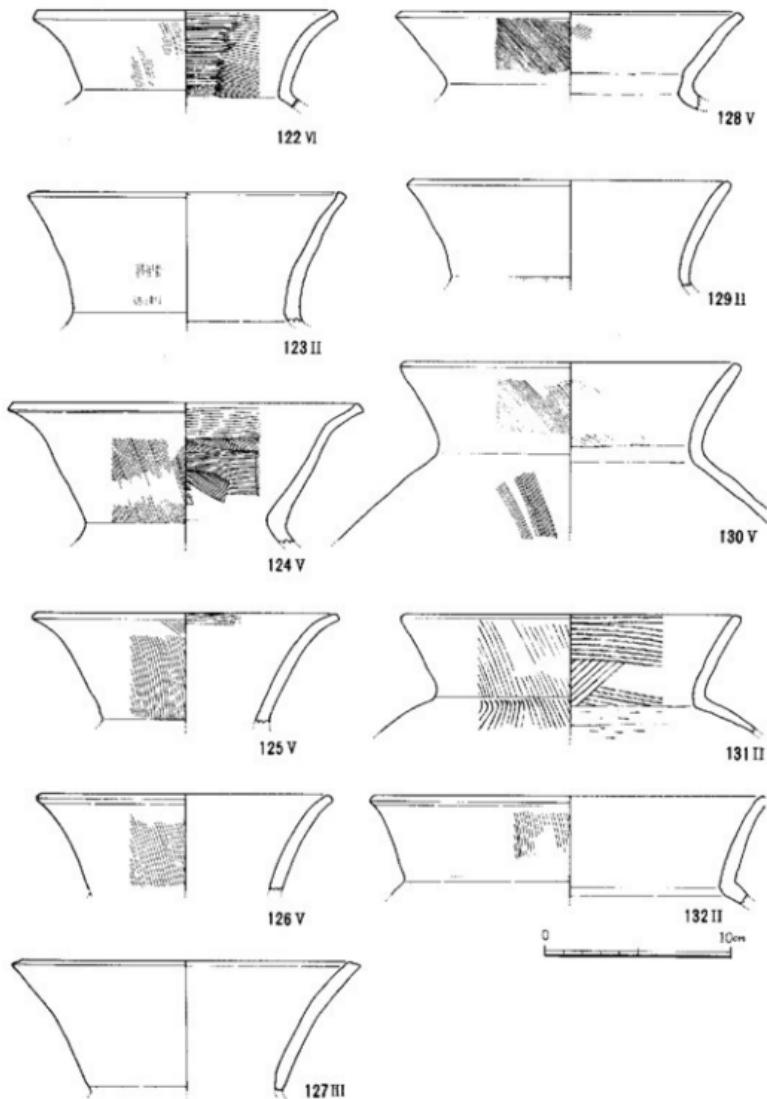
54 原深町遺跡出土土器実測図③ (縮尺5倍)



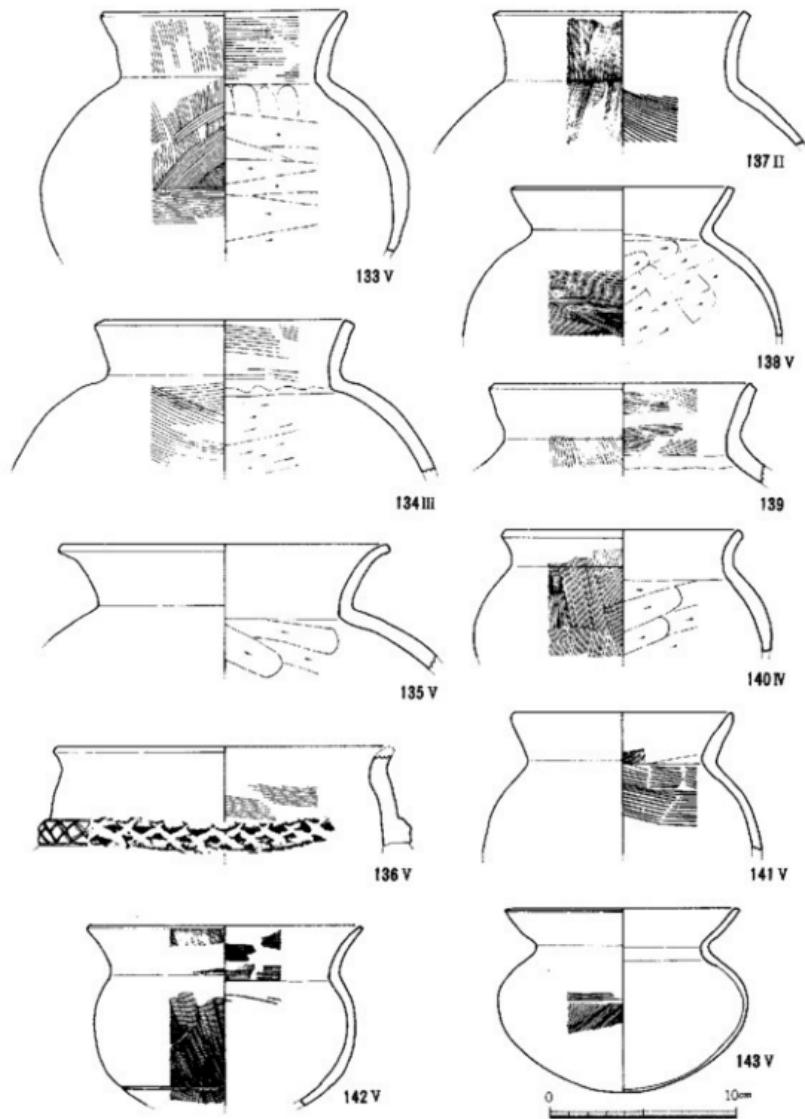
55 原深町遺跡出土土器実測図④ (縮尺1/6)



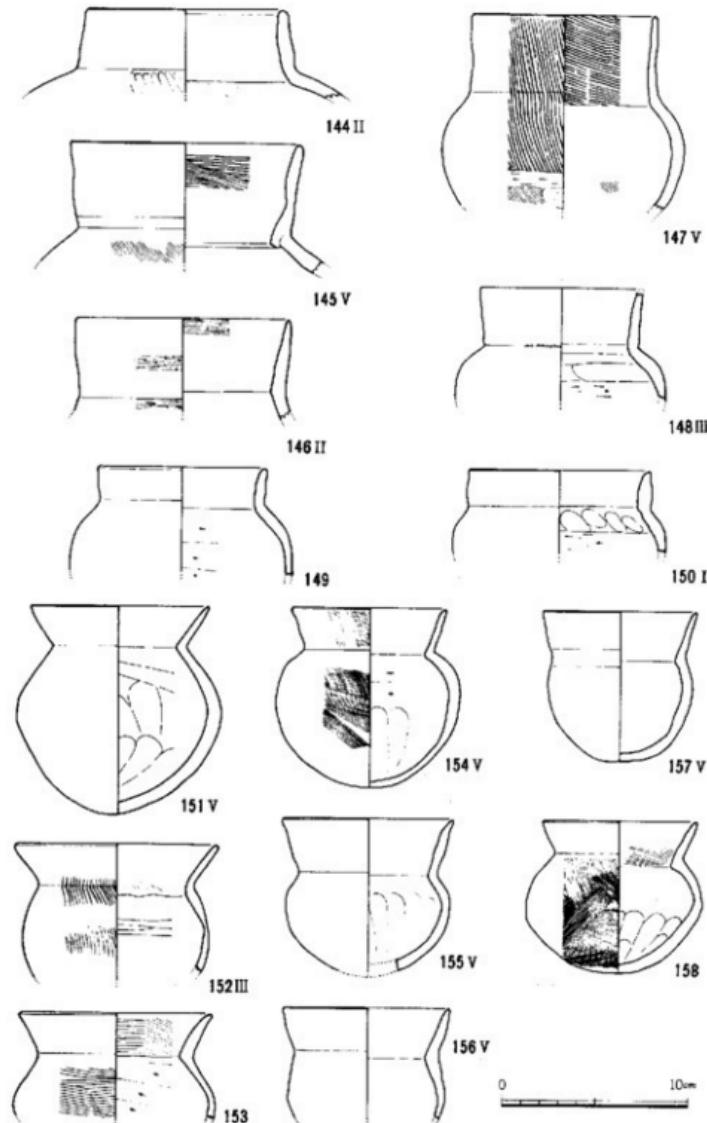
56 原深町遺跡出土土器実測図⑨ (縮尺1/2)



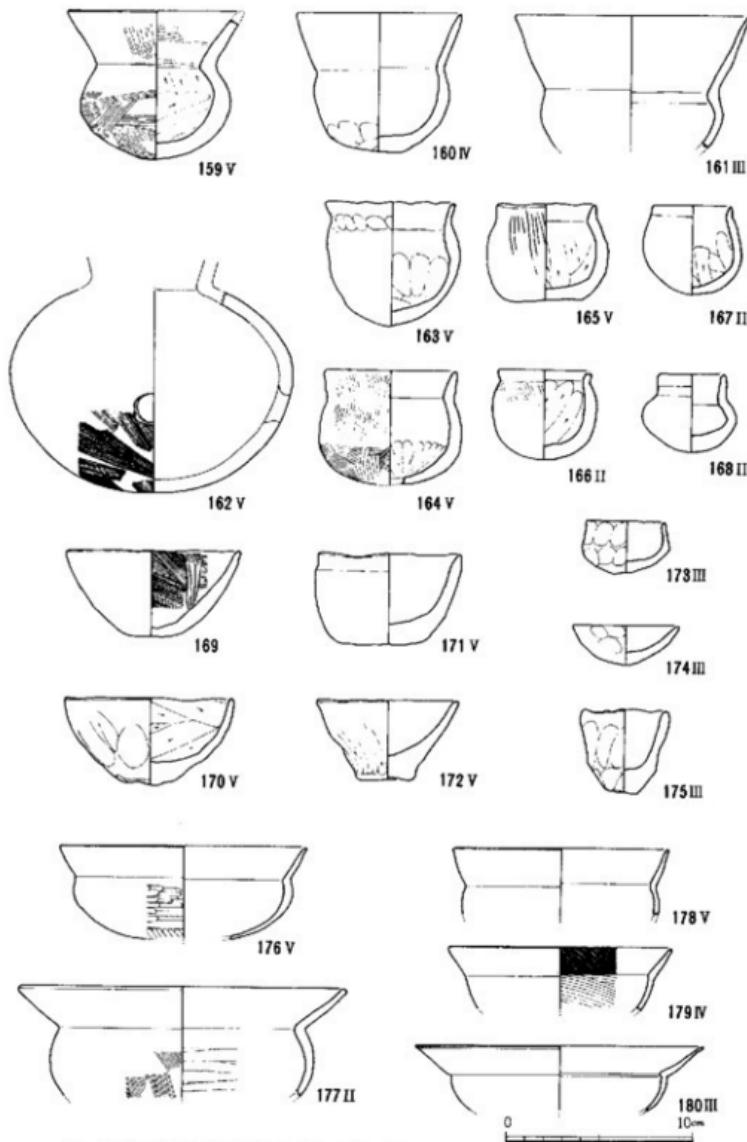
57 原深町遺跡出土土器実測図⑥ (縮尺1/6)

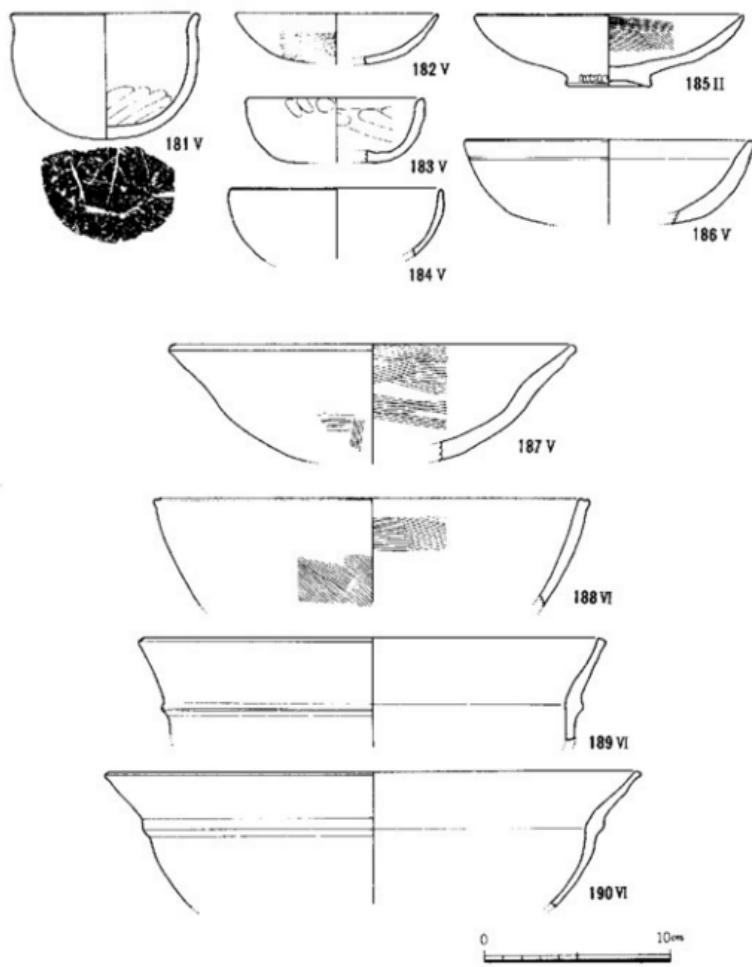


58 原深町遺跡出土土器実測図③ (縮尺1/6)

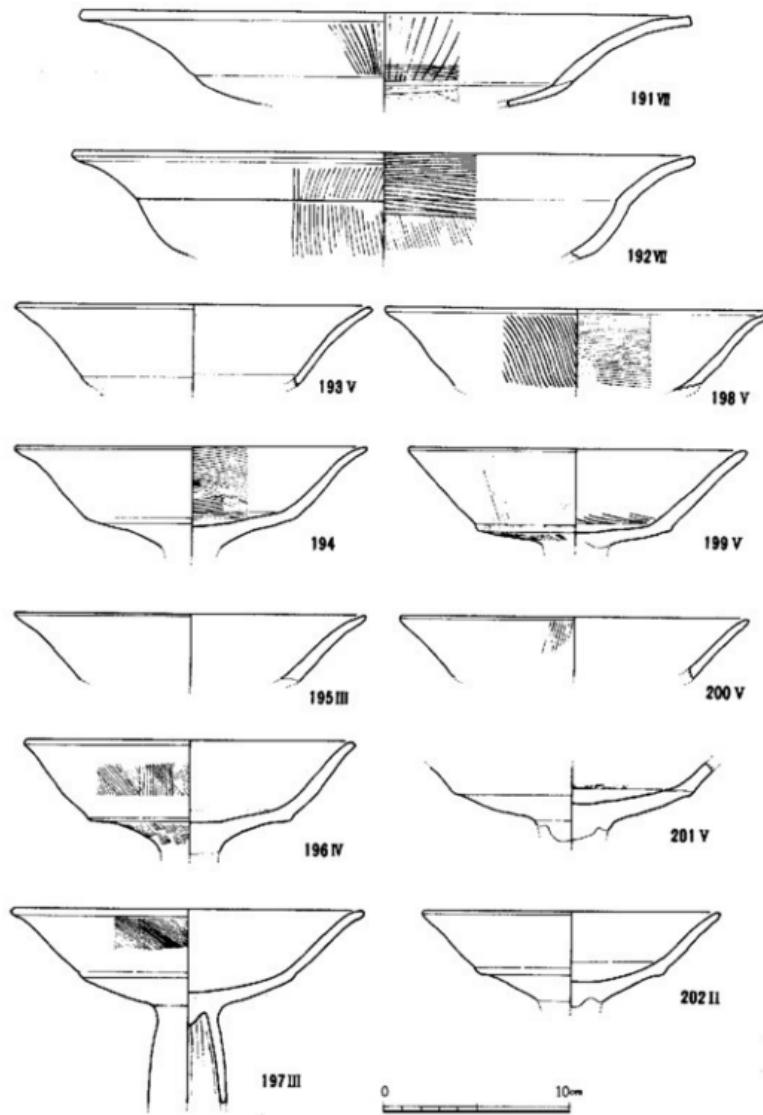


59 原深町遺跡出土土器実測図③ (縮尺1/2)

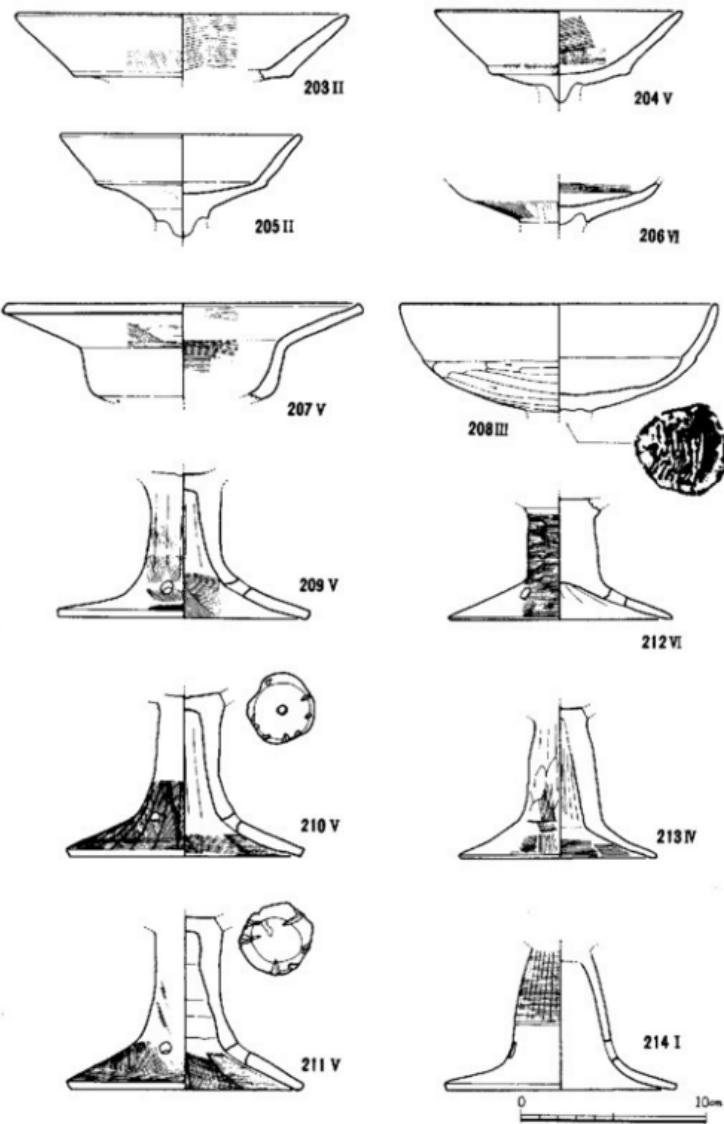




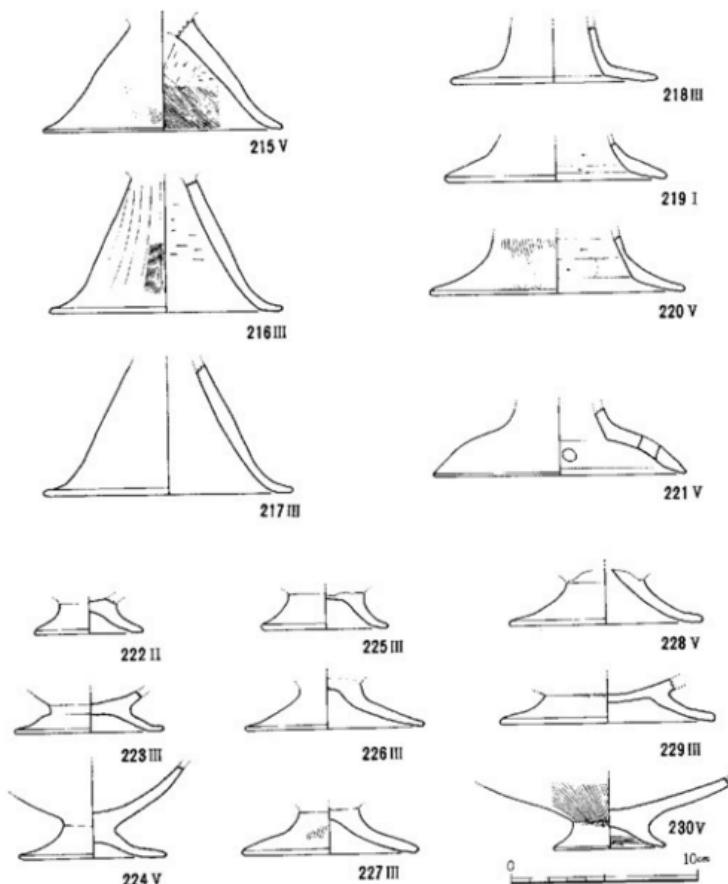
61 原深町遺跡出土土器実測図② (縮尺1/2)



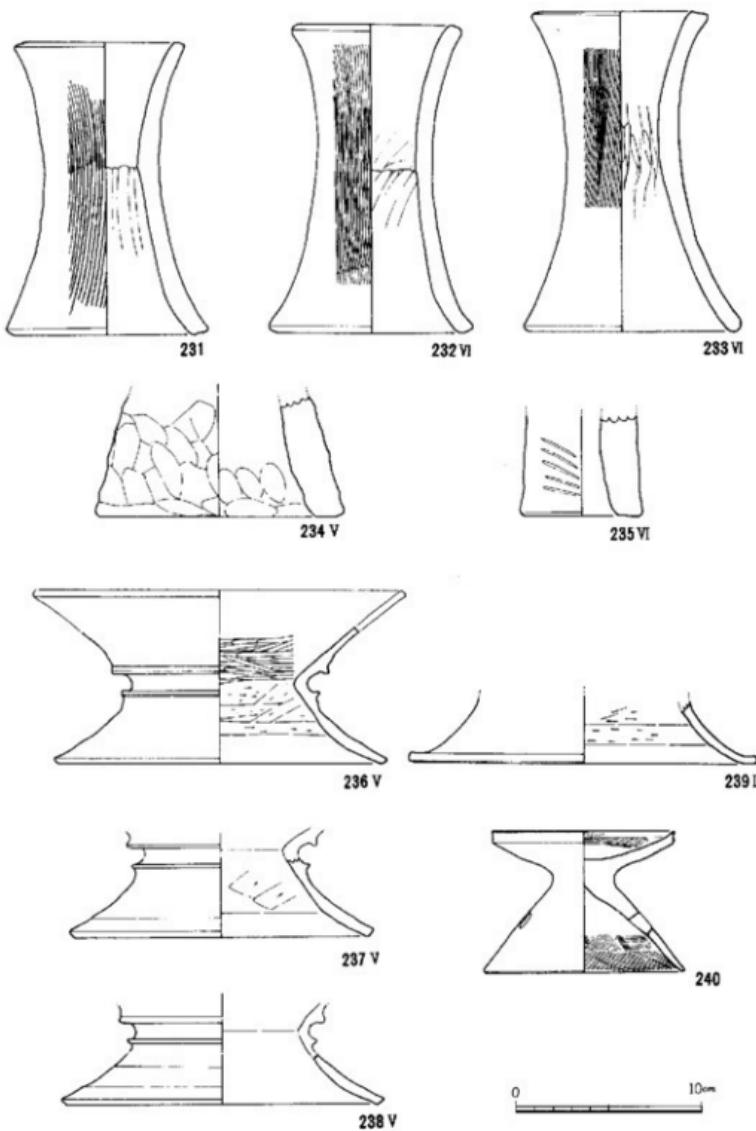
62 原深町遺跡出土土器実測図② (縮尺1/2)



63 原深町遺跡出土土器実測図② (縮尺1/2)



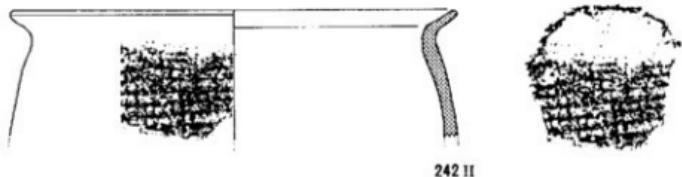
64 原深町遺跡出土土器実測図② (縮尺1/5)



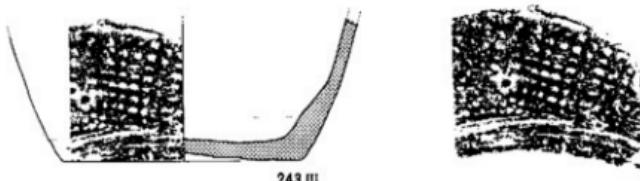
65 原深町遺跡出土土器実測図④ (縮尺1/6)



241 II



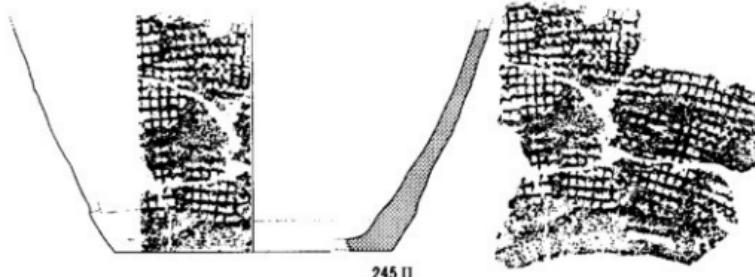
242 II



243 III

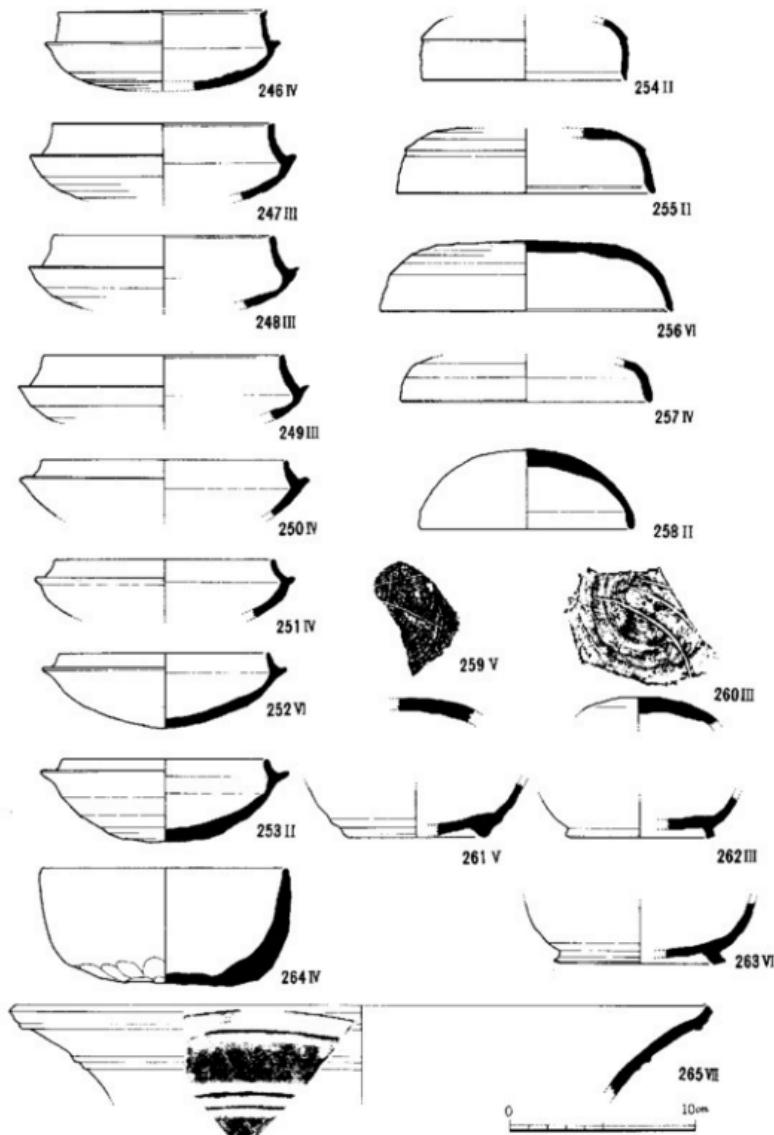


244 II

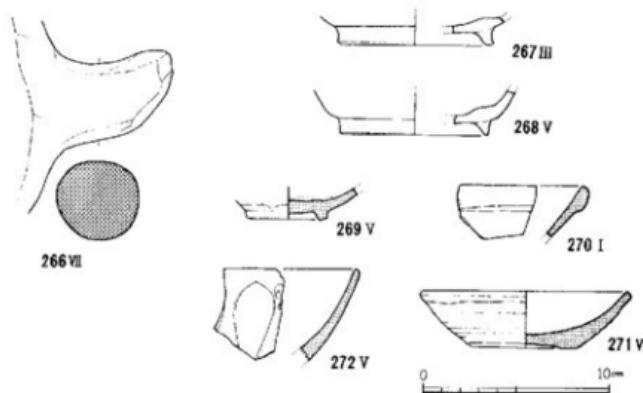


245 II

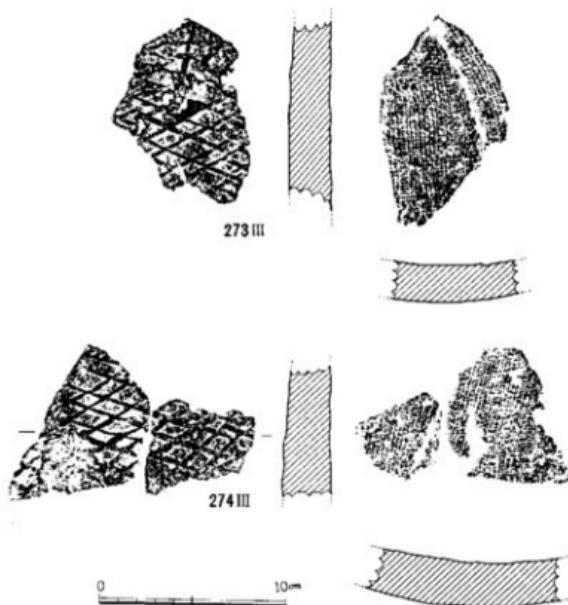
0 5 cm



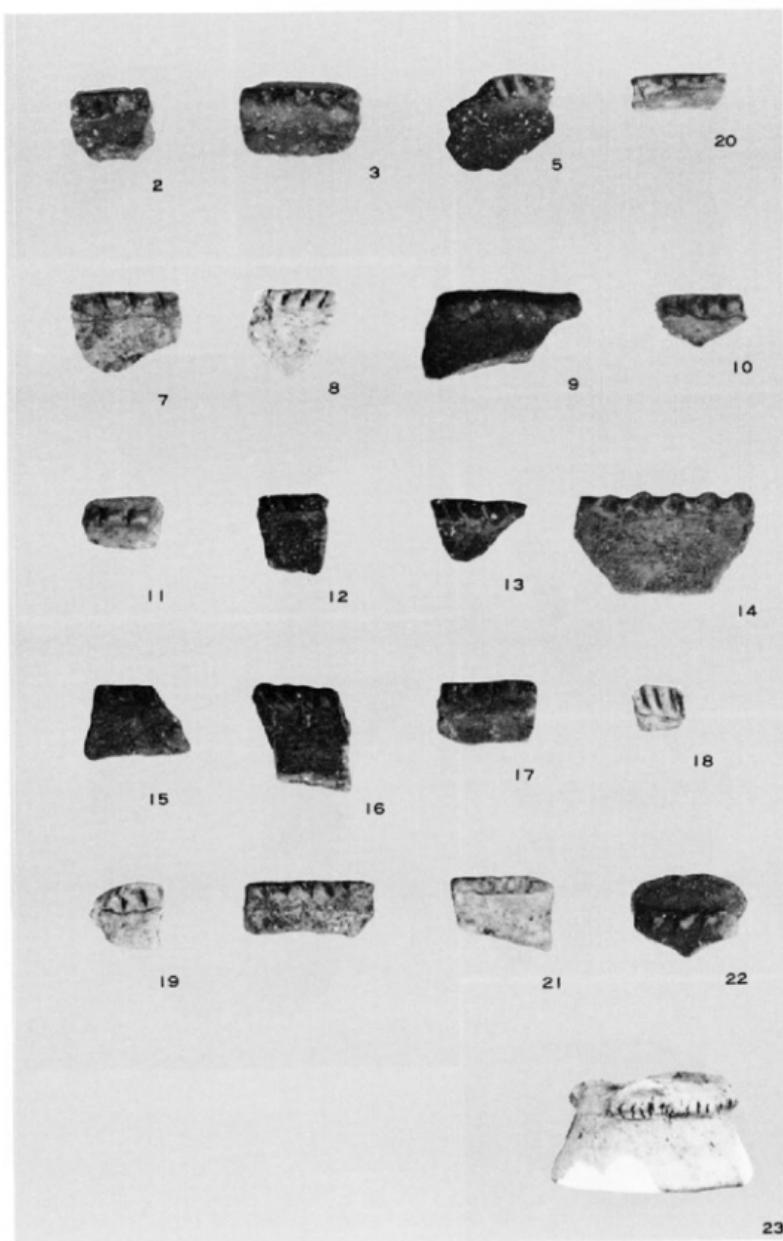
67 原深町遺跡出土土器実測図◎ (縮尺1/2)



68 原深町遺跡出土土器実測図② (縮尺1/10)



69 原深町遺跡出土瓦実測図 (縮尺1/10)



70 原深町遺跡出土土器① (縮尺1/2)



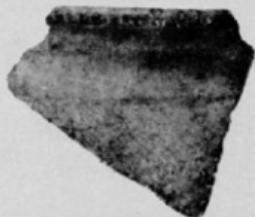
30



24



26



36



41



38

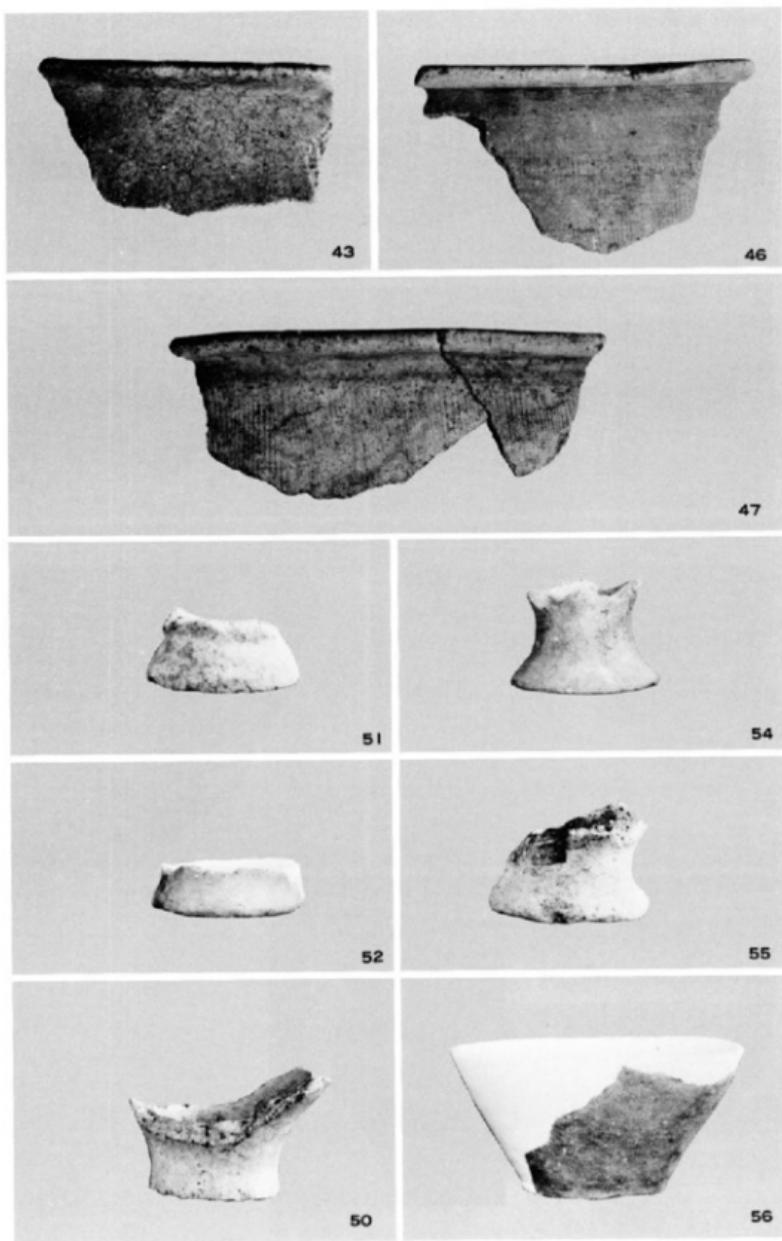


42

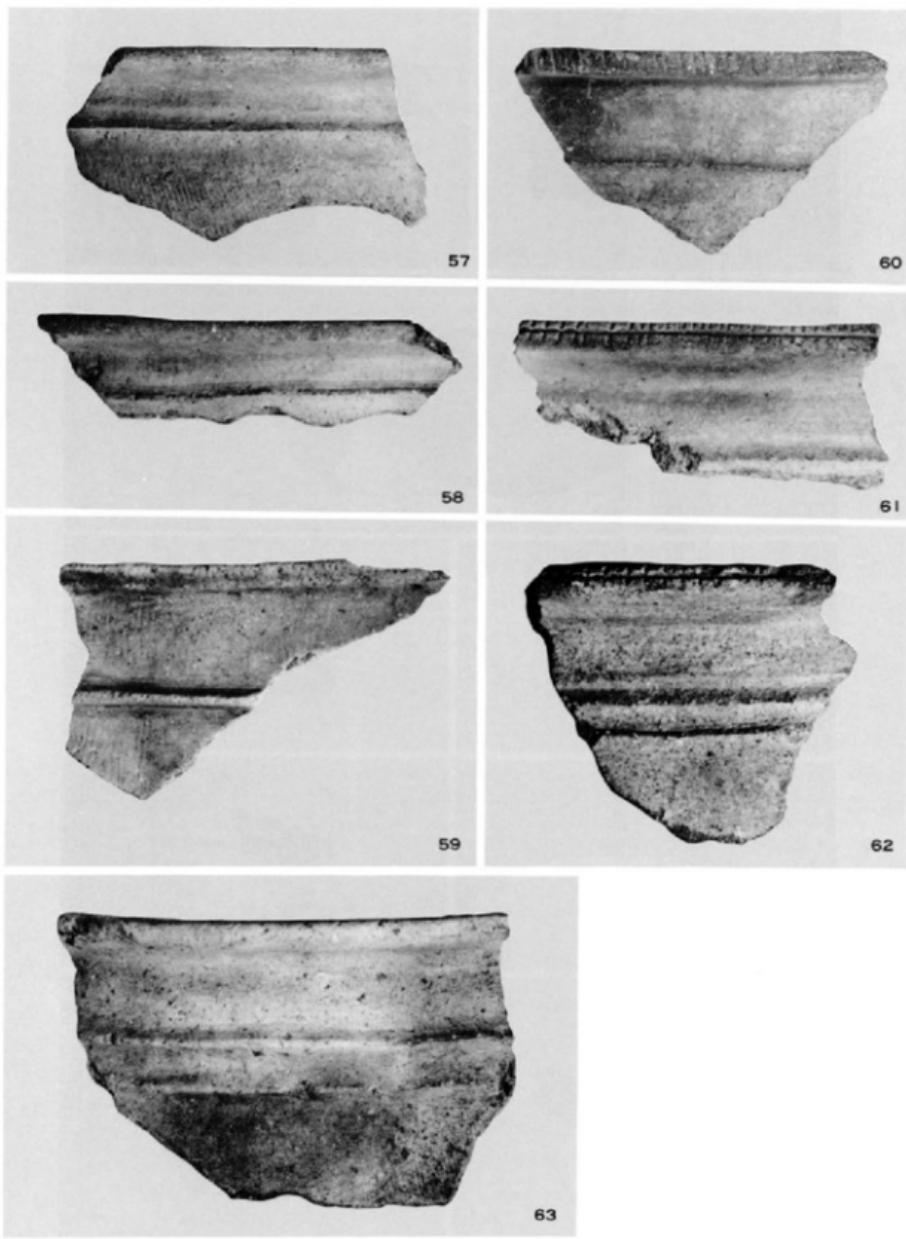


37

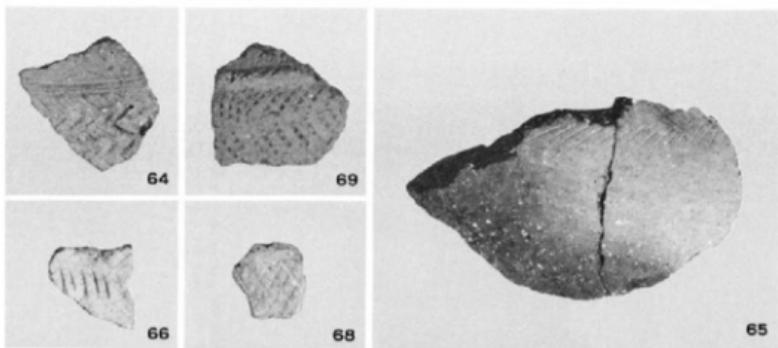
71 原深町遺跡出土土器② (縮尺5%)



72 原深町遺跡出土土器③ (縮尺5%)



73 原深町遺跡出土土器④ (縮尺1/2)



74 原深町遺跡出土土器⑤ (縮尺1/2)

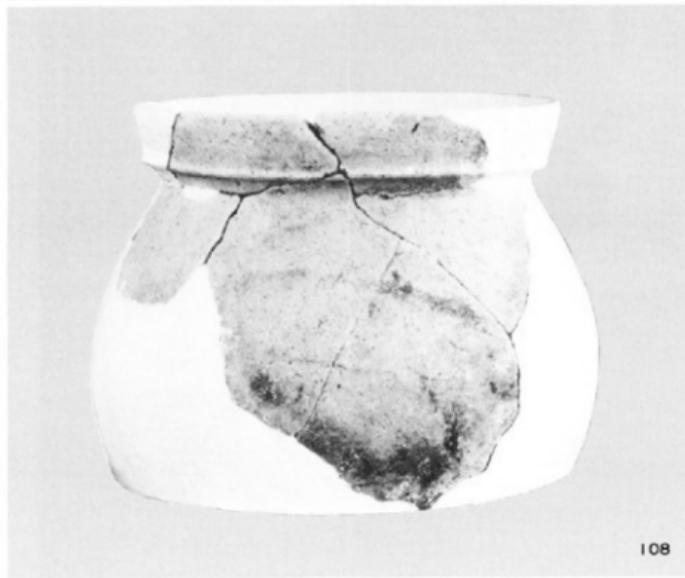
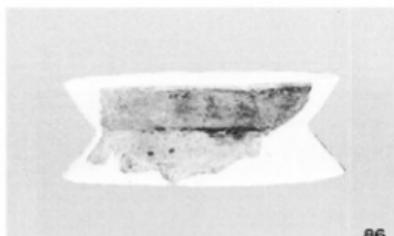


78

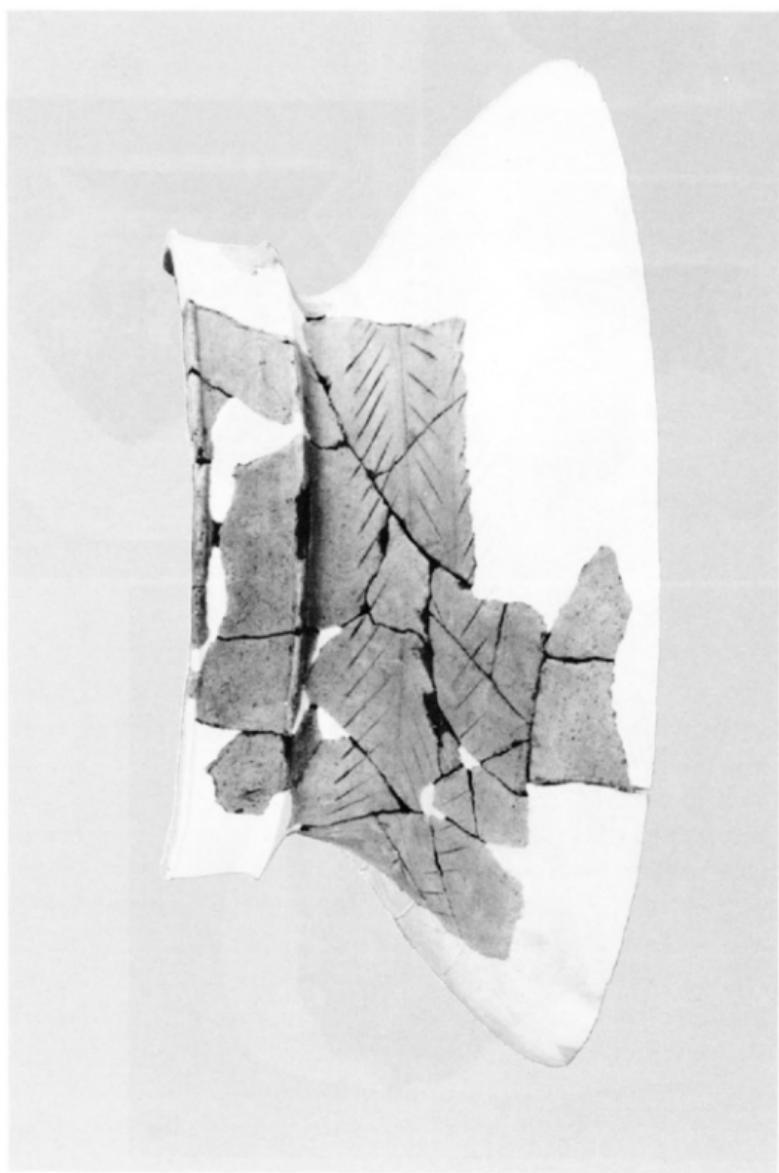


81

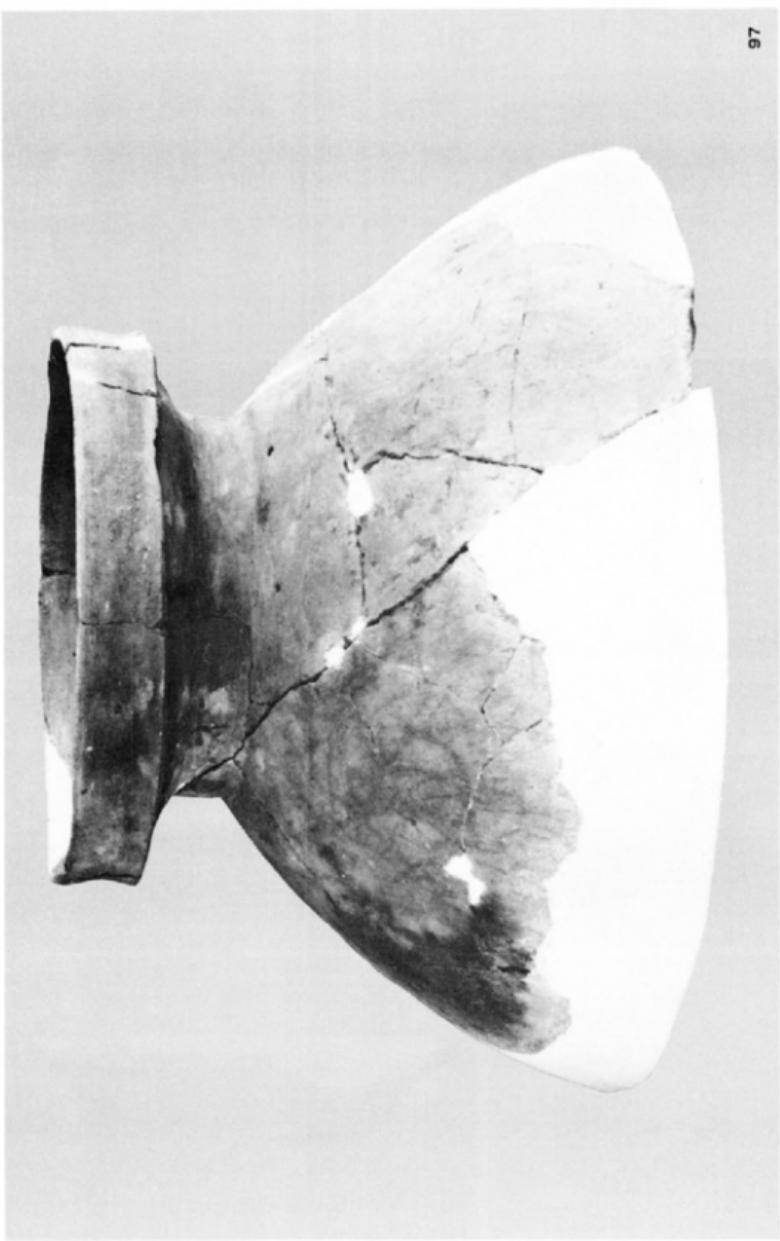
75 原深町遺跡出土土器⑤ (縮尺5%)



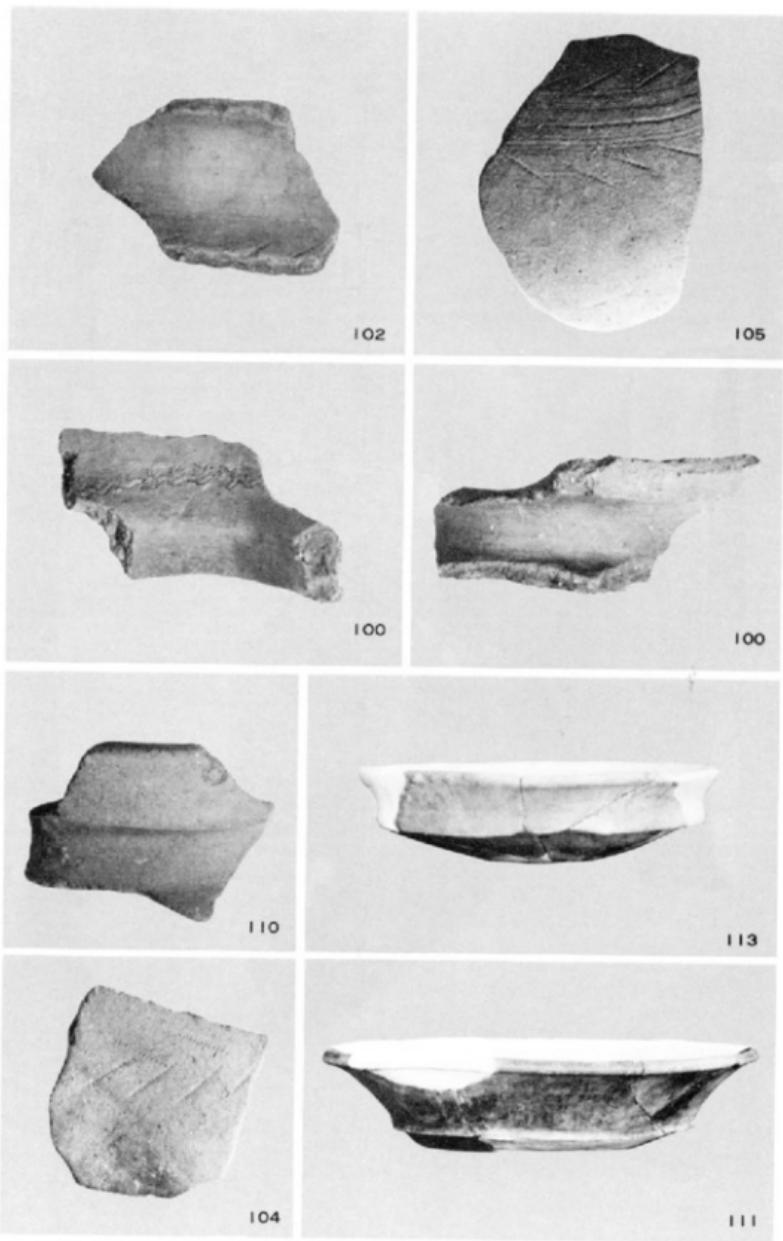
76 原深町遺跡出土土器⑦ (縮尺5%)



77 原深町遺跡出土土器⑧ (縮尺5分)

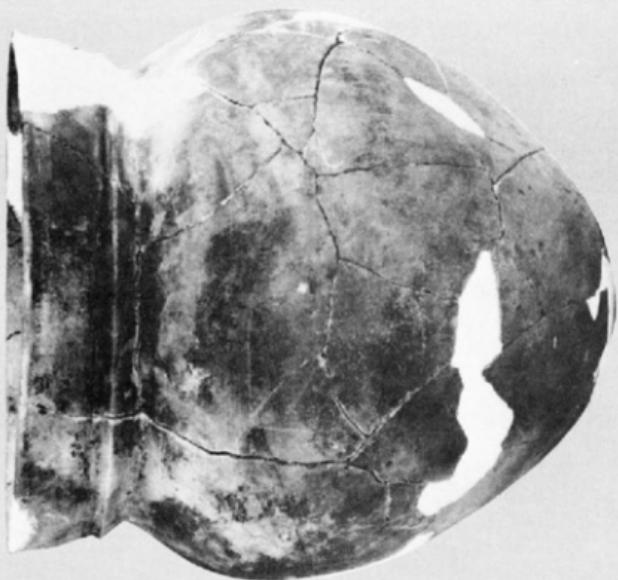


78 原深町遺跡出土土器⑨ (縮尺1/6)

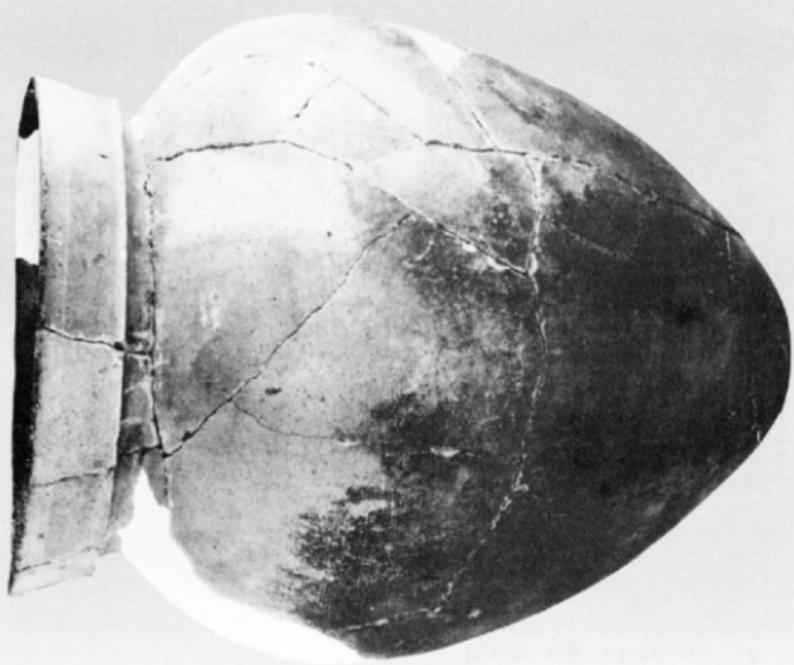


79 原深町遺跡出土土器③ (縮尺5%)

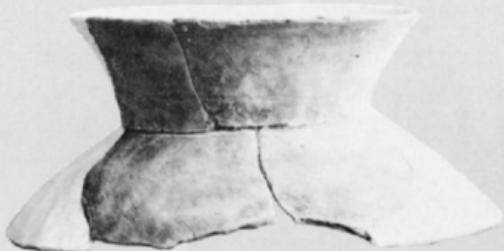
101



107



80 原深町遺跡出土土器⑧ (縮尺3分)

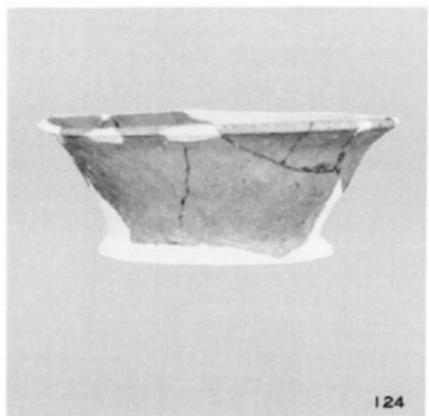


119

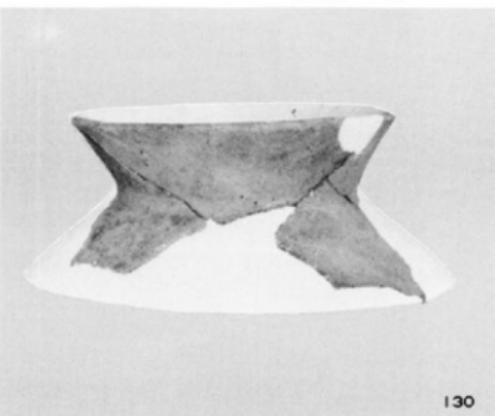


121

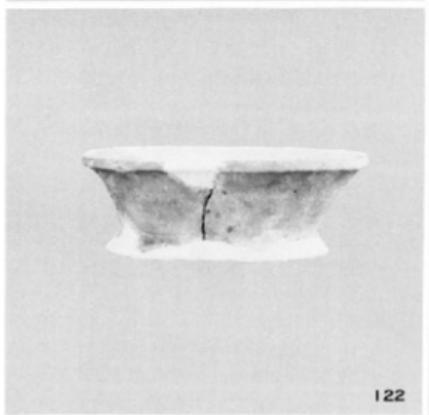
81 原深町遺跡出土土器② (縮尺5%)



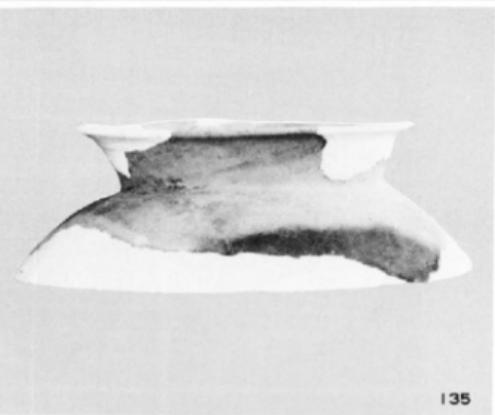
124



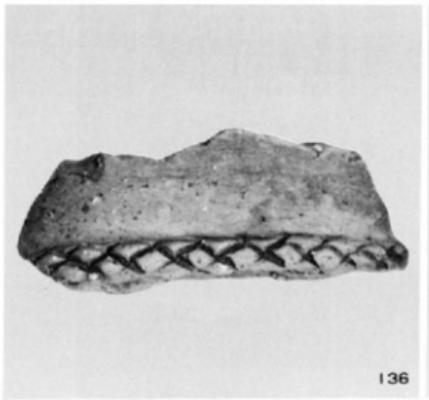
130



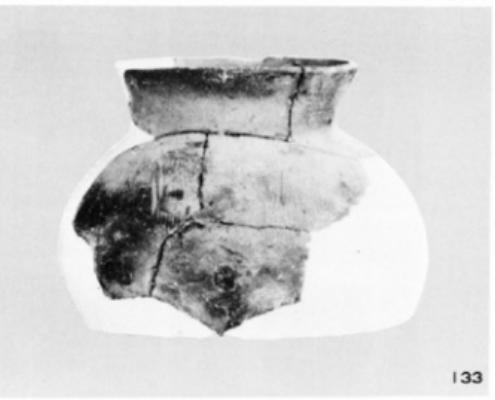
122



135



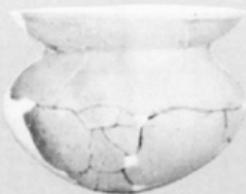
136



133



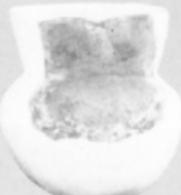
142



143



145



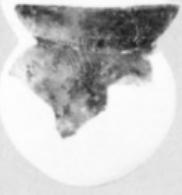
148



149



151



152



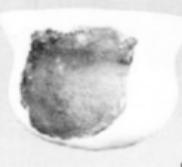
154



157



155



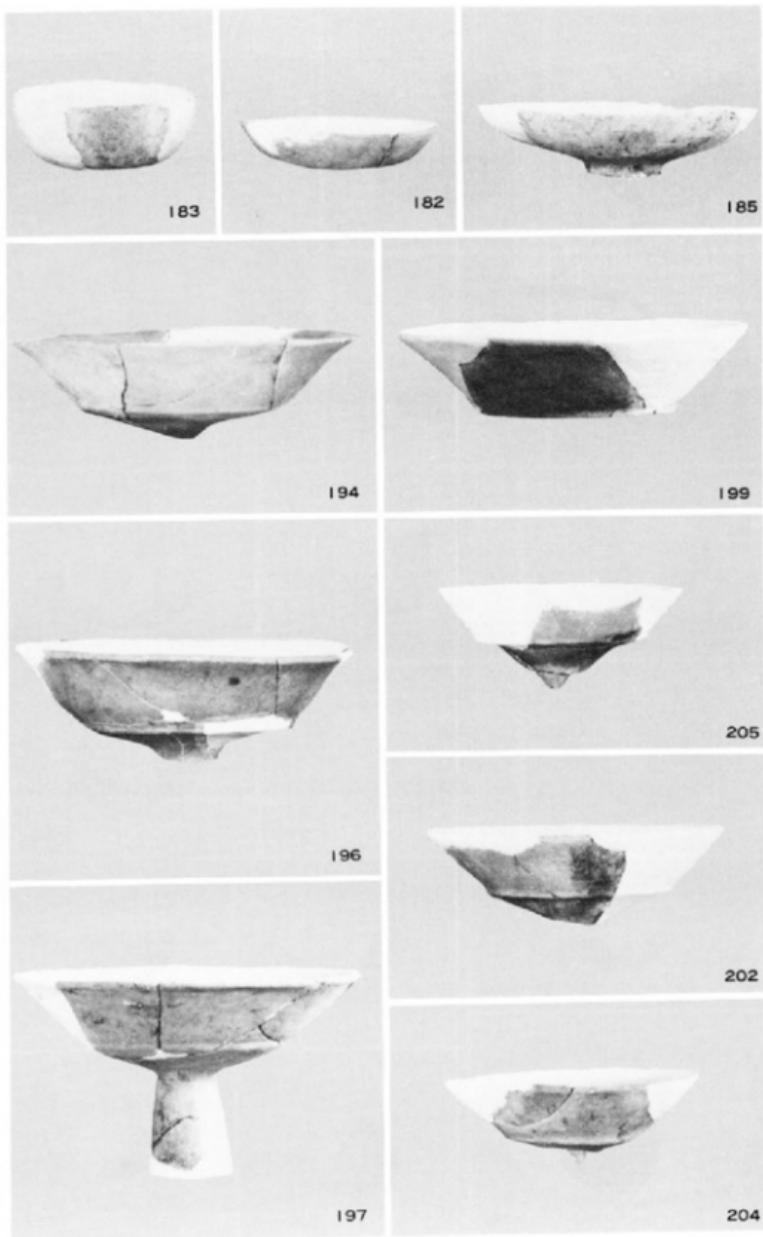
153



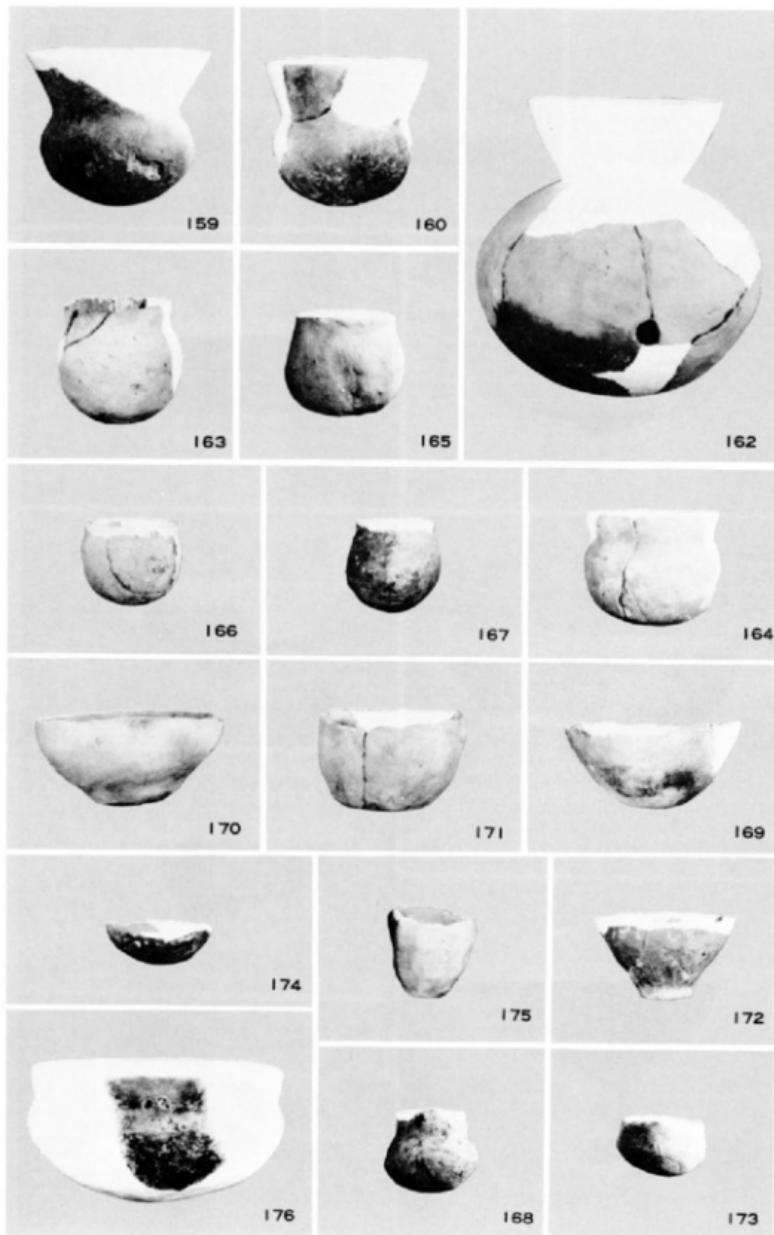
156



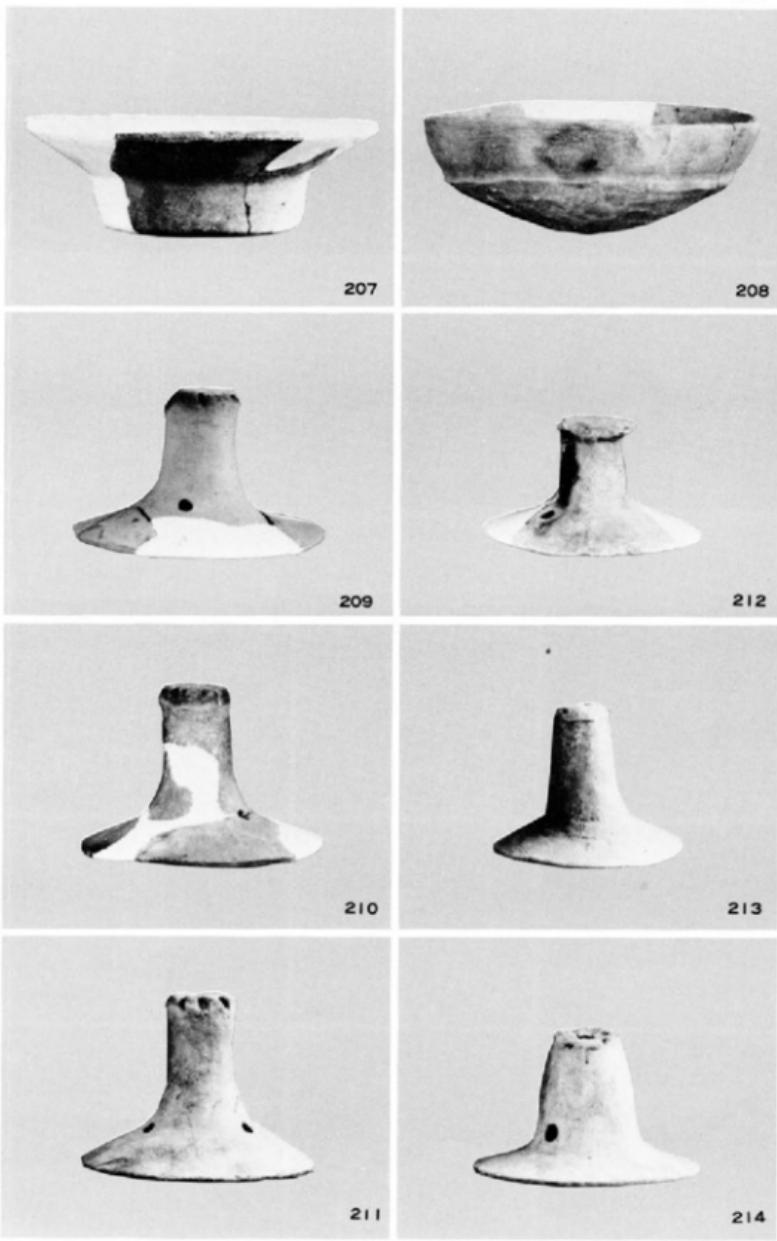
158



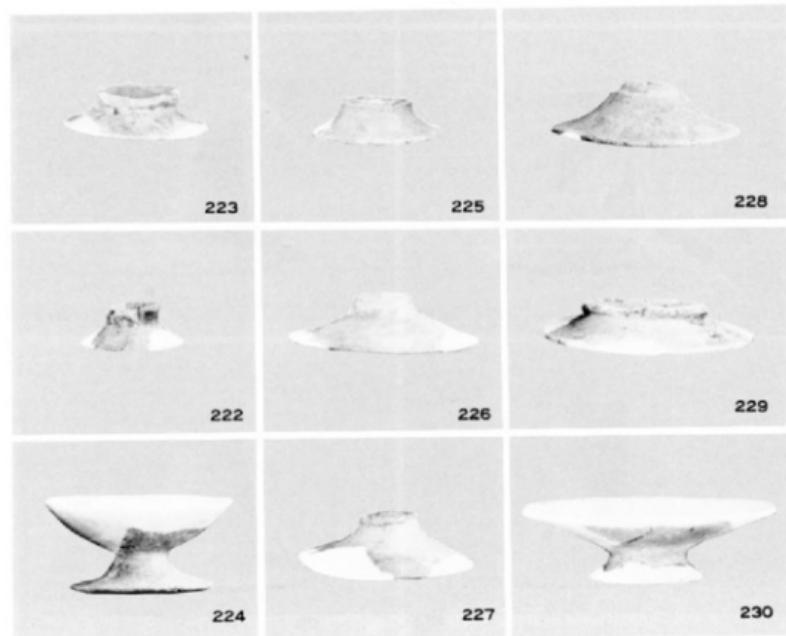
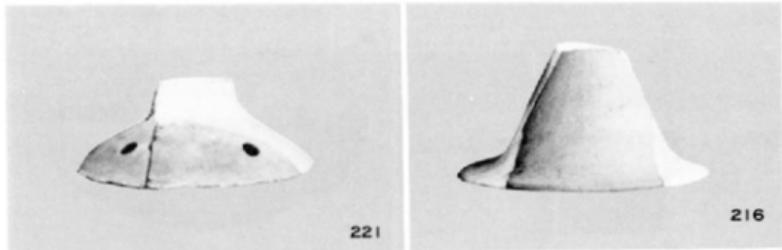
84 原深町遺跡出土土器② (縮尺1/6)



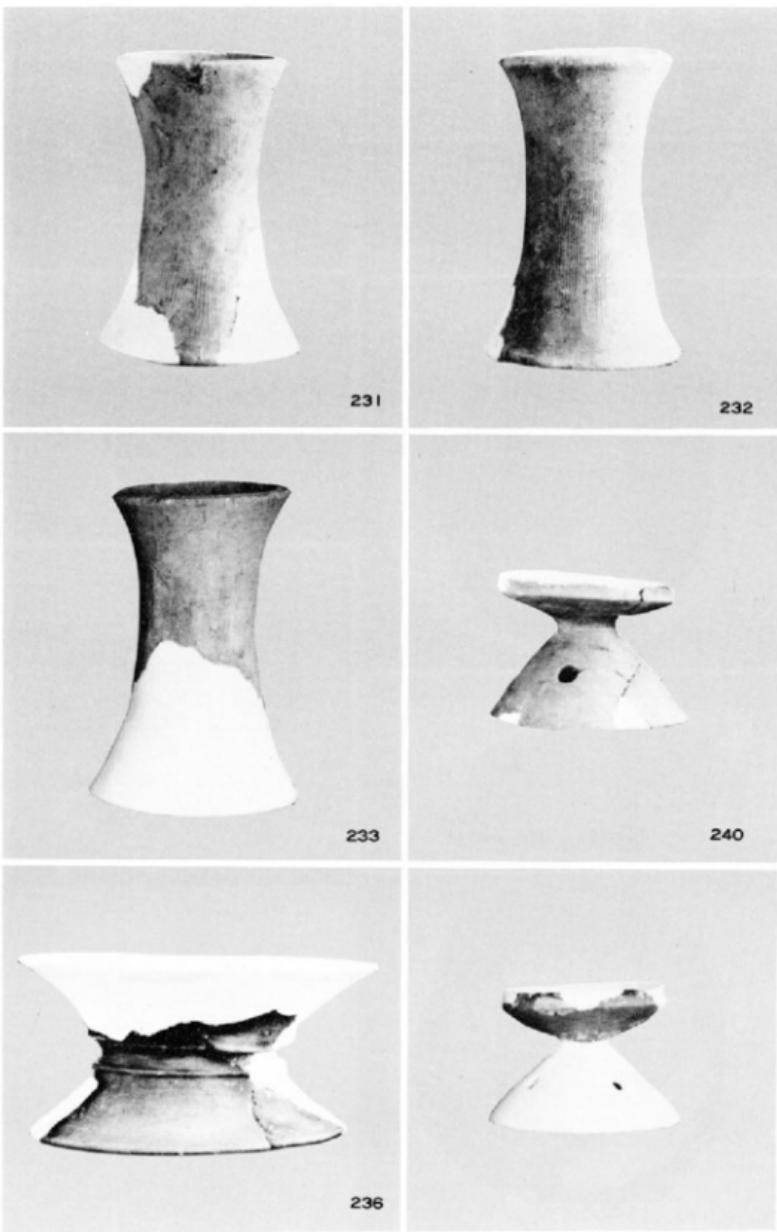
85 原深町遺跡出土土器⑨ (縮尺5%)



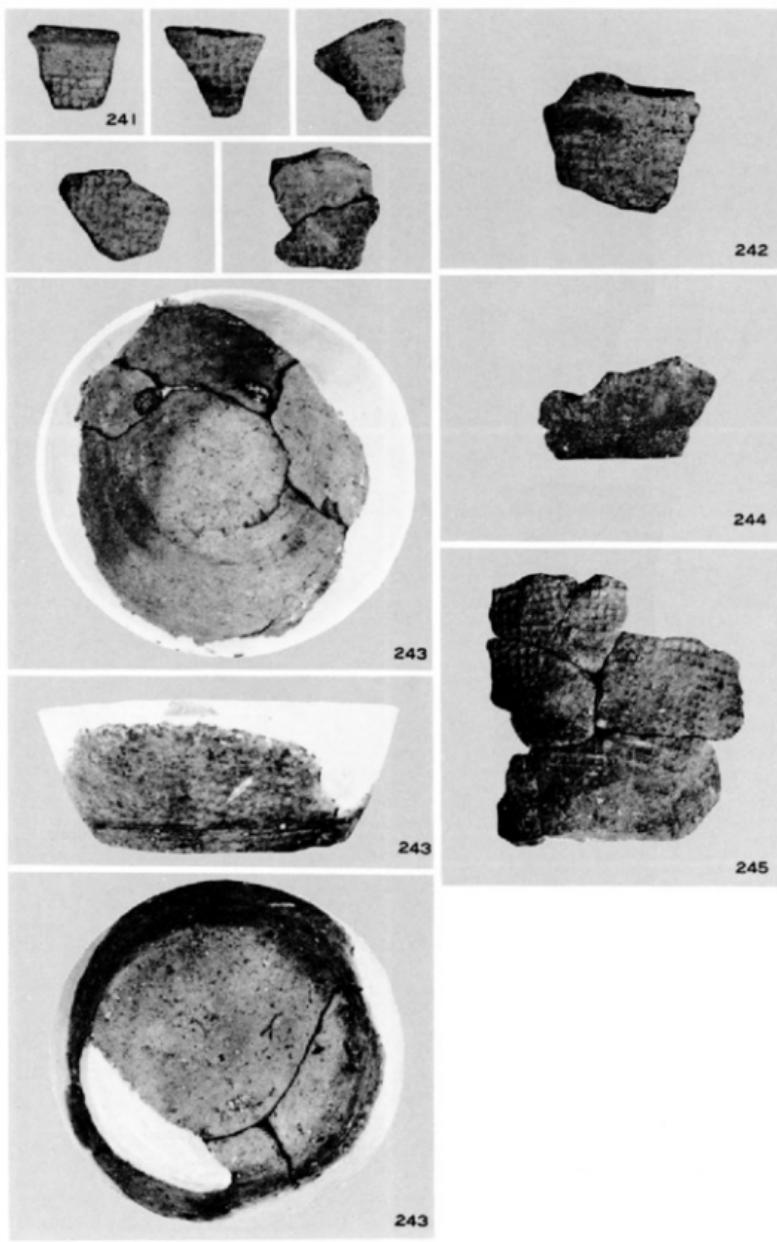
86 原深町遺跡出土土器② (縮尺3分)

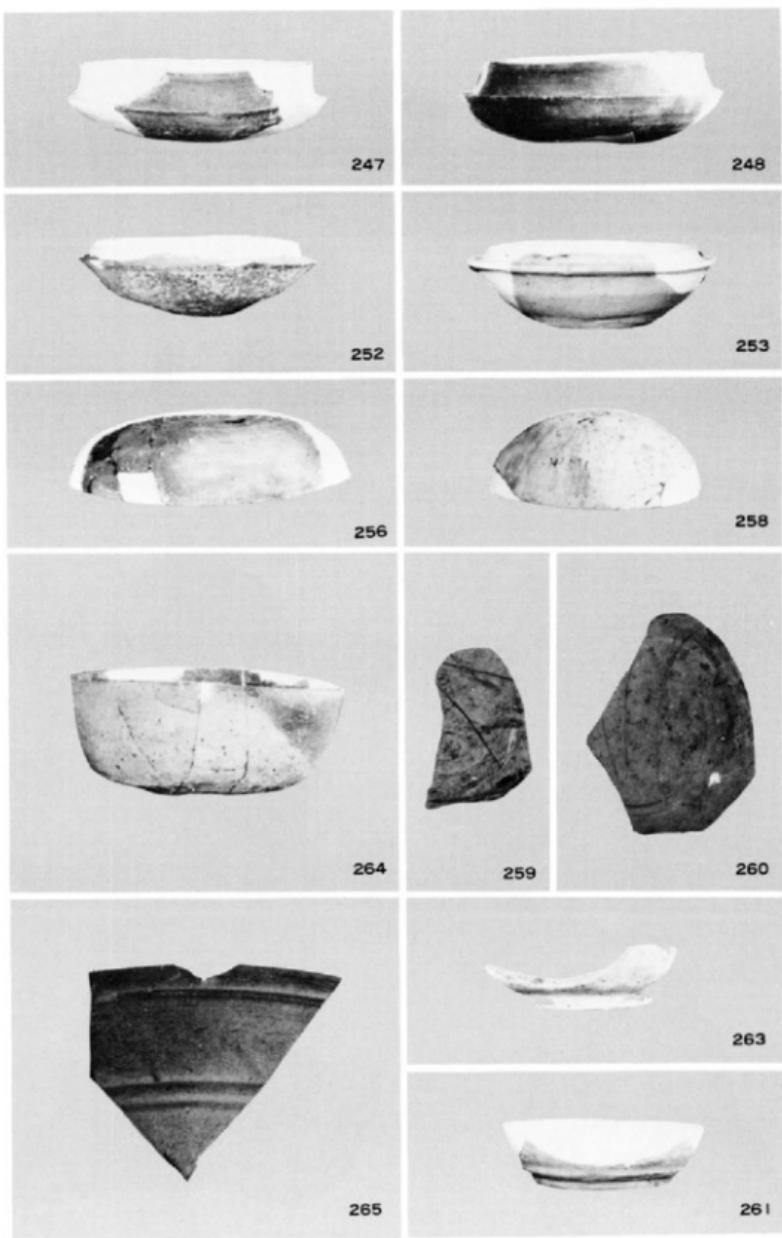


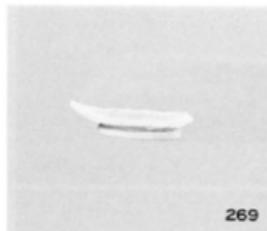
87 原深町遺跡出土土器③ (縮尺1/6)



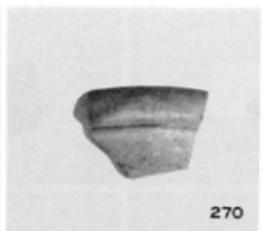
88 原深町遺跡出土土器⑩ (縮尺 $\frac{1}{2}$)







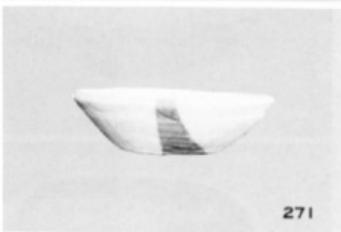
269



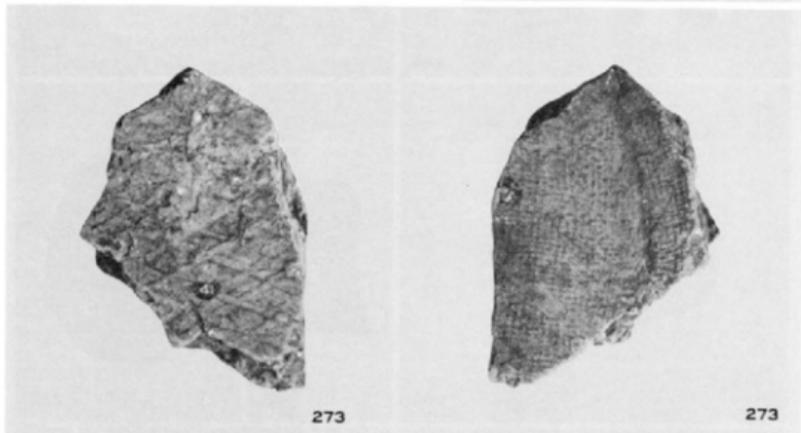
270



272



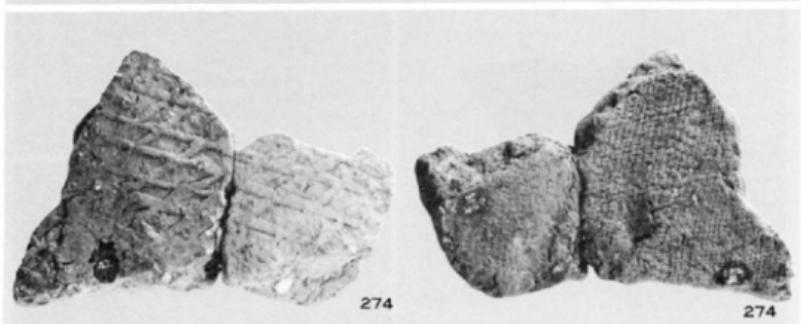
271



273



273



274

274

91 原深町遺跡出土土器、瓦② (縮尺1/2)

1. 土 器

原深町遺跡出土の土器は272点を図示したが、遺構ごとではなく縄文時代、弥生時代、古墳時代、歴史時代の時代ごとに分け、それぞれを器種ごとに分けた。土器の観察表は紙数の関係から別冊とし、ここでは土器の概略と各遺構の特徴的な土器、もしくは各遺構の時期を示す代表的な土器についてのみ記することにする。またII・III区で出土した赤焼土器については北九州市立歴史博物館の小田富士雄先生と武末純一氏に朝鮮半島の類似資料をいただくなどのご指導を受けた。なお土器は通し番号とし、各末尾に出土した発掘区をついた。

縄文、弥生時代

甕 1~21は夜白式土器の口縁部で、23は底部である。大溝と分水溝より出土し、いずれも磨耗した小破片である。口縁部は外傾するもの、内傾するもの、直立ぎみのものの3種があり、外傾するものが多い。口縁部の刻目突帯には、かつて板付遺跡で森、岡崎氏が分類した(A)刻目突帯の断面が口縁端より下がるもの(1, 2, 3), (B)口縁に接して下向きの傾斜面を持つもの(7, 8), (C)口縁端と同高であり、口縁端にやや被いかぶさる感じの蒲鉾形断面のもの(15, 16, 19)などがある。焼成はよいか、胎土に1mm大的の砂粒を含んでおり密ではない。23は底部で「ハ」字形に外に開いており端部は丸くおさめる。胴部への屈曲部には粘土紐を貼りつけ刻目を施している。24~39は弥生時代前期の甕で、口縁部はいわゆる如意形をなす。外湾する口縁部には刻目をつけるものと、つけないもの(30, 31)があり、多くは口縁端の下側のみにつけられている。器面の調整は口縁部内面は横ハケ、胴部外面は縱ハケで、丁寧に施されているものが多い。口縁部下に1条の沈線をいたるもの(36, 39)、断面三角形の突帯をめぐらし刻目をいたるもの(37)がある。40は底部から内湾しながら胴部がのび、その上端には断面三角形の粘土を貼り付けて平坦な口縁部をつくっている。口縁部下には突帯があり、口縁部と同じように刻目をいたしている。41~47と57~63は弥生時代中期の甕である。口縁部断面は逆「L」字形で内傾するものが多い。口径は約30cmのものが多いが、61~63のように40cmを越す口縁を持つものもある。口縁部に刻目をいたるもの(41, 42, 60~62)、口縁下に突帯をめぐらすもの(42, 58~63)があり、62, 63は2条の突帯である。外面に縱ハケを残すものがあるが、大半は横ナデして消されている。胎土、焼成はよく、たいへん堅緻な土器である。48~56は底部で、平底と上げ底がある。平底のものは薄手のものが多い。上げ底の内面は指押えであり、外面はくびれている。56は平底の底部中央に焼成前の穿孔があり軋に用いられている。

壺 64~69は前期の壺肩部である。64は肩部から頸部への移行部に2条の沈線をいた、二段の羽状文をいたしている。文様はきわめて整っている。65は扁球形の胴部をもち、外面の調整は細かい横のミガキである。肩部には右向きの羽状文があり、沈線は見られない。66, 67は左向

きの羽状文で、67は有輪羽状文である。68は斜めの格子文で右下がりの線が後につけられている。69は小さな突帯を貼り付けており、貝殻による文様は突帯の上にも施文されている。70～74は中期の壺口縁部である。71～74は広口で、口縁端内面に断面三角形の粘土を貼り付け上面に平坦面をつくっている。71の口縁部内面は細かい横のヘラミガキで、外面は縦ハケを横ナデで消している。73は口縁部外端に浅い刻目をつけている。

古墳時代

壺 75～77はく字形の口縁部を持つ壺である。77は丸底に倒卵形の胴部がついており、胴部の最大径は28.6cmで口径より大きい。口縁部への屈曲は大きく内湾ぎみにのび端部は内側にわずかに突出している。上面はやや凹状となり、屈曲部内面はナデ上げて明瞭な棱をなさない。口縁部は内面の横ハケ目を横ナデ消し。胴部外面は底部までハケ目調整。内面は右上がりのヘラ削りである。78～81は胴部に叩き痕が認められるもので、78～80は、口縁部の外反が大きく、屈曲部内面に明瞭な棱を持っている。78は第2号壙出土で外面の細かい叩き痕をハケ目で消している。81は大溝出土で口縁端は上方に突出させている。叩きは太めで胴部中位まであり下半は縦の条痕が見られる。82は叩き痕はないが口縁部の特徴は79～81に近い。82～94はく字形口縁部を持っており、口径は14～18cmを測る。口縁部が内湾ぎみにのび、端部内面がわずかに突出し、外面は強く横ナデして凹状にしているのが特徴である。胴部は中位に最大径を持ち、丸底となるのであろう。器面の調整は細かいハケ目で、内面は屈曲部のやや下からヘラ削りされている。89、92～94は胴部上位に波状文をいれている。外面に煤が付着しているのが多い。

壺 95～118は二重口縁壺である。95の口径は36.8cmを測る大型壺である。口縁部はほぼ直立しており、両端とも外に小さく突出している。肩部から頸部にかけて櫛歯状の施文具で有輪羽状文をいれている。胴下半部を欠いているが、96のように球形となり、98、99のような丸底となるのであろう。96は外面の調整は細かいハケ目で内面はヘラ削りである。97は口径30.4cmを測る。95に比べ頸部がすぼまっており、胴部はやや長めの球形をなすのであろう。器壁は厚い。器面の調整は頸部内面は横ハケ、胴部外面は縦のハケ目である。100～102は二重口縁壺の頸部である。100の口縁部はないが、直立せず大きく外反しており、内面に波状文を施している。102～105は肩部に羽状文をいたした破片である。95と同じような施文具が使われている。106～109は二重口縁の土器であるが、壺とすべきか。口縁部の立ちあがりはわずかに外傾する。口縁部下端と上端内面は小さく突出している。上面はほぼ平坦となっている。107は4mmと薄手のつくりで長い倒卵形の胴部がつく。器面の調整は口縁部が横ナデ、外面は肩部に横ハケ目後に波状文をめぐらす。胴部は縦のハケ目、内面は上辺がヘラ削りのままで下辺が細かいハケ目を施している。108、109は胴部がより丸くなってしまっており、109は第2号壙背面より出土した（挿図30）。器面の調整は、外面がハケ目、内面はヘラ削りである。110～118は二

重口縁壺の口縁部である。110は口縁部に竹管状の押圧文がある。111の口縁部は大きく外湾しており内外面とも横ナデ後に縦のヘラミガキを加えている。112も同じように大きく外反する口縁部で頸部が強くしまる。115は口縁上端部が内側へ突出している間に、小さく外反しておさめており他とやや異にしている。二重口縁壺の多くは丁寧な調整が施されている。119~132は、広口壺である。119は外湾ぎみにのびる口縁部はそのまま先細りとなって終っている。器面は内外面とも細かいハケ目調整である。121は口縁部を欠くが、広口壺の胴部であろう。胴部最大径は中位にあり40cmを測る。122~132は端部のつくりにやや違いがあるが、屈曲部内面には稜がつく。124は口径19.2cmで長めの口縁部は微妙に湾曲して外反し、端部を外傾させておさめている。133~135、137~139の口縁部は短かく外反している。胴部は球形で、胴部内面はヘラ削りで、外面はハケ目調整である。136は口縁部の小破片のため全形を知りえない。頸部に断面台形の突帯をめぐらし格子状の刻目をいれている。口縁部は内湾ぎみに直立し、端部は小さく外反している。明茶色を呈し、内面は横ハケ目を横ナデして消している。140~161は小型丸底壺である。144~150は直立ぎみにのびる口縁部を持っており、144、145は大きめの胴部がつくもので他と区別すべきか。143の口縁部のつくりは、84などの腹口縁部に類似している。器壁も同じように薄く、胴部内面はヘラ削りで、外面はハケ目調整で類似点が多い。小型丸底壺は口縁部の外傾度、口径と胴部径との比較などで多くの形態がある。162は胴部中位に直径1.5cmの孔が焼成後に穿たれている。163~175は手捏ね土器で、形態は小型丸底壺形と鉢形のものがある。176~190は鉢である。176~180は小型丸底壺と同じようなつくりの口縁部で大きく外に開いている。176は口径13.2cmで、屈曲部内面には後を持つが丸みがある。体部外面は細かいヘラミガキで内面は丁寧なナデ調整を加えている。181は体部上部でわずかに外反して口縁部をつくっている。底部には葉脈模が残っている。182~186は丸底の底部から内湾ぎみに胴部がのび、そのまま丸くおさめている。185は底部の側面を押して脚をつくっている。山陰地方で低脚付环形土器と呼ばれている土器に類似しているが脚のつくりが貧弱である。187~190は大型の鉢で体部が中位で屈曲するものの、屈曲部に断面三角形の突帯をめぐらすもの、屈曲しないものなどがある。191~221は高坏である。全形を知りえるものは1例もない。191、192は坏部中位よりやや下で屈曲し、上半部が大きく外湾しながらのびている。191は上半部の長さが下半部を凌いでいるが、192の屈曲部は中位にある。193~206の坏部下半部はわずかに内湾ぎみに短かくのび、上半部は直線的にのびるもので、口縁部で小さく外反するものと、しないものがある。後者には屈曲部外が小さく突出しているのが多い。207は最内庄内式に見られる二段の屈曲を持つ高坏に類似している。直線的にのびる口縁部は内外面ともにハケ目を横ナデ消しされており、口端は内面に小さく突出する。一段目屈曲の接合部から取れている。早良平野での類例はないが、博多区那珂深ヲサ遺跡で出土している。²⁰⁸

は坏部中位に段があるが、下半部から屈曲せずに内湾しながらのび、下半部外面に細かいヘラ削りを加えている。209～221は高坏脚部で、脚筒部が円柱状をなすものと大きく開くものとがある。円柱状のものには裾部への屈曲部に2～3か所の小孔がある。脚筒部が開くものには裾部で屈曲して大きく開くものと、屈曲部が明瞭でなく水平になり端部となるものがある。222～230は小型の脚部で上部形を知りえない。230は内面に丹が塗付されており、外面は縦のハケ目調整である。231～235は弥生時代の器台である。234は内外面ともに指押で凹凸となっている。235は外面に叩き痕が残る。236～239は鼓形器台である。239の脚台部径は18.8cmありやや大きい。236～238は大溝出土で器受部より脚台部の径が小さい。器受部の内面は細かいヘラミガキ、脚台部はヘラ削りである。240は皿形の受部を持つ器台である。受部口縁端は上に小さく突出している。脚部には4つの小孔が見られる。246～260は須恵器の坏蓋と坏身である。須恵器はⅣ区に集中しており、多くは床土下の包含層より出土している。坏身のうちもっとも古い特徴を持つのは246で、口径11.4cmを測る。

歴史時代

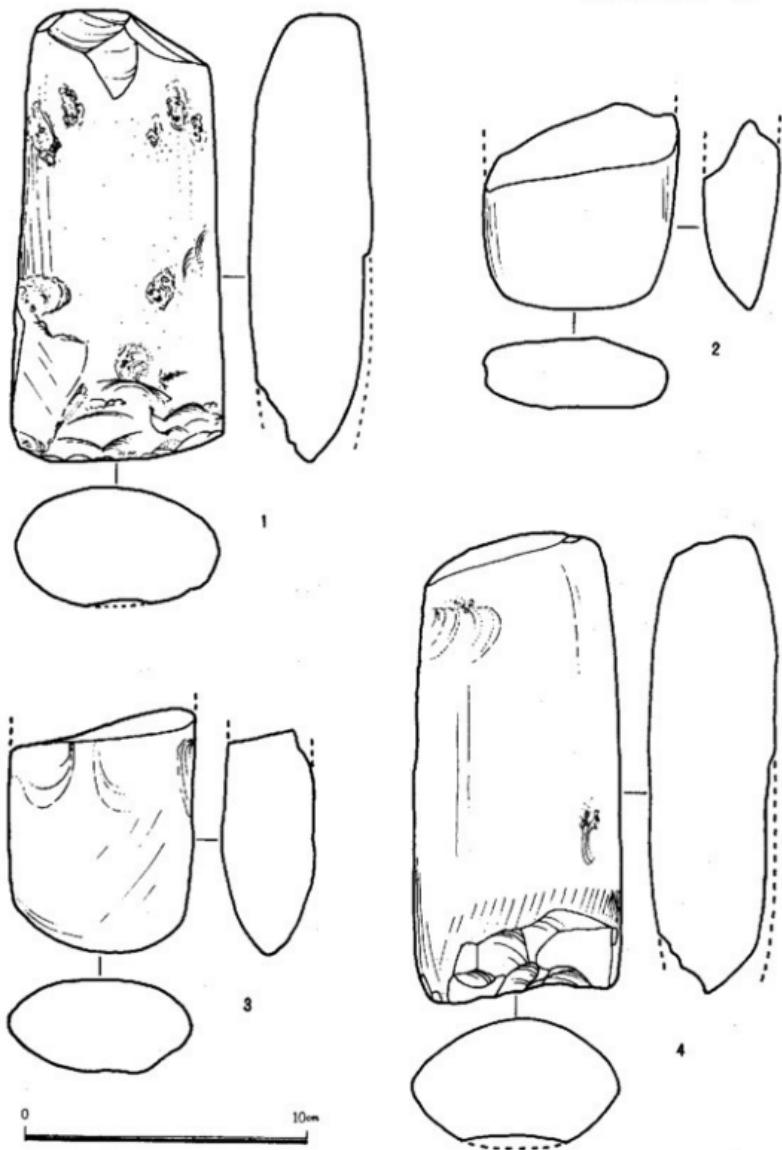
高台付坏 261～263は須恵器の高台付坏である。高台は底部端よりやや内側に貼り付けられている。高台断面形には瀧鉢形、方形の二種がある。267, 268は土師器で高台の貼り付け位置は須恵器高台付坏と同じである。高台は背が低く、外に開くものと、直立するものがある。

磁器 269～271は中国製白磁の碗と皿である。270は玉縁の口縁部で、胎土に黒色微粒子を含む。272は鎬葉を陽刻した青磁碗である。釉色は裏裏色で、内面には細かな貫入がある。

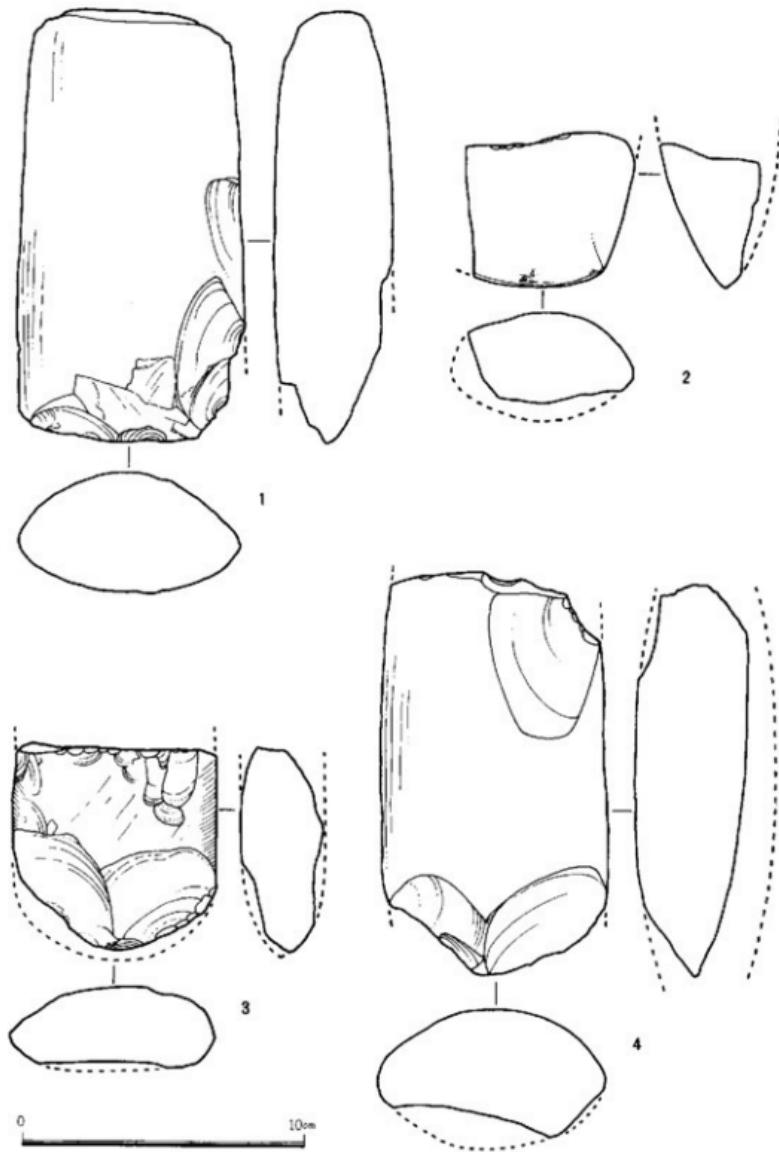
瓦 273・274は皿区包含層より出土した平瓦片である。いずれも斜格子目文があり、叩き板の影りは浅い。273の斜格子は12mm×14mm、274は9mm×14mmである。

赤焼土器

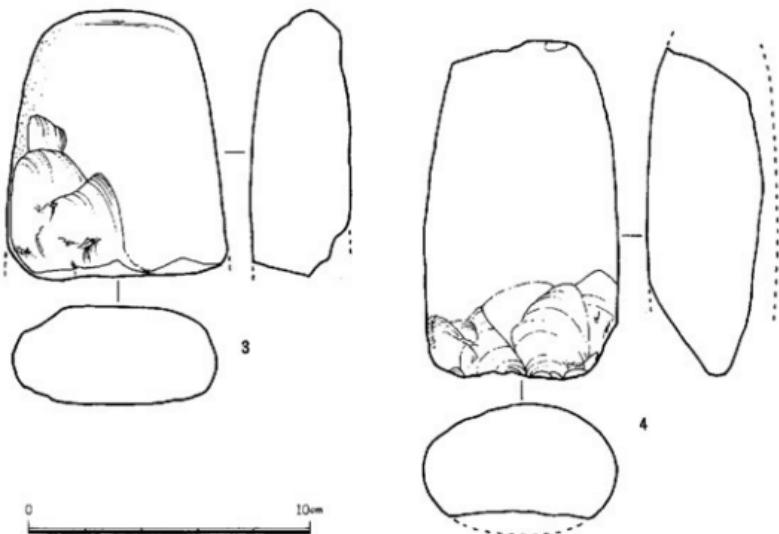
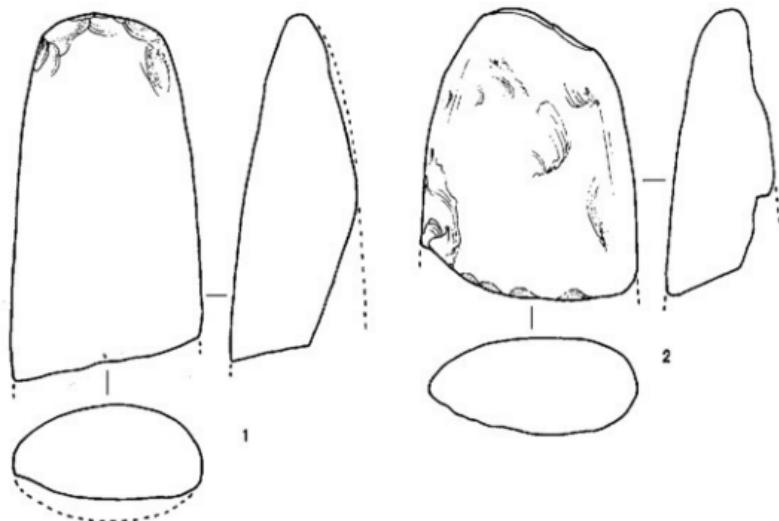
241～245は格子目の叩き痕を持つ土器で、破片総数は16点である。243の底部はⅢ区出土。他のすべてはⅡ区の第1号溝より出土している。出土個体数は、243が底部のみ完形であることから少なくとも2個体以上であるが、図示した5点は色調、細部のつくりなどに違いがあり、5個体以上の可能性がある。底部は上げ底ぎみの平底で、胴部はゆるく外湾しながらのび、胴上部から内傾してく字形の口縁部へと続く。口縁屈曲部内面はナデ上げされ明瞭な稜はない。口縁端は丸く、口縁内面は強く横ナデされ凹状となっている。格子目の大きさは3mm×3mmの方形で部分的に長方形を呈するものがある。底部近くは時計まわりで強く横ナデ(あるいはヘラ削りか)、内面も強く横ナデされて凹状となり段をつくる。胴部内面はナデ調整。胎土は小砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈するものが多く、243は灰茶色である。すべて小破片のため全形を知りえなかったが、242の口径は16cm、245の底径は10cmあり、器高はこれまでの出土例から推定して15cm前後あったものと思われる。



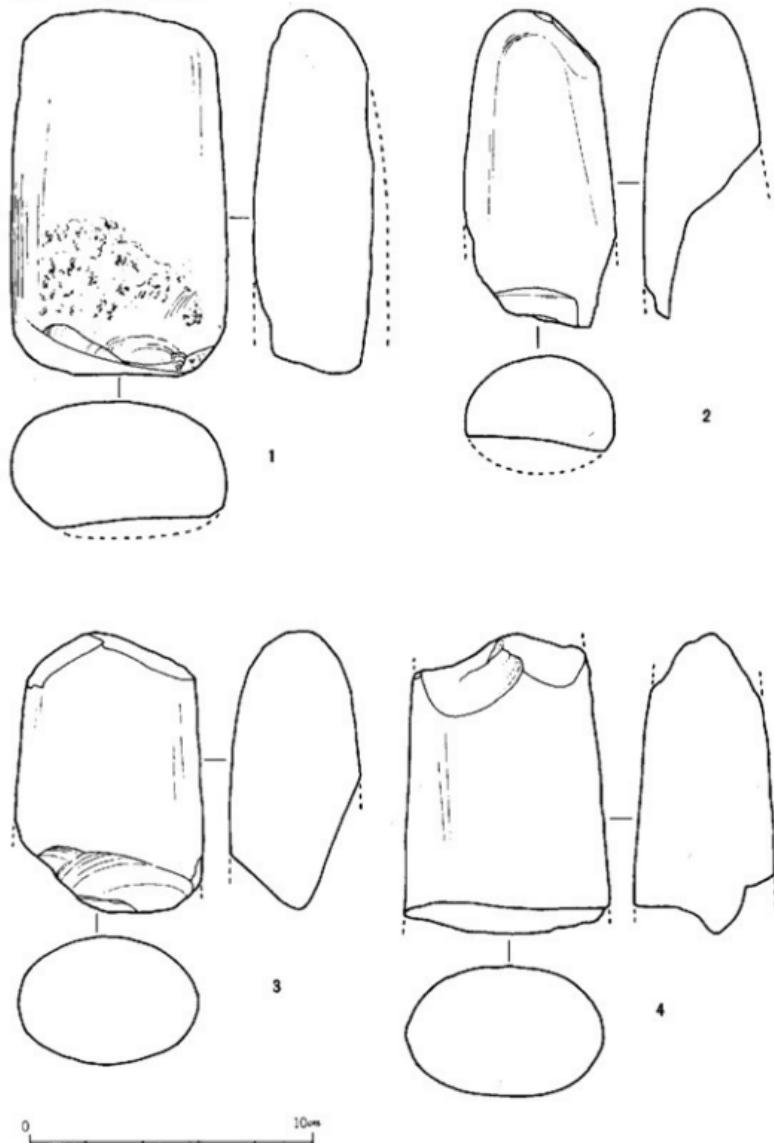
92 原深町遺跡出土石器実測図① (縮尺1/2)



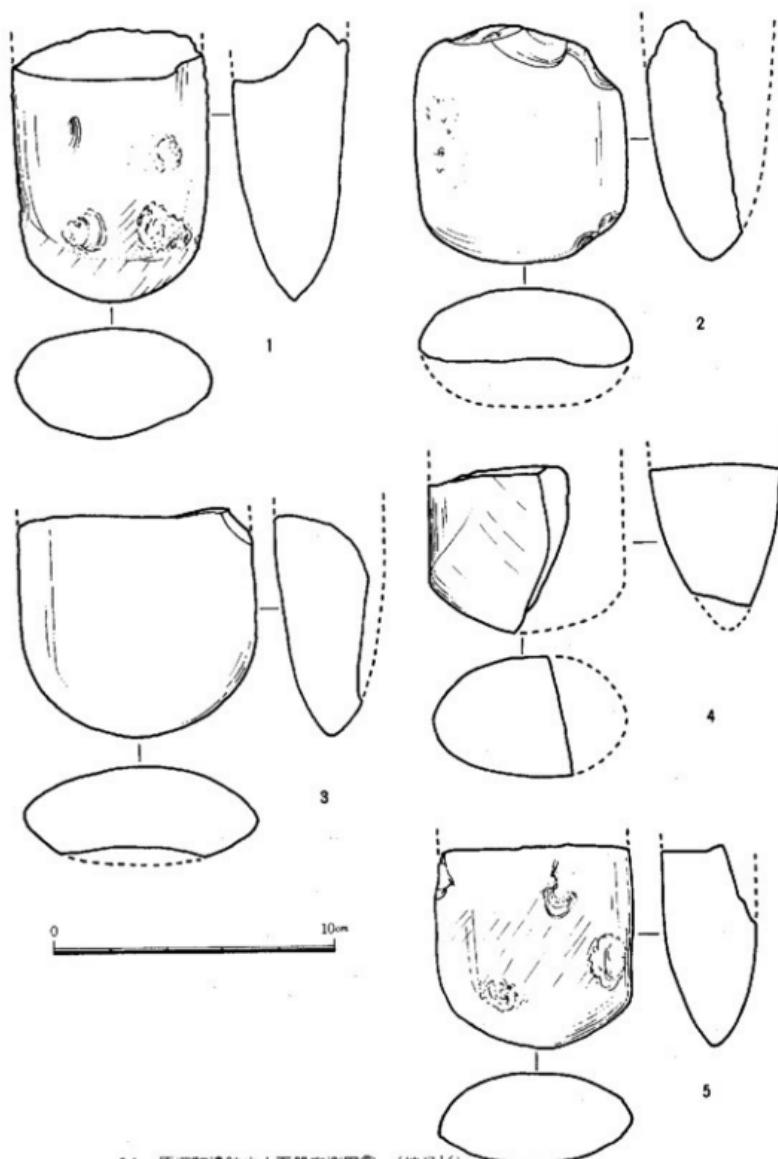
93 原深町遺跡出土石器実測図② (縮尺1/2)



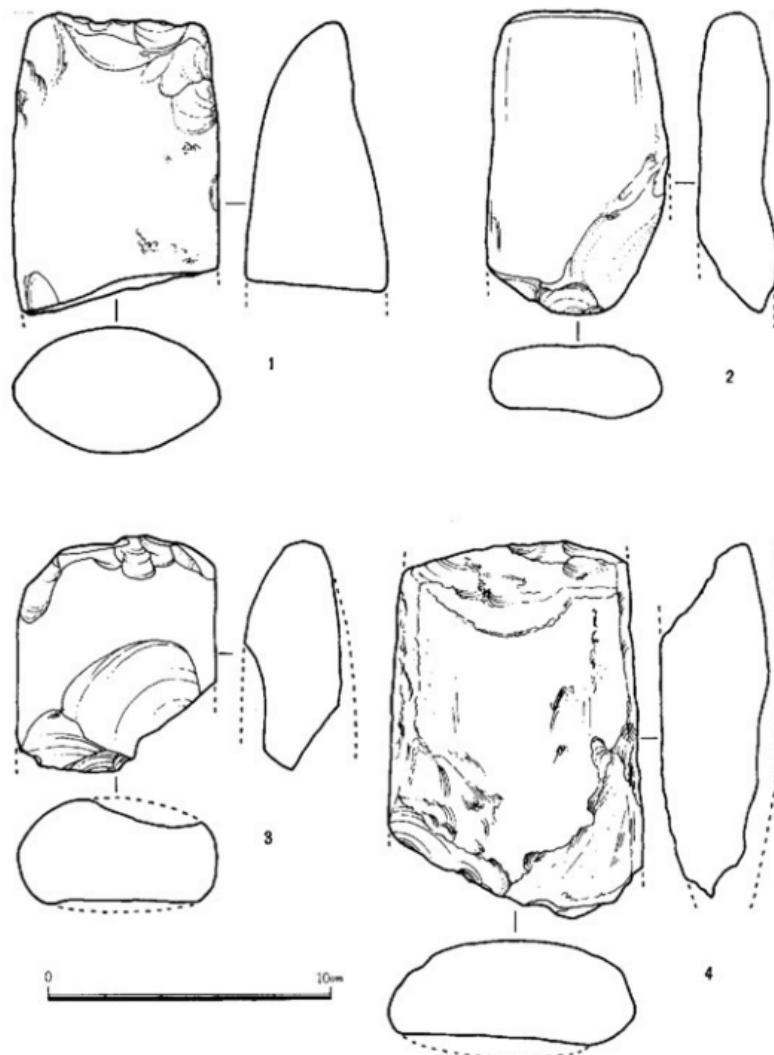
94 原深町遺跡出土石器実測図③ (縮尺1/2)



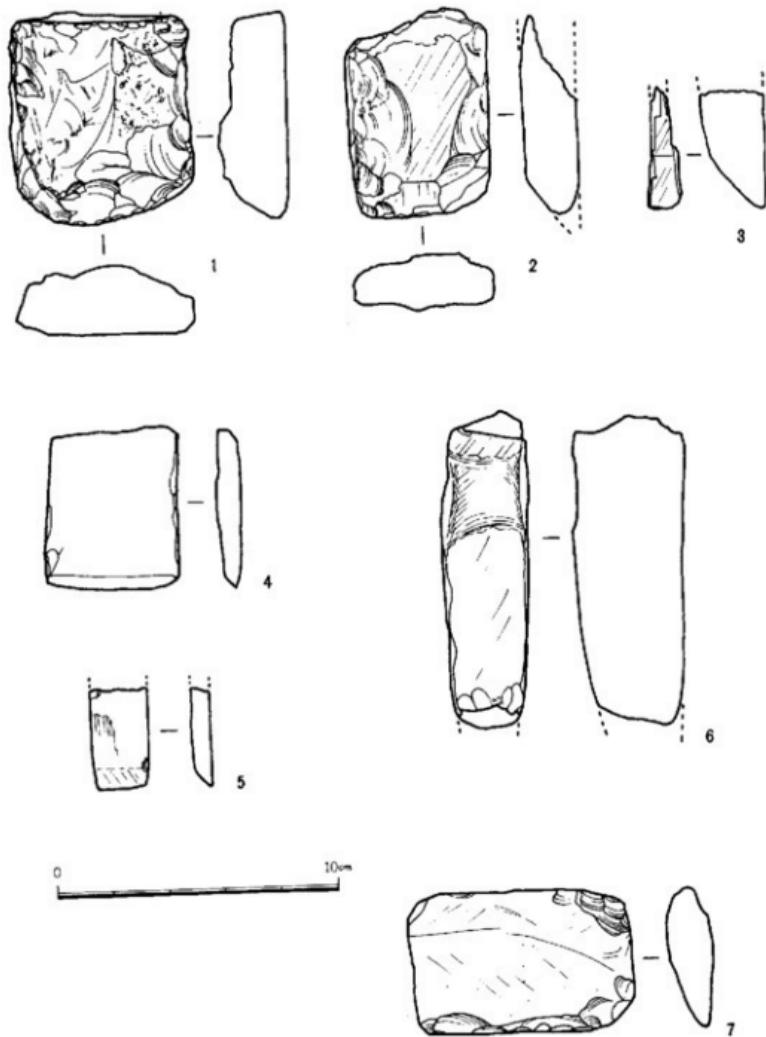
95 原深町遺跡出土石器実測図④ (縮尺1/2)



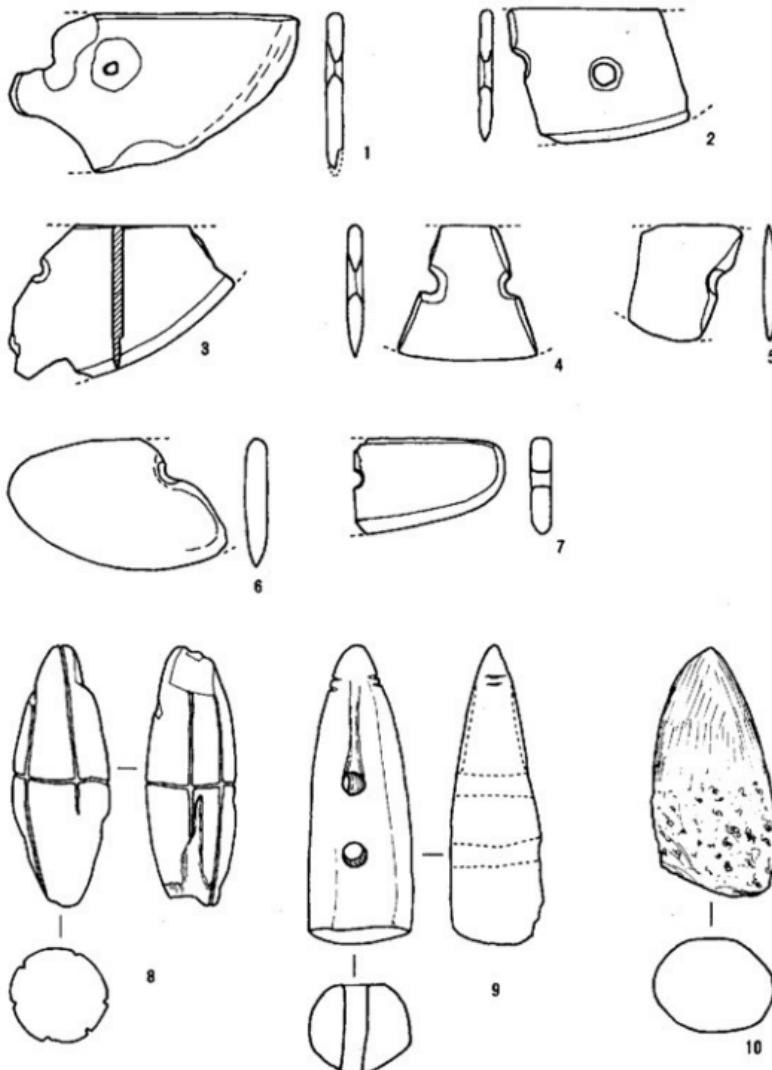
96 原深町遺跡出土石器実測図⑤ (縮尺1/2)



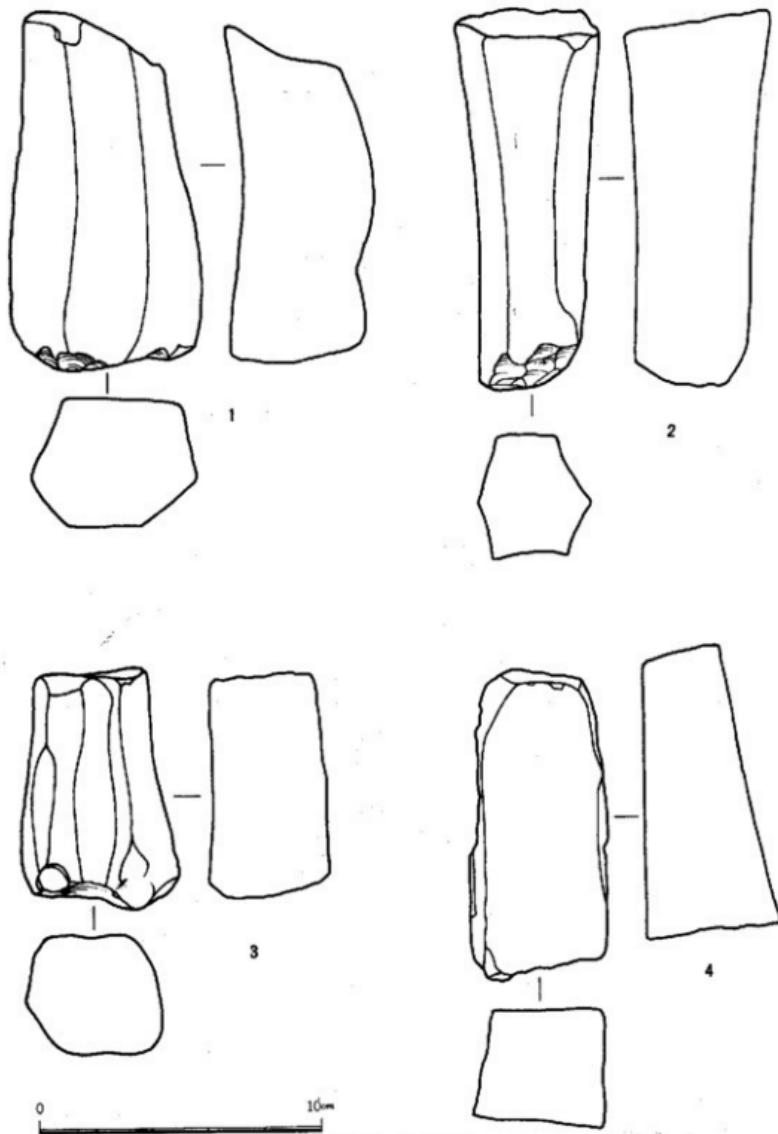
97 原深町遺跡出土石器実測図⑥ (縮尺1%)



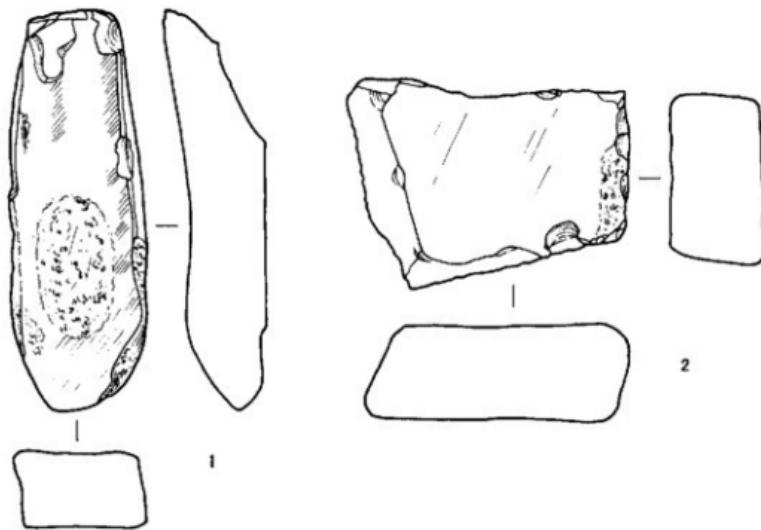
98 原深町遺跡出土石器実測図⑦ (縮尺1/2)



0 10cm

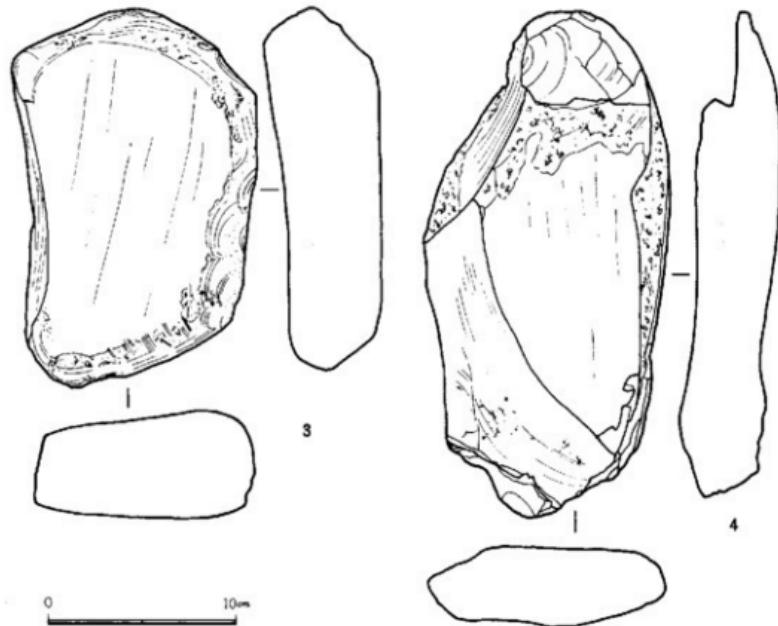
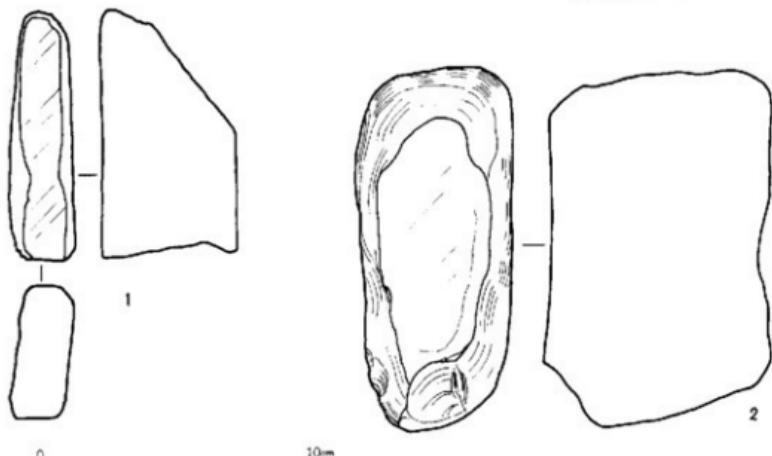


100 原深町遺跡出土石器実測図⑨ (縮尺1/2)

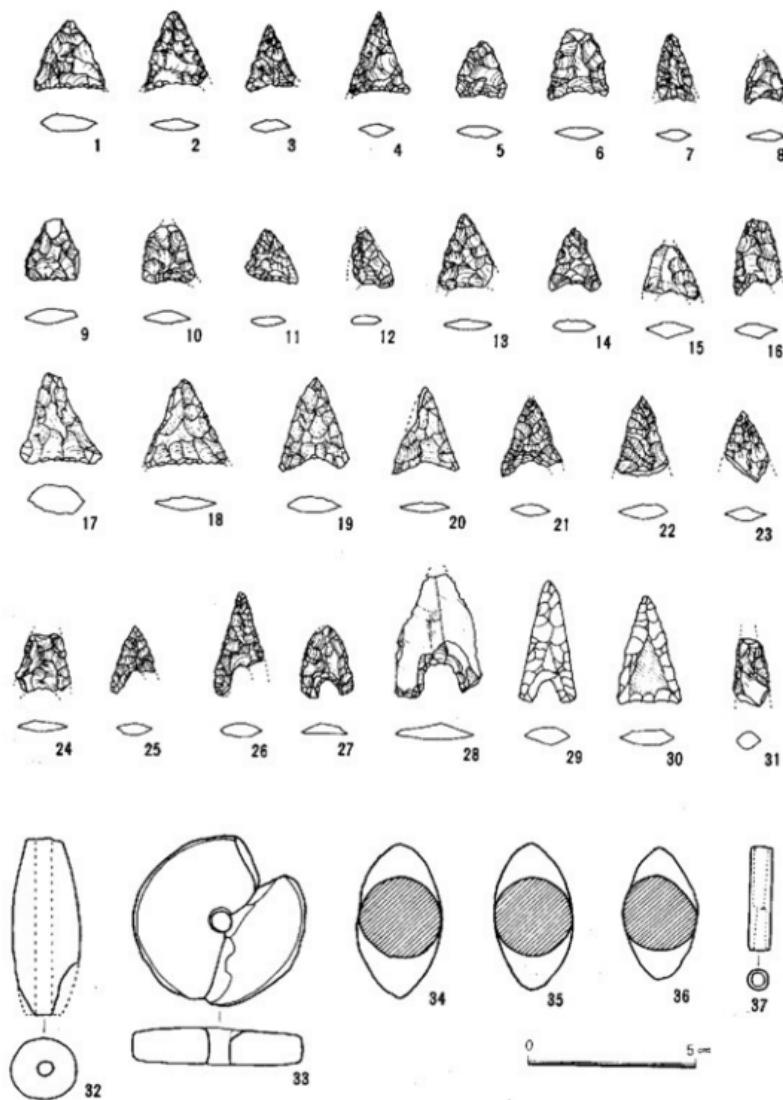


0 10mm

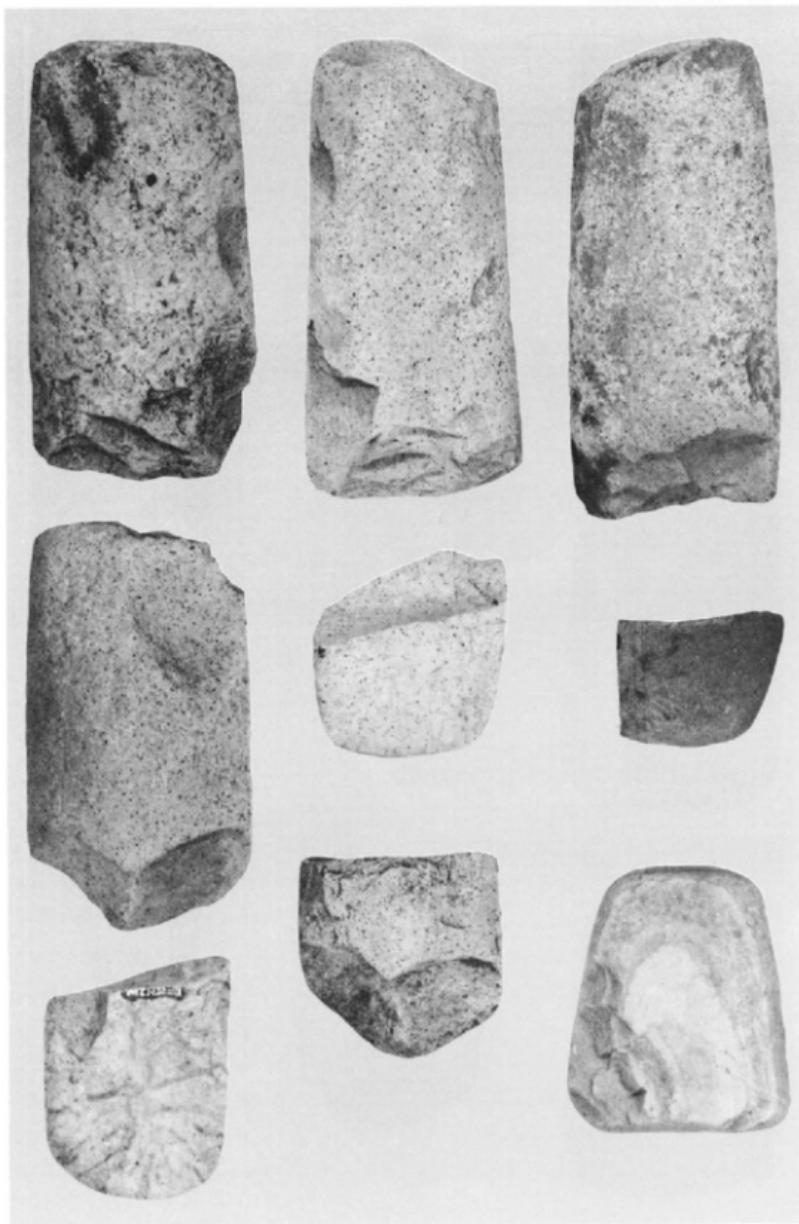
101 原深町遺跡出土石器実測図⑩ (縮尺½)



102 原深町遺跡出土石器実測図① (縮尺×3)



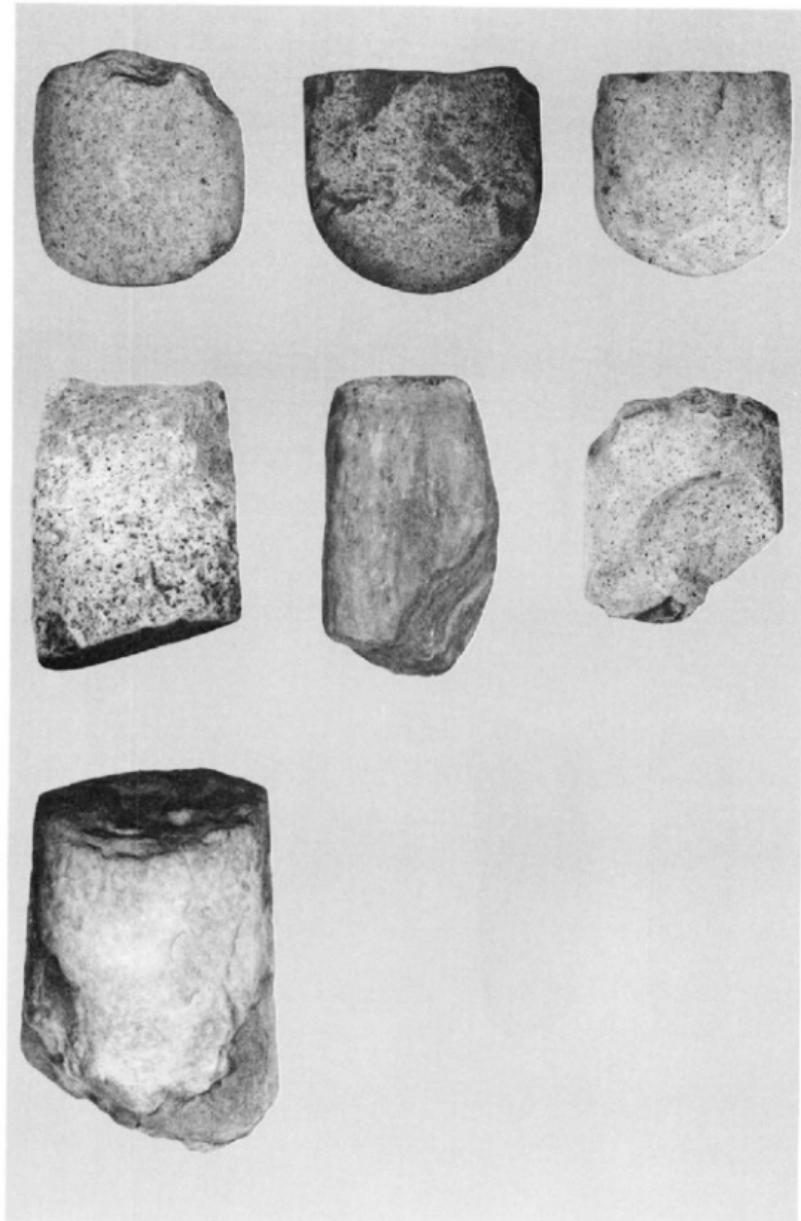
103 原深町遺跡出土石器その他実測図 (縮尺5%)



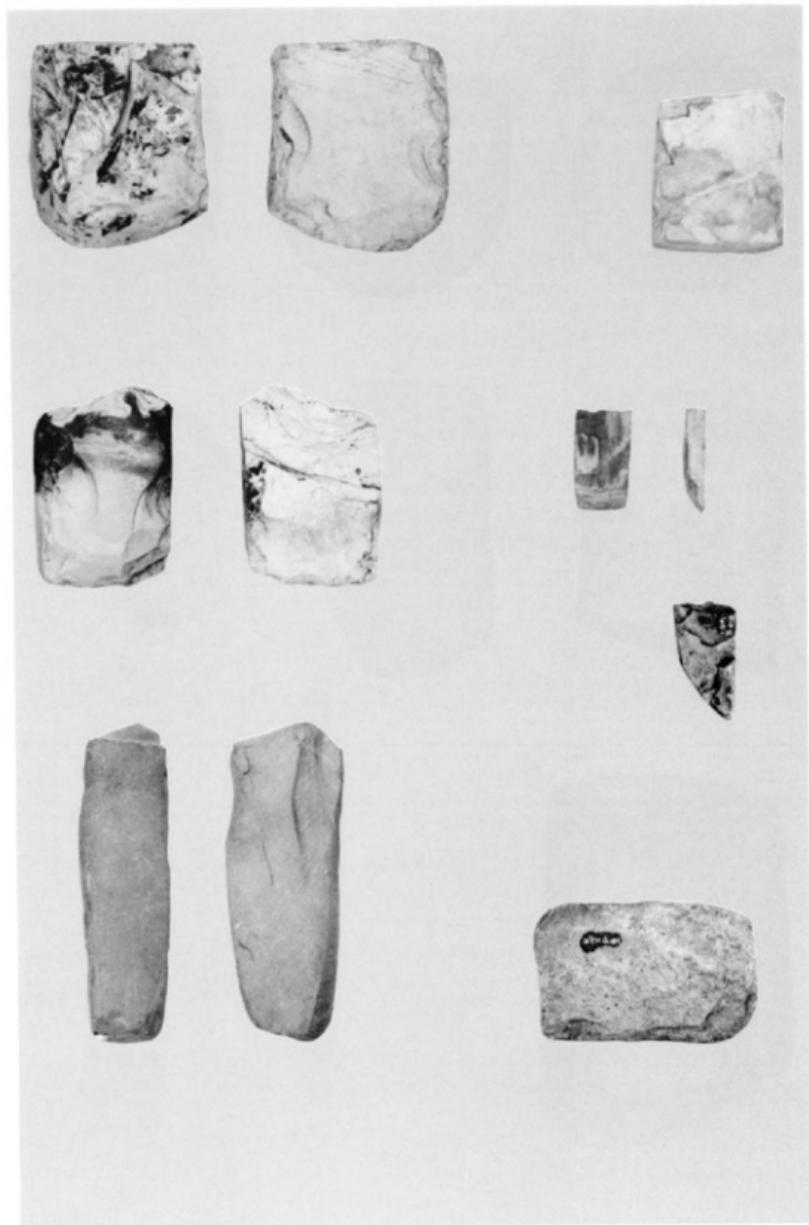
104 原深町遺跡出土石器① (縮尺2)



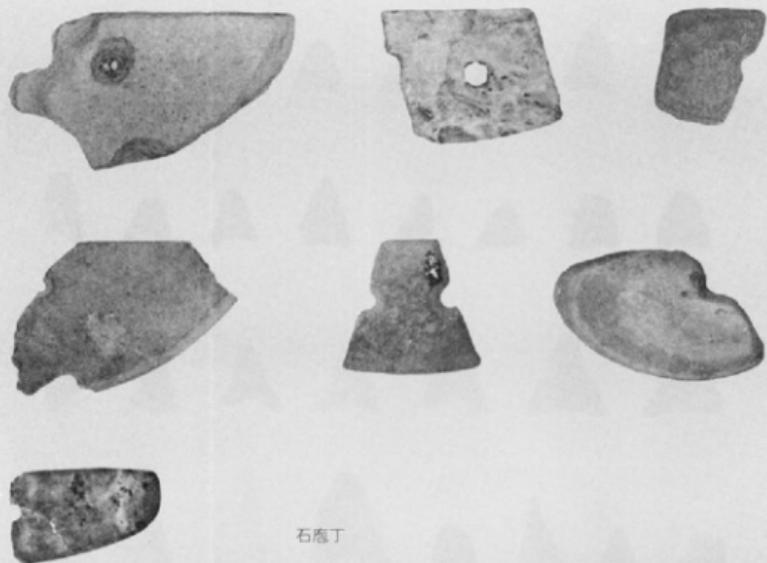
105 原深町遺跡出土石器② (縮尺2分)



106 原深町遺跡出土石器③ (縮尺3分)



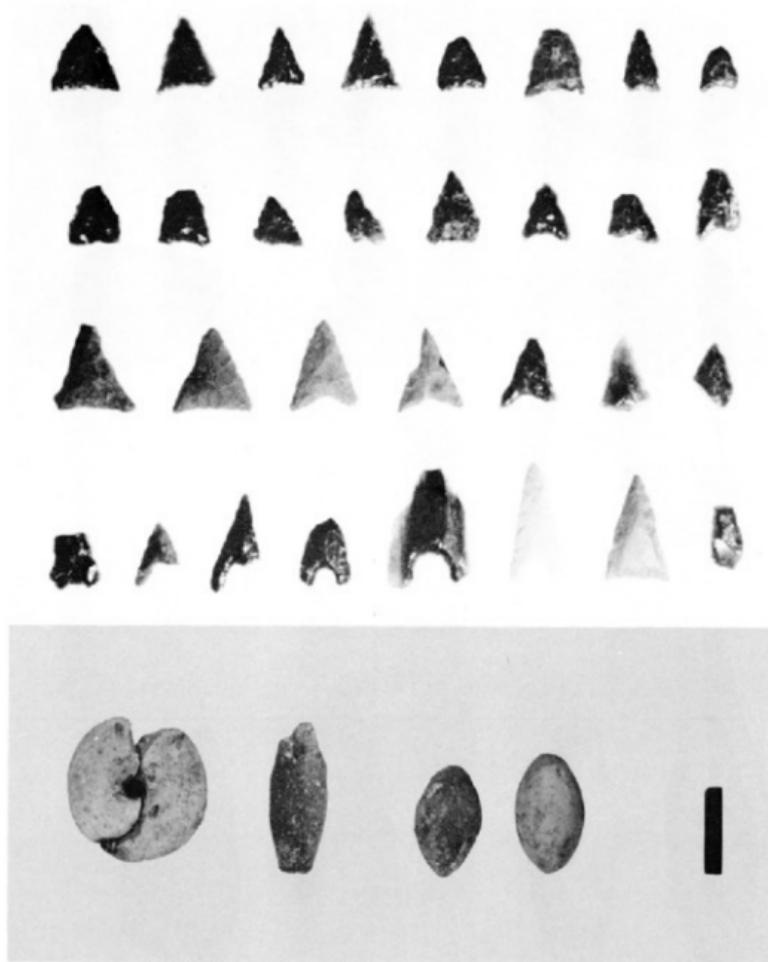
107 原深町遺跡出土石器④ (縮尺1/2)



石削丁



石鍤



109 原深町遺跡出土石器 その他 ⑥



110 原深町遺跡出土石器⑦ (縮尺1/2)

2. 石器、その他

原深町遺跡では、各区の溝中あるいは微高地上から各種の石器、石製品および土製品等が出土している。ここでは、これらの出土遺物を種別に記述したいと思う。

石 器

大型蛤刃石斧（挿図92～97） II区からIV区にわたる広範囲の溝中あるいは微高地上から出土する。挿図92-2, 94-3, 4, 95-1, 97-2, 4は砂岩製、他はすべて玄武岩製である。III区1号溝の南部溝中からは5個（挿図95-1, 3, 96-1, 97-1, 4）出土する。V区からVI区にかけての大溝からは5個（挿図92-4, 93-2, 3, 95-4, 96-3）の出土を見る。使用のため刃先から7cm前後で折れたものや、基部から6～9cm内外で折れたものがある。刃先を欠失したものの中には、裏面を先端からの1回の打撃で剥離し、表面に数回の調整剥離を加え、刃先の研磨を行わないまで使用したものもあり、また、基部が傾斜したものがある（挿図92-1, 93-1）。完形品は1個もないが、長さ15cm前後の比較的小型のものと、25cm前後の長大なものの2種類があったようである。

扁平片刃石斧（挿図98-1～5） 1はIII区出土の頁岩製で、裏面は平坦、表は荒い調整剥離を施しただけの未成品。2はIII区の1号溝出土の頁岩製で、火を受けた跡があり刃部と左右側面および上部裏面が破損する。4はIII区出土の珪質板岩製の逸品。いずれも幅の広い鉗状を呈する。5はIII区1号溝西側出土の珪化木製で、基部は欠失しているが小型であろう。3は、III区1号溝東側出土の枯板岩製で刃先の一部を残すのみだが、柱状片刃石斧かもしれない。

柱状片刃抉入石斧（挿図98-6） V区2号溝出土の1点のみ。断面はかまぼこ状で刃先と基部は欠失するが、浅い抉入が認められる。頁岩製。

石庖丁（挿図99-1～7） 溝中および微高地上から7個出土。いずれも孔の部分で破損した破片である。背が直線で刃が大きく外湾する。1はVI区の大溝から出土。2はIII区の1号溝西側の微高地上から出土。3はI区の微高地上のピットから出土。4はV区2号溝から出土。5・6は、IV区の2号溝と5号溝との中间位置から出土。7はIII区1号溝西からの出土で幅は狭く、片刃である。材質は3だけが砂岩で、他は頁岩質砂岩である。

石 鐸（挿図103-1～30） I区からVI区の全域から出土する。下のように分類できる。抉りがきわめて浅くほほ直線の基部をもつもので、この中には刃部が直線で細長いもの（安山岩製で中央部だけ磨いた1例を含む）と、刃部が外反して丸みのあるものとがある（1～7, 9～11, 17, 18, 30）。抉りがやや深いものは、8, 12～16, 19～21, 24。抉りがU字形で深いものには、細長いもの、短いもの、丸みのあるもの、尖鋭なもの等各種見られる。未製品も1点ある（25～29）。他に基部を欠くもの、22, 23がある。また、遺跡全域から、数千点におよぶ

おびただしい黒曜石の細片が出土した。まったく不規則な割れ方で石錐の材料とは考えられず、石核調整破片とも思えない。石錐の大半は黒曜石製である。

石 製 品

管 玉（挿図 103-37） 土器や木器が最もまとまって出土したV区の人溝左岸近くの砂層から1点だけ出土。長さ3.15cm、径0.6cm、孔は径0.3~0.4cmで両側から穿孔。碧玉製。

石 錘（挿図99-8・9・10） 有溝石錘2個と未製品1個の計3個出土。8は両端が尖り、断面は円形を呈する。長軸方向には等間隔で6条の溝があり、それと直交する溝が1条短軸をめぐる。V区2号溝西側の微高地から出土し、滑石製で重量120gである。9はV区2号溝出土。竹の子形で断面は円形を呈する。中央に孔があり、この孔から頭部を通る幅広い溝が、さらにそれと直交するように頭部先端から約1cm下に2条の細い溝が掘られている。また中央の孔と器の下端との中间にも孔がある。滑石製で重量170gである。10は9と形は似るが、上半分を磨いただけの未製品である。砂岩製で重量168g。IV区3号溝東側から出土。

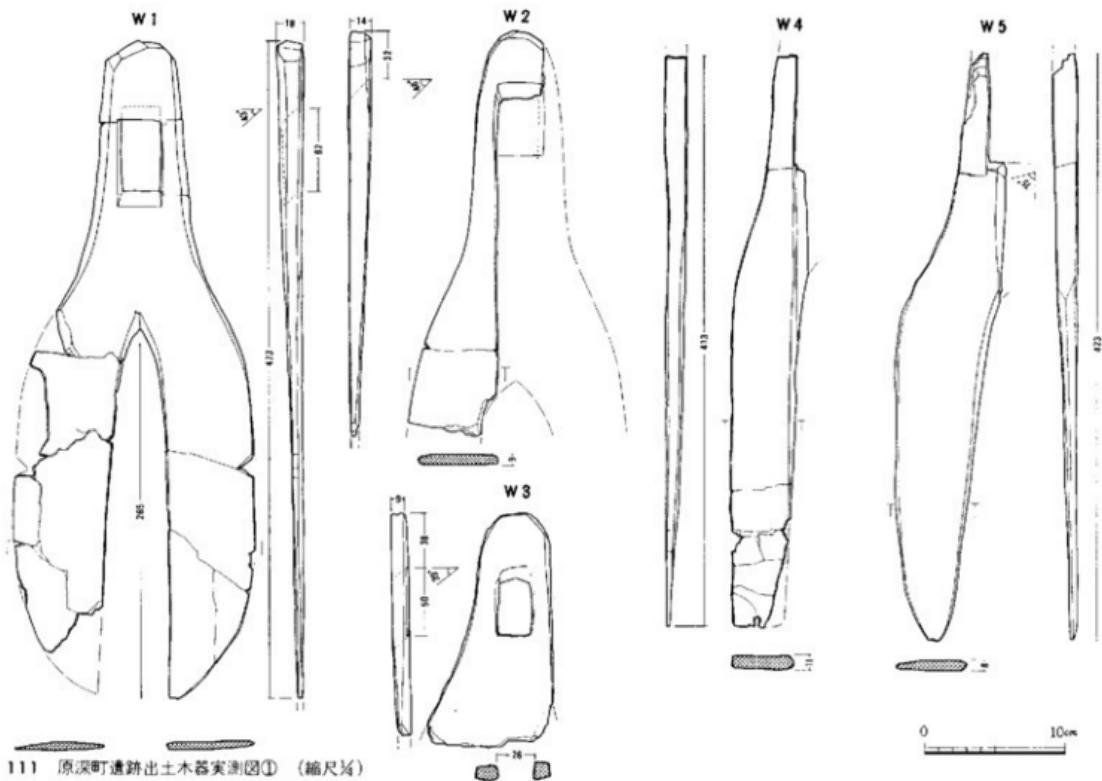
砾 石（挿図 100～102） 大小各種ある。荒砾、中砾、仕上砾に分けられる。また、器形の大小は置砾と堤砾の違いであろう。用途は石器や金属器等の研磨が考えられるが、その判断は困難。挿図 100-2はIII区1号溝出土。花崗岩製で6面を使用し、断面が六角形を呈す。砾石面の中央部はややくぼむ。3も花崗岩製でIII区から出土。挿図 102-1はV区2号溝出土。長さ8.7cm、幅1.8cmで、断面長方形の上面のみを使用。砂岩製。2は砂岩製で長さ18cm、幅8cm、断面長方形で上面のみを使用。砾石面の長さ12.4cm、幅5.6cmで中央部がくぼむ。IV区5号溝西から出土。以上が荒砾である。荒砾よりきめが細かく中砾と思われるものがある。挿図 100-4は細粒砂岩製で長さ10.5cm、幅4.5cm、断面方形で、V区2号溝出土。挿図 101-2は砂岩製でIV区5号溝東出土。挿図 102-3はIII区1号溝出土。硬砂岩製の大型で、砾石面の長さ15.8cm、幅9cm、断面は長方形で裏面と左側面も使用している。これらよりさらにきめ細かく滑らかな次の2個は、仕上砾であろう。挿図 100-1はVI区2号溝出土で火成岩製。挿図 102-4は頁岩製の大型品で、長さ27cm、幅12.4cmの扁平疊の裏、側面等5個所を使用する。

土 製 品

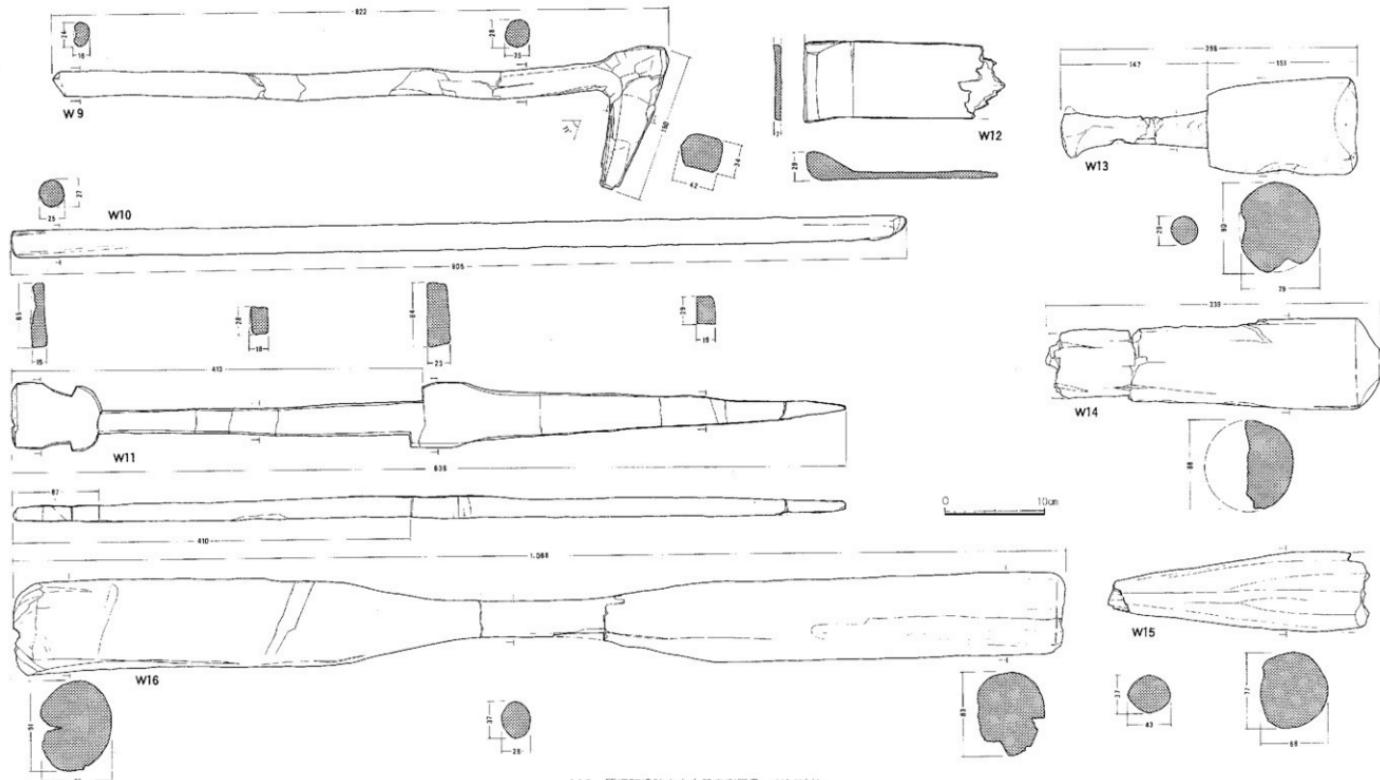
紡錘車（挿図103-33） III区から1個出土。直径5.1cm、厚さ中央部で1.1cm、外側0.9cm、孔の直径0.6cm。一部欠失するが現存重量30g。

投弾形土製品（挿図 103-34・35・36） 3個出土。34はIV区5号溝西側出土で長さ4.6cm、幅2.5cm、重量20g強。35はI区1号溝出土。長さ4.4cm、幅2.3cm、重量20g強。36はIV区5号溝西側出土、長さ4cm、幅2.2cm、10g強。いずれも両端の尖るラグビーボール状である。

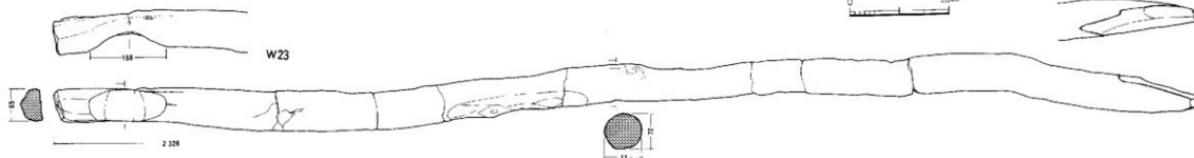
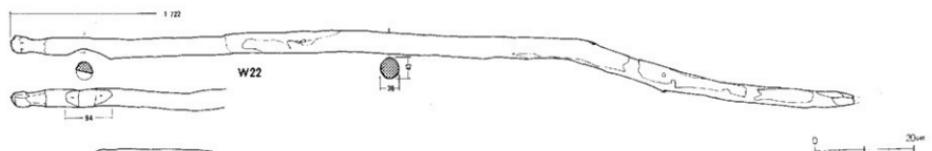
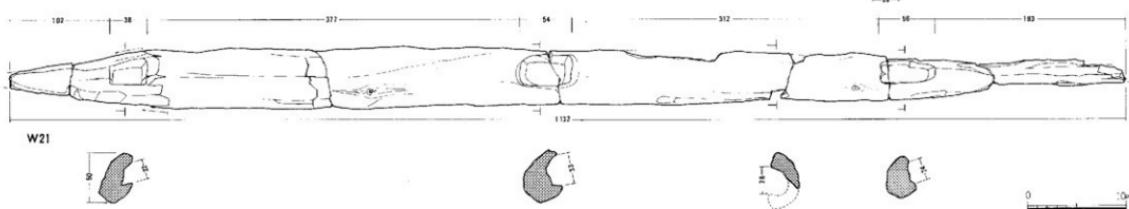
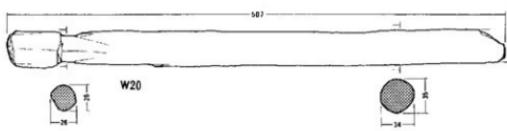
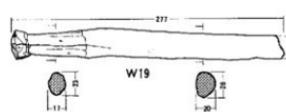
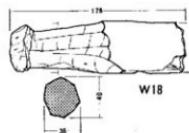
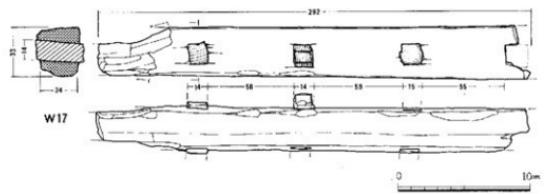
土 鍤（挿図 103-32） III区1号溝出土の1点のみ。管状で長さ5.3cm、径は中央部2cm、両端が1.1cm、孔の直径0.5cm、一部欠失するが現存重量20g弱である。



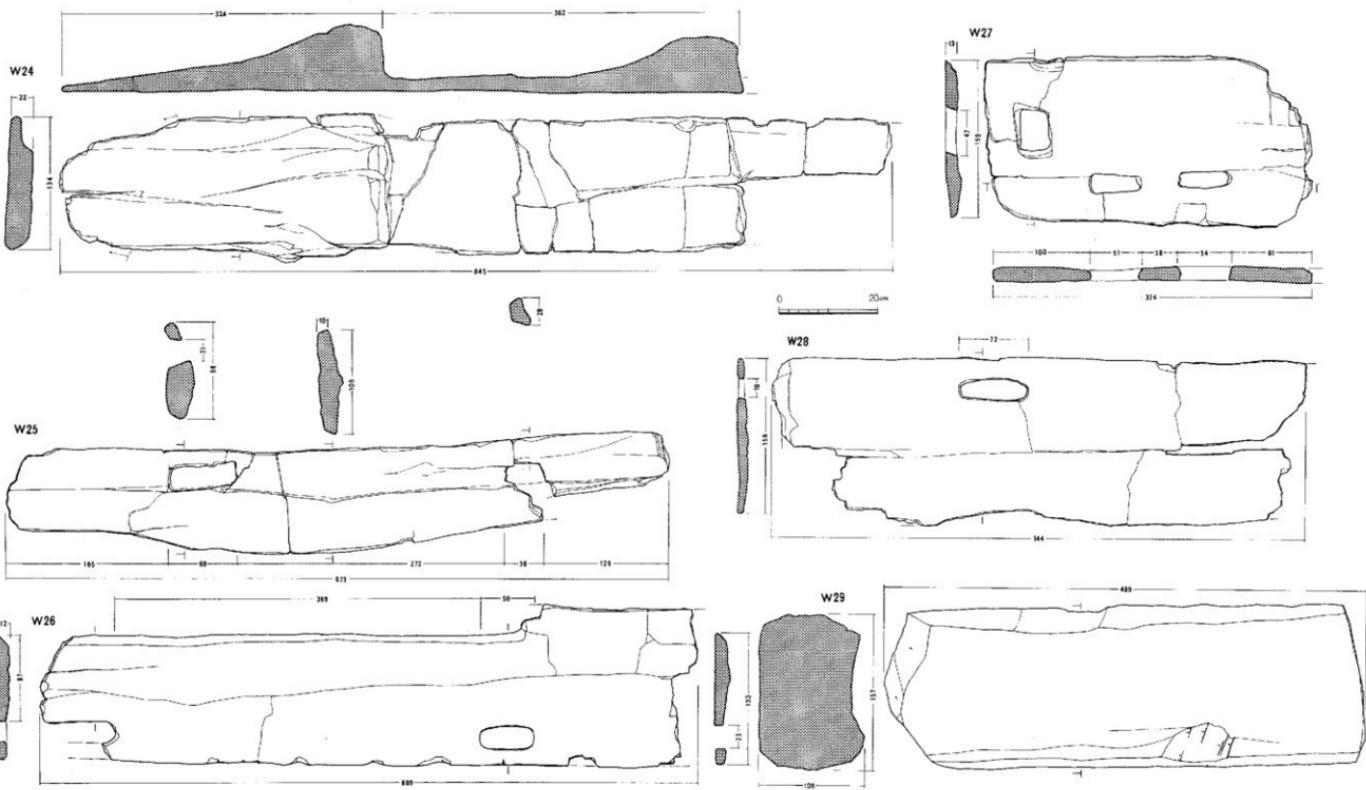
111 原渓町遺跡出土木器実測図① (縮尺3%)



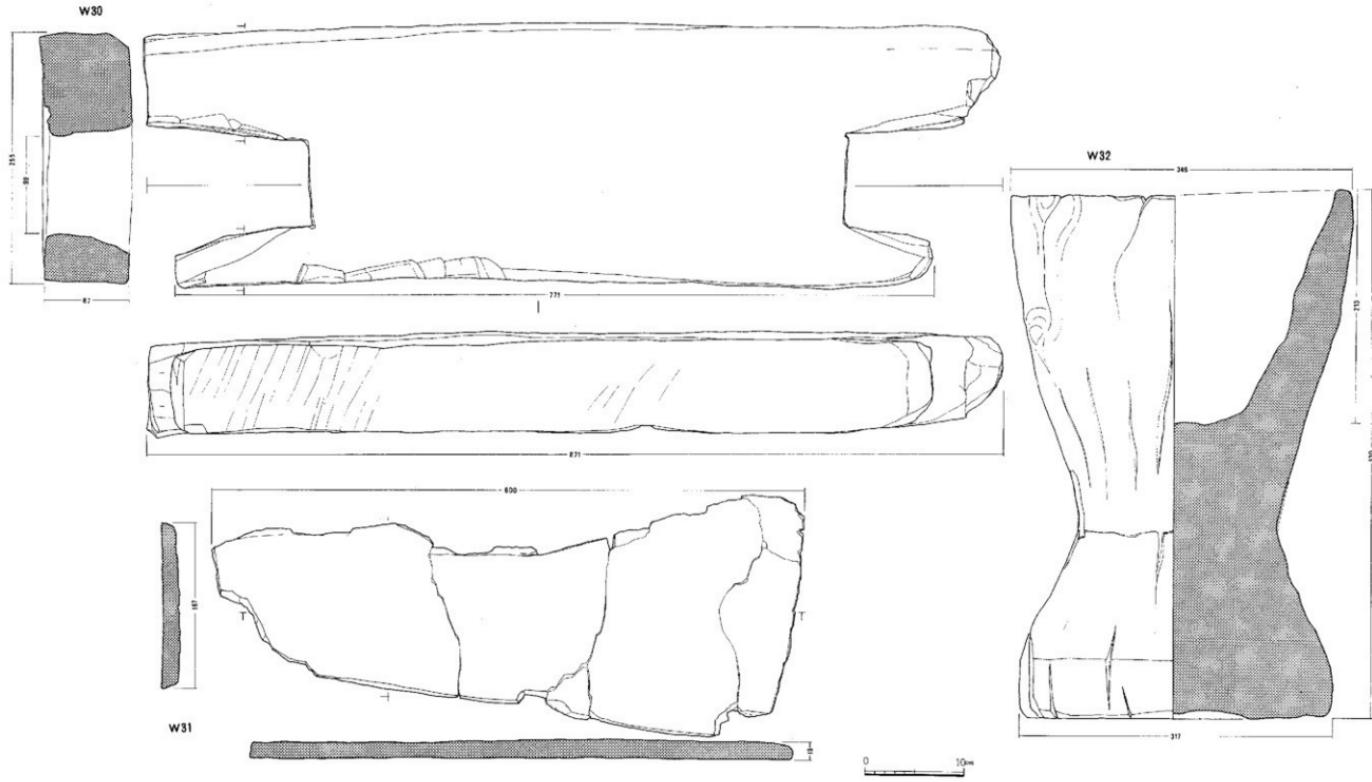
112 原深町遺跡出土木器実測図② (縮尺1/4)



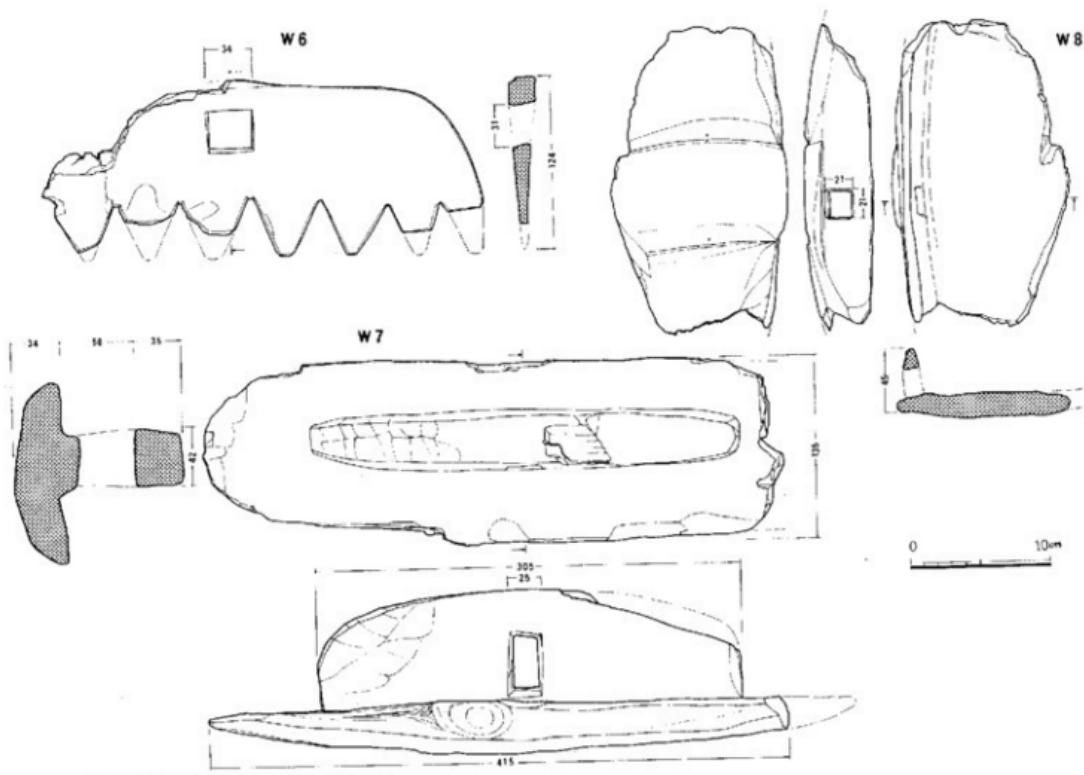
113 原深町遺跡出土木器実測図③ (縮尺1/5, 1/4, 1/6)



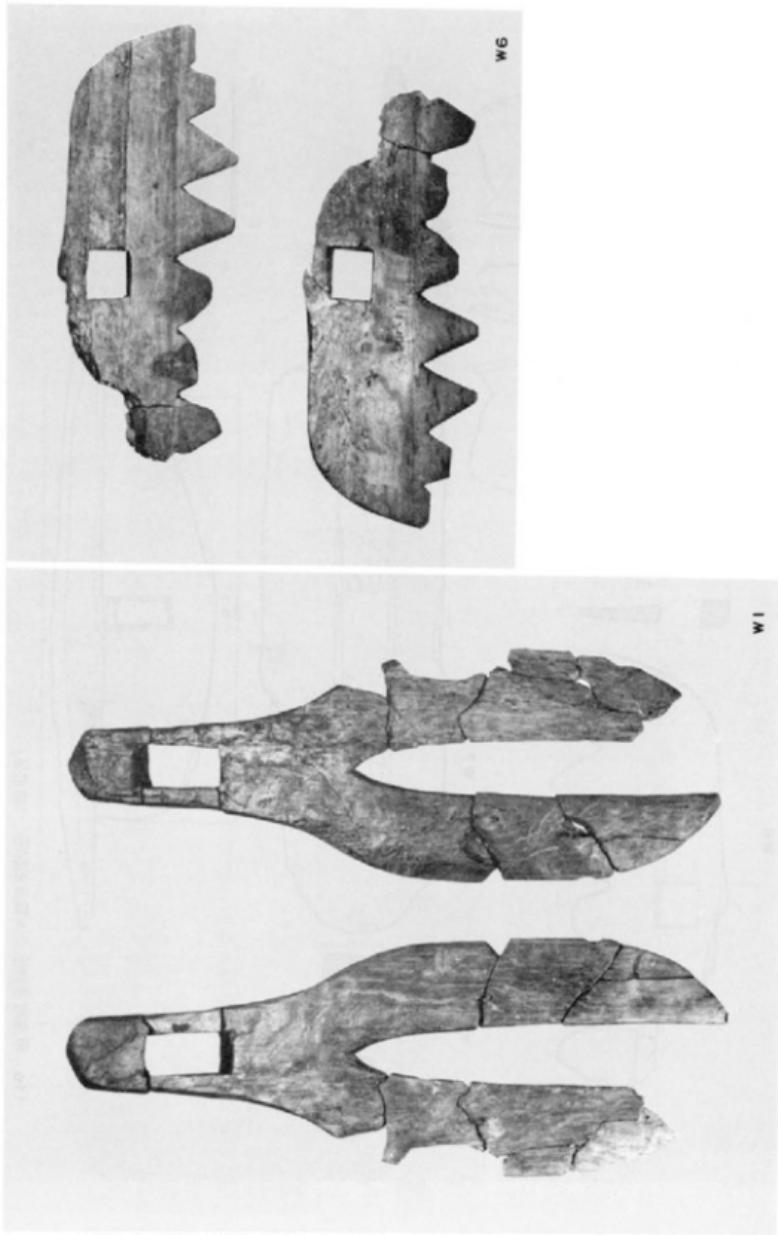
114 原深町遺跡出土木器実測図④ (縮尺1/4)



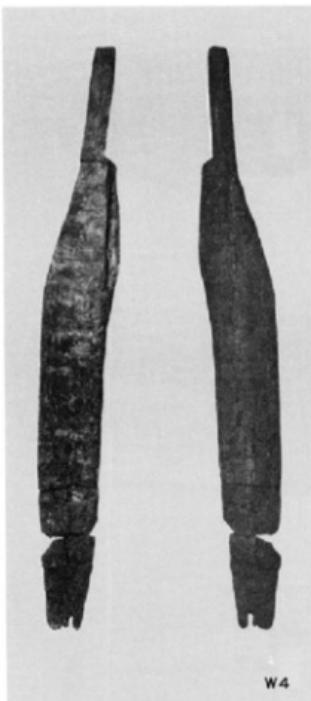
115 原深町遺跡出土木器実測図⑤ (縮尺1/4)



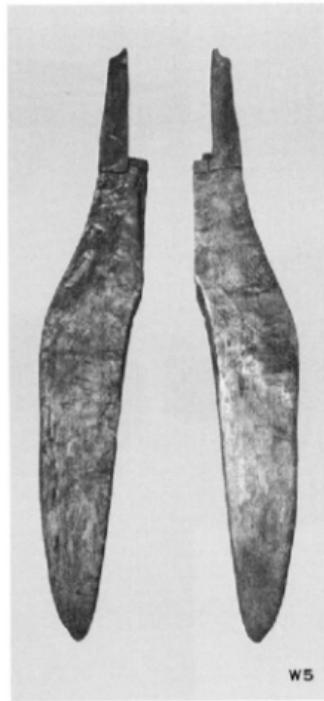
116 原深町遺跡出土木器実測図⑤ (縮尺1/4)



117 原深町遺跡出土木器① (縮尺3分)



W4



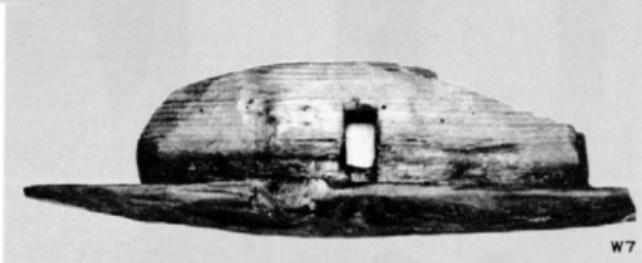
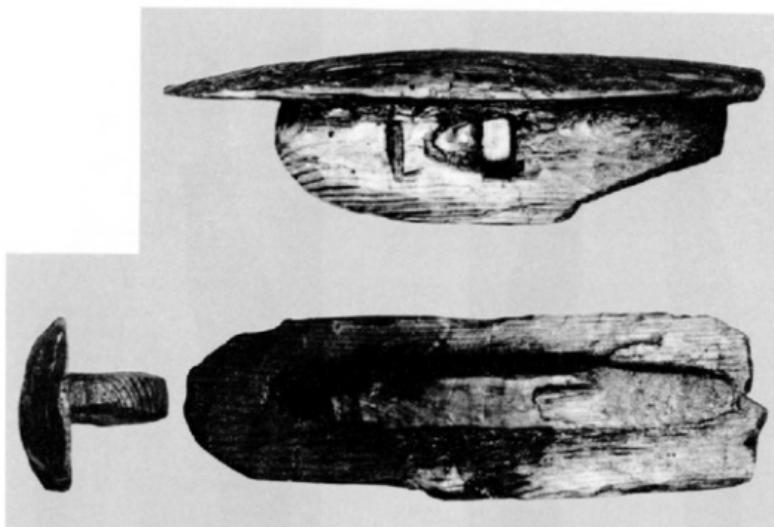
W5



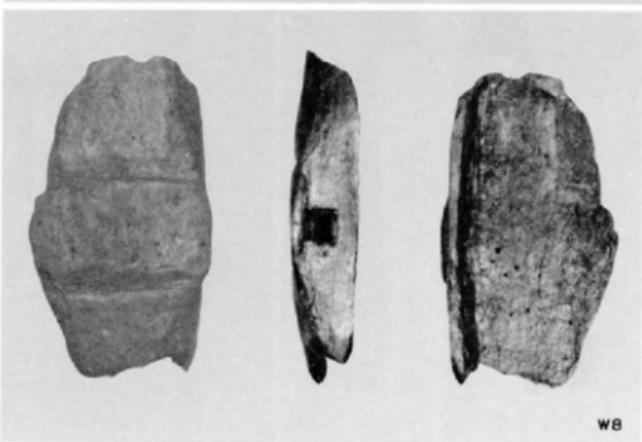
W2



W3

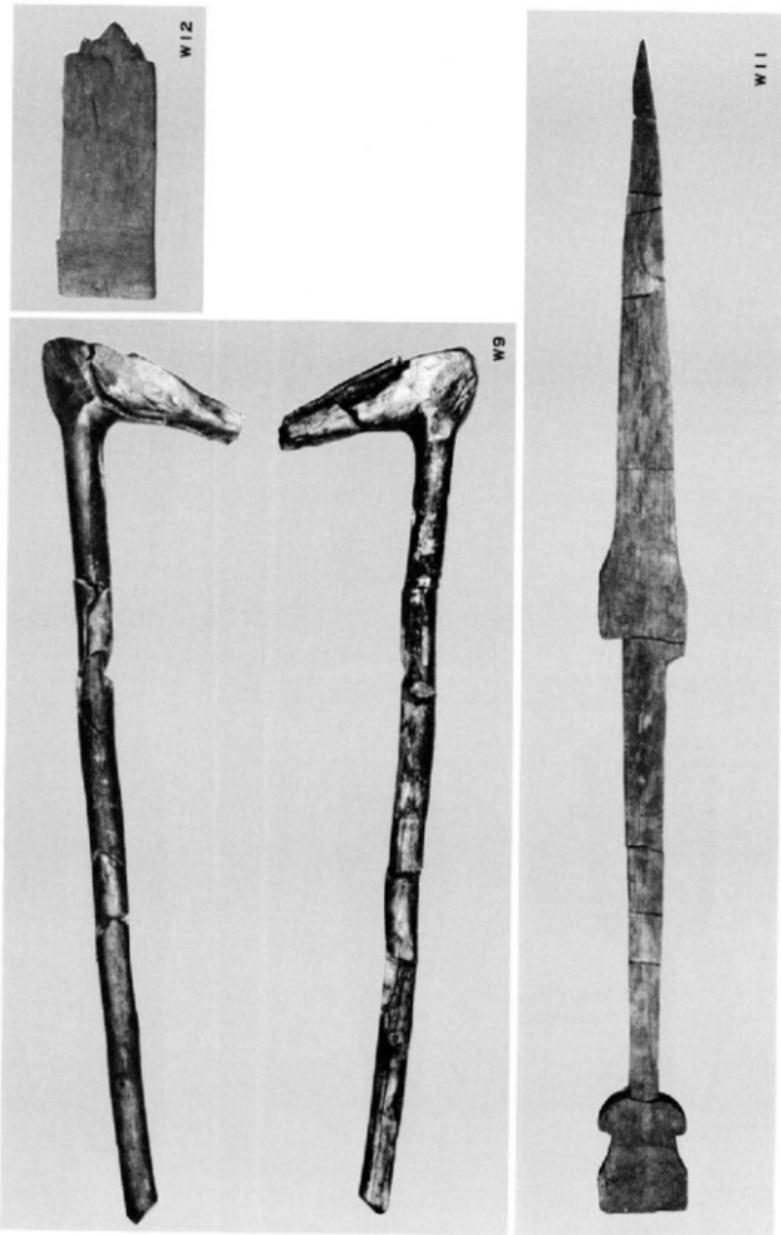


w7



w8

119 原深町遺跡出土木器③ (縮尺1/2)



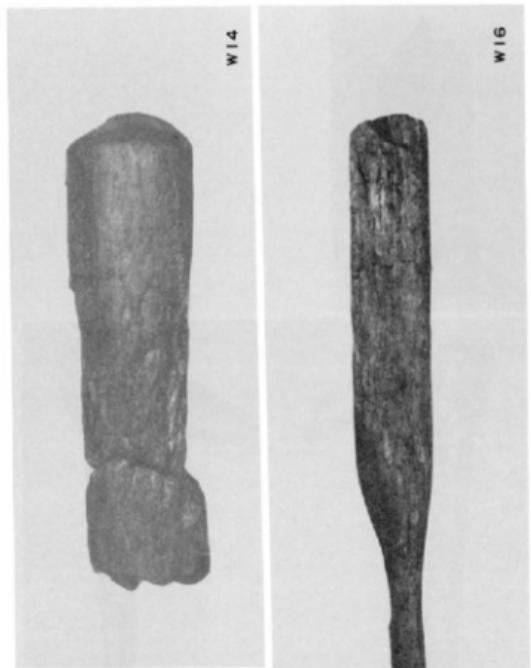
120 原深町遺跡出土木器④（縮尺 $\frac{1}{6}$, $\frac{1}{6}$ ）



W13



W15



W14



W16

1121 原深81遺跡出土木器⑤ (縮尺1/6, 1/6)

122 [原深井遺跡出土木器⑤] (縮尺 $\frac{1}{2}$, №)



W24

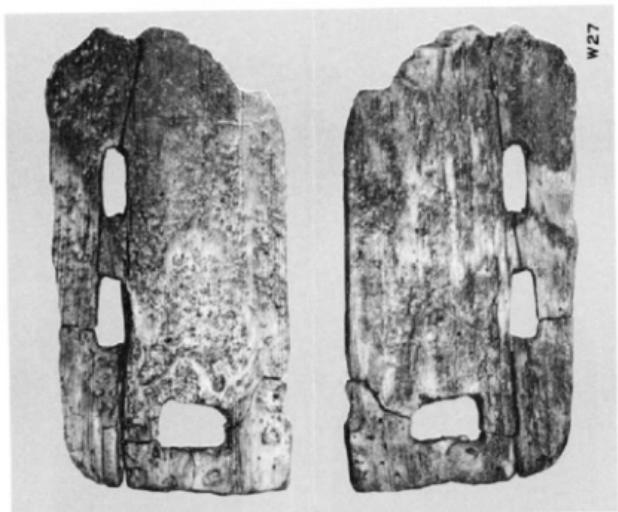


W28



W25

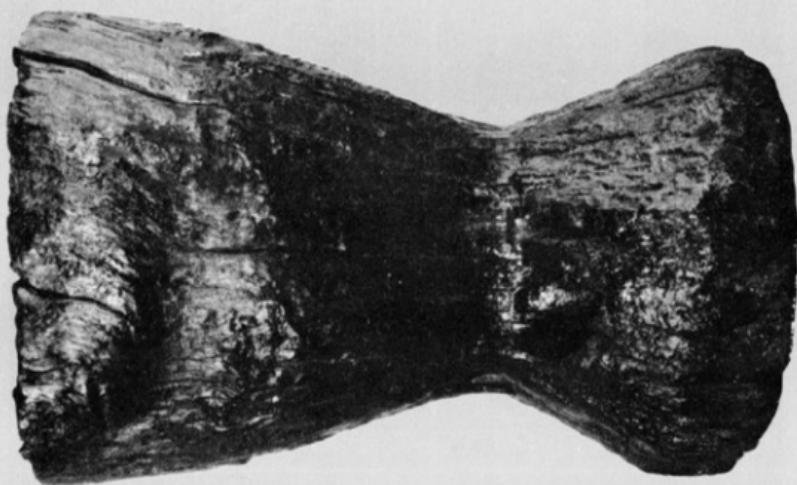
123 原深町遺跡出土木器⑦（縮尺1/2）





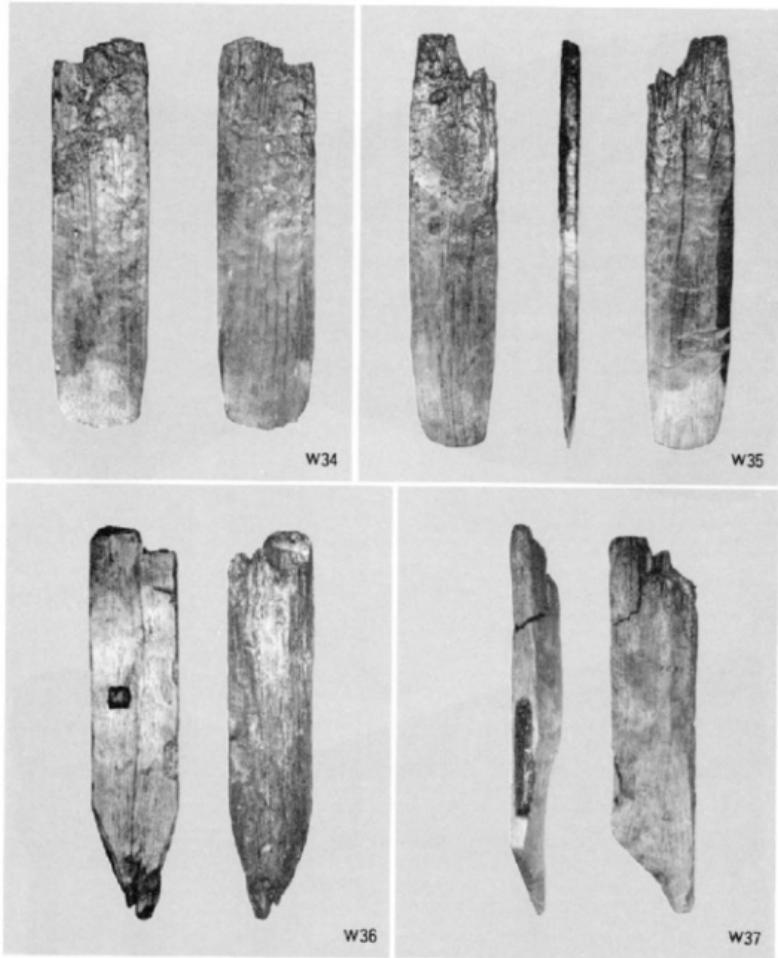
125 原深町遺跡出土木器⑤ (縮尺4)

W32



126 原深町遺跡出土木器⑩ (縮尺1/4)





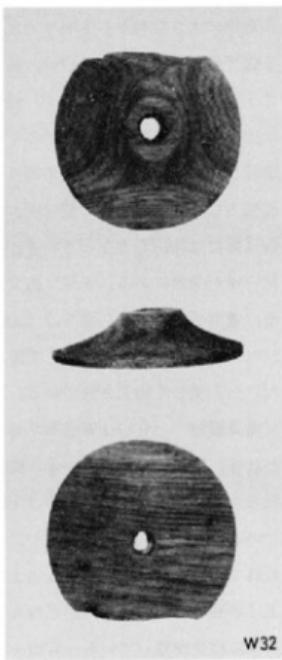
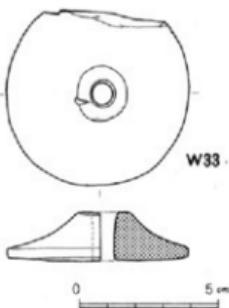
127 原深町遺跡出土木器① (III区第1号溝杭 (縮尺1/2))

3. 木 器

原深町遺跡より出土する木器は、農具、生活用具、建築部材、および杭である。この外に流木や埋構築材などもあるが、今回の報告では加工の認められるもののみにとどめた。また木器の樹種については現在九州大学農学部木材理学研究室に依頼中である。

農 具 農具には鋤と鎌、えぶりりがあげられる。W 1～5は二又鋤でW 1のみが完形品である。W 1は二又鋤で出土時は完形品であったが整理時に一部を粉失した。全長は473mm、刃部長は265mmである。柄つばは長方形となっており、柄との角度は43度である。刃部の中位の外側面には三角形の抉りこみが見られる。W 2は頭部縦 $\frac{1}{2}$ のみであるが内側面の又状部がわずかに残っており二又鋤であることがわかる。W 3は鋤の頭部のみで身を欠いている。柄つばは長方形で腐蝕のためか隅丸となっている。W 1と同じように二又鋤となるであろう。W 4は縦に $\frac{1}{2}$ を欠いている。長方形の柄つばを持つ二又鋤であろう。刃部先端は側面に対し直角をなし、W 1・5とは形態を異にしている。W 5も縦 $\frac{1}{2}$ を欠くが二又鋤でわずかに柄つばを残している。柄との角度は15度を測る。W 6はえぶりりでわずかに歯と身の一部を欠いている。柄つばは36×31mmの長方形で柄はほぼ直角に近い角度で挿入されたものであろう。現在歯の本数は7本が残っており、柄つばに対して左右対称につくられていたとすれば総数は8本で、刀のつくり出しは鈍い。歯の一部に焼けた痕跡が認められる。W 7は発掘時に握り部の一部が損傷したかほぼ完形に近い。握り部は細かく加工されているが底部は粗い削りのままであり、握り部の長方形孔の穿孔も雑である。この孔には指1本しか入れることができない。水を含んでいたためか重く、この重さに意味があるのであろうがきわめて保持しにくい。

生活用具 生活用具には手斧柄、杵、臼、木桶、紡錘車すべて大溝からの出土である。



128 原深町遺跡出土木器⑫(縮尺 $\frac{1}{2}$)

W8は三辺が欠損しており全形を知りえない。断面が「L」字形に削り出されており、板状の底部（？）裏面には「V」字状の溝が2条並行して彫られている。底部から高さ32mmで突出部があり、この中央に21mmの方形孔を穿っている。W9は手斧柄でW16の柄と重なって出土した。木の二又部を利用したもので小枝が柄部となっている。柄部の長さは55cmである。幹にあたる頭部は細かく加工されている。手斧が着装される部分は断面長方形で、角は面取りがおこなわれているが、どの位置まで挿入されたかは明瞭でない。頭部と柄部とのなす角度は71度である。W10は直径約27mmの棒状の木器で、両端の削り切面の外は特別な加工痕は見られない。しかし木取りは芯持ちの丸太材からではなく、板材を削り出している。W11は第4号溝より出土したもので完形品である。全长838mm、約20mmのほぼ均一の厚さとなっている。図左側は頭部に類似した形をなし、両側面には抉りがある。図右側は両側面を削り尖らせている。W12はかなり直径の大きな材から木取りされているが、全形は不明である。横であろうか。W13は小さな木槌で握り部の長さは147mm、直径は29mm、槌部の直径は90mm、長さは151mmを測る。きわめて丁寧な加工が施されており、槌部には使用時の欠損はない。W14～16は柄すべて大溝からの出土である。W14は頭部のみで、直径は88mmである。頭部は垂直に切断されていないがよく磨耗している。W15は中央の握り部近くである。体部には継ぎ加工痕が見られる。柄か木槌か判然としないが、側面に使用痕がないことから柄と考えた。W16は完形品で全长1,068mm、全体に断面は楕円形となっている。握り部には特別な作り出しはない。図左側の体部には斜めの深い傷が無数にある。W32は臼で第2号堰の背面、IV区第1号溝の南東延長部よりの出土である。底部径は317mm、深さは233mmを測る。底部は平底となっており、体部中位のやや下でくびれている。全体的に腐蝕して加工痕は見られない。W33は筋鉤車で直径66mm、高さ17mmで、たいへん美しく加工されている。孔は上面が大きく9×10mmである。

建築部材 W17はVII区第7号溝より出土したもので、図左側は削られており二次加工と思われる。図右端は折れている。断面は33×24mmの長方形で、約70mm間隔で方形の枘穴があり、現在4個を数える。この枘穴は上面に対して垂直に穿たれてはいらず、棟状の角材か挿しこまれている。W18～20は材の一端が乳頭状につくられたものである。W18は大溝の護岸用杭列に使われていた。W19は大溝から出土。W20はIII区第1号溝からの出土である。W18の乳頭部の加工は鋭利で断面形は7角形となっている。W19・20は腐蝕が進んで加工痕は明瞭でない。W18のみに樹皮が残っている。W21～23は第2号堰の構築材に転用されていたもので、W21・22は立杭に、W23は横木に使用されていた。W21は全长1,132mm、図左側は全周を削り尖らせている。欠き込みは同一面に3か所、その裏面に1か所見られる。欠き込みの間隔は377・312mmで、欠き込みは長方形であるが、いずれも材の芯に垂直に彫りこまれていない。また欠き込みの大きさ深さともに規則性がない。W22はW18～20と同じように材の一端に乳頭状のつくりがあるが、

W22はさらに逆台形の欠き込みがある。芯持ちの丸太材を使っており、一部に樹皮を残している。図右端は削りで尖らせ杭として使われていたが、図左側の加工と同時期であるかは明らかにしない。乳頭状の加工をしている方が樹根側である。W23も図左側に欠き込みを持つ材である。W22の直径が43mmであったのに対してW23は直径77mmと大きい芯持ちの丸太材である。図右端は尖らせているが、削りは全周からではなく $\frac{1}{2}$ は樹皮を残している。全長は2,326mmで、小枝は削りおとされている。W24は第2号堰背後の流木より出土したもので、W32の臼とは接近している。図左側は丸く尖らせているが、2つの突起が残っていることから梯子とわかる。現存長は845mm、幅は134mmを測る。突起は一方の壁を垂直にし、他方を斜めに削り出しており、高さは55mmである。2つの突起の間隔は362mmを測る。W25～28は、板材で長方形の枘穴を持つもので、いずれも第2号堰の杭として使用されていた。W25は図の左側が杭先端部で裏面からの斜めに削りおとして尖らせている。杭としては原形をとどめているが建築部材として加工された時の形とは大きく異なるものと思われる。材は均一の厚さではなく両面の加工は顕著でない。木取りはかなり大きな材の周辺部を用いている。W26は図左側が杭先端部となっている。厚さ12mmの板材で、枘穴は2か所に見られ隅丸長方形をなす。枘穴の間隔は369mmである。W27は厚さ13mmの板材で、挿図29のように横木の下には水平の状態で出土したもので図右端は折れているが図左端は原形と思われる。枘穴は3か所にあり、2つは板材の長辺に並行して38mmの間隔で並んでいる。この2つの枘穴は隅丸長方形で、加工は鋭利でない。もう1つの枘穴は短辺側にあり、47×36mmの長方形で、やや斜めに穿たれている。W28は厚さ12mmの板材であるが、両端とも折れている。枘穴は72×25mmの隅丸長方形で1か所のみである。W29は大溝の第2号堰前面より出土した。断面長方形の角材である。図右端はほぼ垂直に切断されているが、図左端は大きな削りでわずかに尖っている。図上面は凹状となっており建築部材とするよりも工作台と考えるべきであろうか。W30は全長871mm、幅255mm、厚さ87mmの「工」字形をした材で、第2号溝前面より出土した(挿図40)。両端の方形に抉りこまれた部分は鋭利な加工痕があり、側面は幅約15mmの細かい斜めの加工痕が見られる。W31は第2号堰の立杭として使用されていた板材である。厚さは約20mmで全体ほぼ均一の厚さをなす。

IV おわりに

原深町遺跡で検出した遺構は第1～7号溝と稻塚川の旧河道と考えた大溝、さらにこれらの溝に構築された2つの堰とビット群である。ビット群は遺物を出土するものもあるが、平面形が不整形で、大きさ、深さなどに統一性がなく、並び方も不規則であることから自然の落ちこみとした。各溝と大溝との関係は、前述したように第2号堰によって大溝の水位をあげて第2、

5号溝に分水するという灌漑用水施設と考えた。この際第2、5号溝の取水口と思われる位置のレベルは下流と想定した溝北端部の溝底レベルよりも低く、このため発掘時には、水が逆流することから大溝への排水溝ではないかと推測していた。特に第5号溝から別れている第6号溝は、北側に16mで終っており排水溝という推測の一根據でもあった。しかし、大溝に構築された第2号堰の存在や、水量を調整したと思われる第2号溝の堰、あるいは土止めされている第3号溝が検出されるに至り、各遺構は灌漑用水施設と考える妥当性を強くした。分水溝の溝底レベルについては、第2号堰の復原、大溝土層図の検討などから第2号堰は分水溝に給水できる水位の5mまで揚水する機能を持っていたと判断した。このような施設は、その目的が用光源（流路）より高位にある耕作地への給水であるからには、部分的に分水溝の溝底レベルが逆になることは、取水口に近ければ近いほど当然考えられることであろう。早良平野では、開発の拡大、増加とともに発掘例が増え、初期水稻農耕の平野部への進出、定着という過程が明らかにされつつある。原深町遺跡の周辺では、原談儀遺跡、鶴町遺跡などがあり、沖積地にある微高地を核として弥生時代前期から耕地の獲得が進められ、古墳時代前期には用水路を整備し定着化していることが知られている。原深町遺跡もこれらの遺跡と様相を同じくしているものの、分水溝と堰の規模から、給水される耕作地は取水口からかなり距離があったものと思われ、また分水溝は常時給水されていはず乾田経営のあり方を示す遺跡であるということができよう。このように高度に整備、獲得された灌漑用水施設は原深町遺跡の1か所だけではなく、上流にも堰と分水溝による耕地化された地域の存在が予想され、第7号溝はその地域からの排水溝として理解される。このように連続する灌漑法は鶴町遺跡で見られた用水路の補強、修復という単に自然の流れを固定した段階よりさらに進んだものと言うことができよう。次に原深町遺跡の時期であるが、出土遺物の石器は、ほとんどが弥生時代のもので生活跡が近くにあったことを物語っている。特に一遺跡としては多量に出土した石斧は、微高地の森林伐開や杭などの用材加工に使われたものと思われる。土器は分水溝や大溝で出土したが、夜臼式土器から中世の土師器、磁器まである。分水溝、大溝からは中世の上器は出土していないが、混在しており上器によって分水溝と大溝の各時期は決められない。大溝の土器は弥生時代中期後半から後期までの土器がなく、古墳時代の布留式併行の土器で終わっており、4世紀中頃から後半にかけての上器が主である。このうち弥生式土器は護岸用杭が打込まれている土層より出土しており大溝の利用が弥生時代中期後半から一時中断することが知られる。これらのことから弥生時代前期から中期前半までは鶴町遺跡の第1号溝のごとく微高地周縁部の自然河道を利用していにすぎず、堰と分水溝による耕地の拡大、即ち乾田経営は単に灌漑技術の向上のみではなく、1つの流域における共同体相互の結束を強くする必要があり、すくなくとも流域の指導的支配者の存在を裏付けるもので、原深町遺跡では古墳時代前期のことであった。

福岡市西区
原深町遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第71集
©1981年3月31日発行

編集 福岡市教育委員会

発行 福岡市中央区天神一丁目7-23
電話 (福岡)711-4667(文化課)

印刷 祥文社印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南西丁目15-17
電話 (福岡)411-1611(代表)

福岡市西区

原深町遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第71集

1981

福岡市教育委員会